

2023 年 5 月

食料安全保障月報 (第 23 号)



令和 5 年 5 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 5 月食料安全保障月報（第 23 号）

目 次

概要編

I	2023 年 5 月の主な動き	1
II	2023 年 5 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「ウクライナ侵攻と周辺国への穀物需給の影響」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

今月のコラム（新連載）

「シンガポールの食料事情①：輸入依存と食料や資源の自給率対策」

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2023/24 年度の生産量は前年度から 0.6%増の 45.2 百万トン
	＜カナダ＞	2023/24 年度の春小麦の播種は 5 月に入り進展
	＜豪州＞	2023/24 年度の生産量は前年度比 25.6%減の 29.0 百万トン
	＜EU27＞	2023/24 年度の生産量(USDA)は前年度比 3.5%増加の 139.0 百万トン
	＜中国＞	2023/24 年度の生産量は、史上最高の 140.0 百万トン
	＜ロシア＞	2023/24 年度の輸出量は史上最高の 45.5 百万トン
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の生産量は 5 年平均を 38.2%下回る
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	2023/24 年度の生産量は 11.2%増で史上最高の見通し
	＜ブラジル＞	2023/24 年度の生産量は引き続き高水準の見通し
	＜アルゼンチン＞	2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し
	＜中国＞	2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高、輸入量増加の見通し
	＜ウクライナ＞	ロシアの侵攻により、2023/24 年度の生産量は前年度比 18.5%減
3	コメ	1 5
	＜米国＞	2023/24 年度の生産量は増加、消費量は史上最高の見込み

<インド>	2023/24 年度の生産量・消費量とも史上最高の見込み
<中国>	南部の早場米の生育は順調
<タイ>	乾季米（全作付面積の約 2 割）はほぼ収穫済、雨季米の作付面積は減少見込み
<ベトナム>	冬春作の単収は増加見込み。輸出価格は 2021 年 5 月以来の高水準

II 油糧種子

大豆	2023/24 年度の生産量は 122.7 百万トンで史上最高の見込み	21
<米国>	2023/24 年度の生産量は 122.7 百万トンで史上最高の見込み	
<ブラジル>	2023/24 年度の生産量・輸出量は、史上最高の見込み	
<アルゼンチン>	2023/24 年度の大豆生産量は、前年度比 77.8% 増の見込み	
<中国>	2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高、輸入量増加の見込み	
<カナダ>	2023/24 年度の作付意向面積は前年度比 4.5% 増の見込み	

(参考 1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2023/24 年度)...	27
(参考 2) 単位換算表	27
(参考 3) 各国のクロップカレンダー一覧 (主要品目毎)	28

特別分析トピック

「我が国と世界の肥料をめぐる動向（更新）」

【利用上の注意】

表紙写真：ウクライナ・ドニエプロペトロフスク州の冬小麦（5 月 1 日撮影）
分げつ期を迎えているが生育状況は平年並み。

(概要編)

I 2023 年 5 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2023/24 年度の作況については、北半球では冬小麦等は生育期から成熟期、とうもろこし等その他の作物は作付け期を迎えている、なお、南米では 2022/23 年度産が収穫期を迎えている。

品目別にみると、5 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、豪州やロシアで豊作だった前年度よりは減産となるものの、前年度高温乾燥の被害にあったインドや EU 等で増産となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年 3 月には過去最高を更新した小麦の国際相場も侵攻時の水準を下回っている。ウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意は 5 月 17 日に再度 60 日間延長されたが、今後も注視が必要。

とうもろこしについては、ウクライナ等で減産となるものの、米国や EU 等で増産となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。大豆については、米国で増産となることに加え、今後作付けが行われる南米で前年度の干ばつから回復し、世界全体では前年度を上回る見通し。いずれの品目も旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、3 月の 126.5 から、4 月(最新値)は 127.2 に上昇（参考：2022 年 4 月 158.4、2021 年 4 月 122.1、2020 年 4 月 92.5）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値の約 8 割の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2023 年 5 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の5月見通しによれば、ウクライナの2023/24年度の小麦の生産量は1,650万トン（対前年度比21%減）、輸出量は1,000万トン（同33%減）の見通し。とうもろこしの生産量は2,200万トン（同19%減）、輸出量は1,650万トン（同35%減）の見通し（参考1）。

ウクライナ農業政策食料省による3月21日時点の予測によると、冬小麦の作付けがロシアの侵攻前であった2022/23年度と比較して減少したこと等から、2023/24年度の穀物・豆類の作付面積は1,024万ヘクタール（対前年度12%減）の見通し。そのうち、冬小麦は417万ヘクタール（同17%減）が作付けされ、春小麦は29万ヘクタール（同31%増）、とうもろこしは362万ヘクタール（同11%減）でそれぞれ作付け見込み。

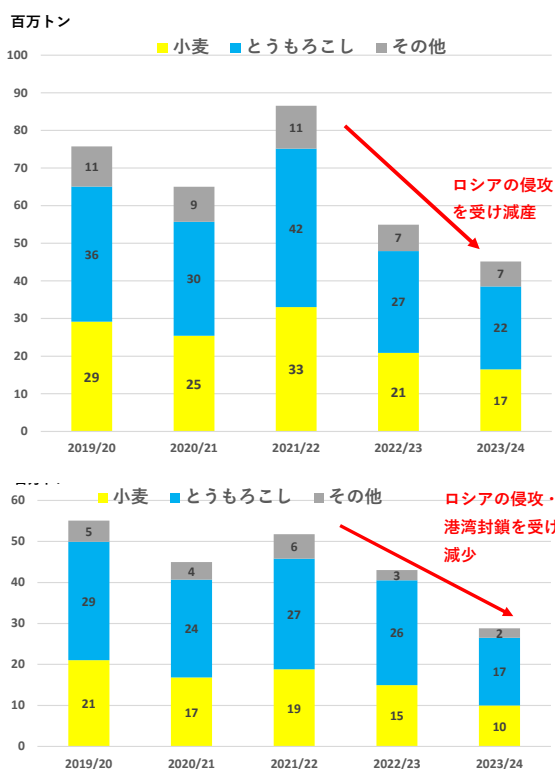
同省による3月21日時点の2023/24年度の穀物等の生産量の見通しは4,430万トン（対前年度17%減）。そのうち、小麦は1,660万トン（同19%減）、とうもろこしは2,170万トン（同15%減）の見通し。

黒海穀物イニシアティブの状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、同年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出再開。2022年8月～23年4月累計の輸出量は2,931万トン（うち、とうもろこし1,477万トン、小麦803万トン他）。目的地は中国、スペイン、トルコ等。（参考2）。本合意（当初の期限は2022年11月18日、その後2023年3月18日、5月17日の2度に亘り延長）は、さらに5月18日から60日間延長された。

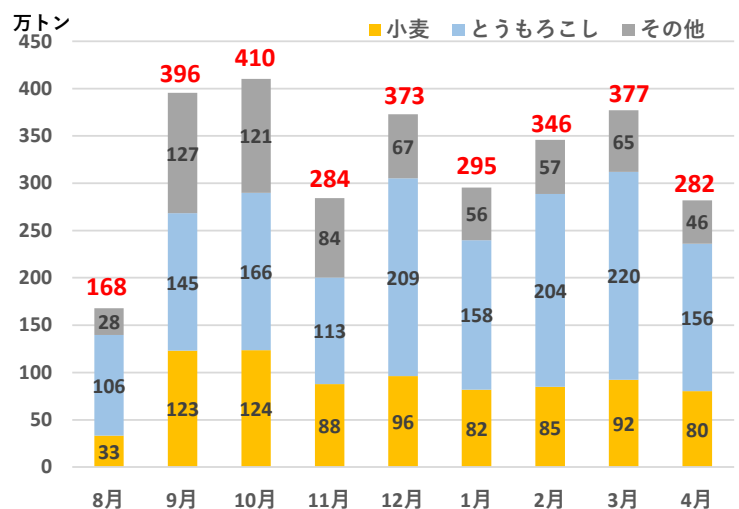
5月20日、ウクライナ・ゼレンスキー大統領も出席したG7広島サミットにおいて、黒海穀物イニシアティブの継続と履行を求める首脳声明「強靱なグローバル食料安全保障に関する広島行動声明」を採択した。

（参考1）小麦ととうもろこしの生産量（上）、輸出量（下）の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.5） 注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）黒海からの輸出量の推移（月毎）



出典：国連資料（2023.4月末時点）

注：その他はひまわり油・大麦など陸路による輸出を除く。

1 2022/23 年度産ブラジル産大豆、とうもろこしは史上最高の豊作見通し

ブラジル食料供給公社（CONAB）の5月穀物レポート（2023.5.11）によれば、ブラジルの2022/23年度の大豆については、収穫がおおむね終了し、生産量は史上最高の1億5,481万トン（対前年度23%増）。一方、とうもろこしについては、夏とうもろこしは、収穫がおおむね終了し、生産量は2,705万トン（対前年度8%増）、大豆収穫後に作付けされた冬とうもろこしは、生育期を迎えており、天候に恵まれ生産量は9,849万トン（対前年度12%増）となり、とうもろこし全体で史上最高の1億2,554万トン（対前年度11%増）と増産の見通し。

米国農務省（USDA）の5月需給報告でも、ブラジル産が米国産に比べて価格競争力があることを背景に、世界の貿易に占めるブラジルの輸出シェアは2022/23年度で大豆56%、とうもろこし30%とそれぞれ首位となった。特に、中国向けの大豆、とうもろこし輸出が増加する見通しである。

2 2023/24 年度の米国の作付けはコーンベルトが天候に恵まれ順調に進展

米国では、とうもろこし、大豆、春小麦の作付けが開始されたが、コーンベルトは天候に恵まれ、とうもろこし、大豆の作付けがおおむね順調に進展している。一方、春小麦の作付けは、一部で融雪による播種作業遅延等の影響を受けて遅れている。

USDAによれば、品目ごとの作付進捗率は、とうもろこしは5月14日時点で65%進展（前年同期45%、過去5年平均59%）、大豆は49%（前年同期27%、過去5年平均36%）ととうもろこしと大豆は過去5年平均よりも進んでいる。一方、春小麦は40%（前年同期37%、過去5年平均57%）と前年度より進展しているが、過去5年平均より遅れている。特にモンタナ州など北部で遅れている。また、冬小麦の出穂率は49%（前年同期46%、過去5年平均48%）と進展しており、作柄評価は良からやや良の比率が29%（前年同期の27%）となっており、乾燥の影響はやや緩和されている。引き続き生育期の天候に注視が必要。

3 2023/24 年度のカナダ産小麦の作付意向面積は前年比6%増の見通し

カナダ統計局が4月26日付けで公表した作付意向調査結果では、小麦や大豆の作付面積は前年と比較し大きく増加する見通し。主にカナダ西部の平原州（東からマニトバ州、サスカチュワン州、アルバータ州）で栽培される小麦は1,091万ヘクタール（前年比6.2%増）であり、そのうち春小麦（デュラム除く）は785万ヘクタール（同7.5%増）と増加が目立っている。デュラム小麦は245万ヘクタール（0.9%増）となっている。

また、菜種は874万ヘクタールで（同0.9%増）、大麦は287万ヘクタール（同0.6%増）となっている。

一方、カナダ東部のオンタリオ州からマニトバ州にかけ栽培される大豆は223万ヘクタール（同4.5%増）となっている。なお、本調査は例年と異なり、前年12月時点で生産者に調査を行っており、その後の動向については留意が必要である。

カナダ西部は、4月時点で、冷涼で乾燥した天候であったが、4月末以降、乾燥傾向は緩和されており、作付けは5月に入り本格化している。

II 2023 年 5 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、4 月末、220 ドル/トン台後半で推移。5 月に入り、黒海経由のウクライナ産穀物輸出の期間を巡る合意の不透明感から、230 ドル/トン台後半に値を上げたものの、米国中西部東部の冬小麦の作柄が良好なこと等から、220 ドル/トン台半ばに値を下げた。その後、米国プレーンズの干ばつによる冬小麦の減産懸念や米国農務省需給報告において、米国の2023/24年度の期末在庫量が市場予想を下回ったことから240 ドル/トン台前半に値を上げたものの、黒海からの穀物輸出の延長合意や米国産の低調な輸出需要から値を下げ、5 月下旬現在、220 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、4 月末、250 ドル/トン台で推移。黒海経由のウクライナ産穀物輸出の期間を巡る合意の不透明感から、250 ドル/トン台後半まで上昇。その後、ブラジル産や米国産の豊作見通し、米国産の中国からの購入キャンセル等により下落し、5 月下旬現在、210 ドル/トン台後半で推移。

コメは、4 月末、510 ドル/トン台半ばで推移。5 月に入り、アセアン・アフリカ諸国、特にインドネシア、フィリピン、南アフリカからの需要継続等から、5 月中旬現在、530 ドル/トン台前後で推移。

大豆は、4 月末、530 ドル/トン台で推移。黒海経由のウクライナ産穀物輸出の期間を巡る合意の不透明感から、530 ドル/トン台後半まで値を上げた。その後、米国農務省需給報告において、2023/24年産の米国産大豆の生産量が過去最大となったこと、米国主産地での作付けに適した天候となるとの予報、ブラジル産との輸出競争の激化等から値を下げ、5 月下旬現在、480 ドル/トン台で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より 3.0%増の 28.2 億トン。消費量は、前年度より 1.5%増の 28.1 億トンとなり、2019/20 年度以来、4 年ぶりに生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加するが、消費量も増加するため、期末在庫率は、前年度を下回り 27.4%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.2 億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦で減少も、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.1 億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加し、5.0 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.7 億トンと前年度より増加、期末在庫率は、前年度より低下する見込み。

（注：数値は 5 月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

IV 2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.7 億トン。消費量は前年度を上回り 6.5 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は 2 年ぶりに前年度を上回る 21.5%となる見込み。

（注：数値は 5 月の USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：ウクライナ侵攻と周辺国への穀物需給の影響

ロシアの侵攻を受け行き場を失ったウクライナ産農産物の東欧諸国への流入に対し、東欧5か国が対策を強く求めたため、EUは東欧5か国へのウクライナ産穀物の輸入（トランジットを除く）を6月5日まで暫定的に禁止。トルコもウクライナ産の小麦等への輸入税の賦課を実施した。一方、今後の動向が懸念されていたウクライナの黒海穀物イニシアティブについては、5月17日に60日間再々延長された。ウクライナ侵攻がもたらしている周辺国への影響を中心に最近の情勢をまとめた。

注：文中の「2023/24年度」等は穀物年度で、EUの小麦は2023年7月から2024年6月。国や作物によって異なる（品目別需給編P.27参照）。

1 EUのウクライナからの輸入状況

(1) 輸入状況

EUにおける2022/23年度のとうもろこし生産は、受粉期である7～8月に500年に一度ともいわれた干ばつの影響を受けたため、対前年度26%減の5,297万トンと大きく減産となった。米国農務省（USDA）によれば、EUの輸入量は前年度に比べ24%増の2,450万トンと大きく増加し、中国の輸入量を上回り世界1位の輸入国となる見通し。

一方、小麦生産は、干ばつによる高温乾燥が収穫期と重なったことから、影響は軽微であったものの、とうもろこしの減産を受け、飼料用向け小麦の輸入量が大きく増加した。

小麦・とうもろこしのEUによる輸入に占めるウクライナ産の割合は双方とも全体の5～6割を占めており、前年の侵攻開始直後はウクライナから陸路（鉄道、トラック等）で東欧へ、さらにロシア・ウクライナ・トルコ・国連による黒海イニシアティブによる8月以降の輸出再開からは、海路でスペインやイタリア等向けに輸出されてきた。

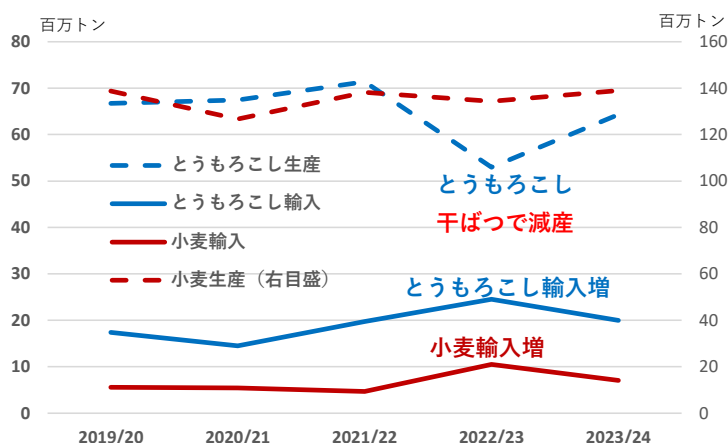
(2) 東欧諸国の輸入規制

前年10月末のロシアによるイニシアティブからの一時撤退表明や、検査官の人員不足等による検査遅れ等の影響を受け滞船が恒常化していたこともあり、黒海イニシアティブ合意後も陸路での東欧向け輸出は継続されてきた。

この結果、東欧諸国（ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア）ではウクライナ産穀物を始めとする農産物が流入して国内市場に溢れ、倉庫等の保管施設は満杯となり、価格が下落し、東欧諸国の穀物需給に影響を与える懸念が発生した。さらに、本年3月中旬に決定されたイニシアティブの再延長がロシアの主張で60日間に限定された結果、その期限が東欧諸国の小麦の収穫期を迎える5月中旬と重なったことを受け、（イニシアティブが再延長されない場合の）東欧への更なる流入が懸念された。こうしたことを背景として、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリアの4か国は4月中旬、ウクライナ産穀物を中心とした農産物の輸入禁止をそれぞれ公表した。

これに対し、欧州委員会は5月2日から、①穀物等（小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種）の上記4か国にルーマニアを加えた東欧5か国への輸入についてトランジットを

図1 EUの穀物生産・輸入量推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.5）を農林水産省で加工

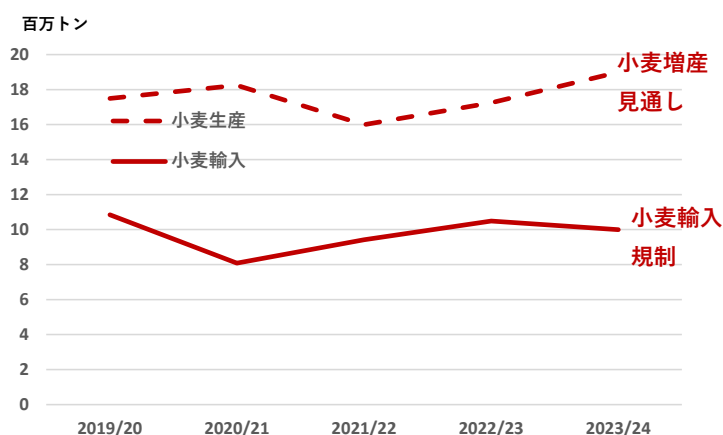
除いた禁止（暫定的に6月5日まで）、②ウクライナ産農産物輸入の免税の1年間延長、③東欧5か国の農業者向けとして1億ユーロの支援を決定した。しかしながら、仏、独等のEU12か国は、本措置が全加盟国の承認手続を経ていないとして反発している。

2 トルコの輸入状況

（1）ウクライナからの輸入

トルコは例年1,600～1,800万トン的小麦を生産しているところ、これに加えて年間1,000万トン近く的小麦を輸入している。当該輸入のほとんどはロシア産、ウクライナ産であるが、その多くは加工貿易用途の小麦粉としてイエメン等、パスタなど二次加工品としてベネズエラ等へそれぞれ再輸出されている。特にウクライナからの輸入については、トルコのエルドアン大統領が自ら調整した黒海穀物イニシアティブによる海路に加え、ルーマニアなどを経由した陸路での輸入も行われてきた。

図2 トルコ的小麦生産・輸入量推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.5）を農林水産省で加工

（2）輸入規制の実施

EU加盟の東欧各国がウクライナ産穀物に関し輸入規制を公表する中、4月下旬にはトルコも、これまで無税だった小麦等の穀物輸入に対し130%の関税を5月から賦課すると公表するとともに、6月以降小麦輸入の禁止を検討しているとの報道がなされた。これは、5月14日の大統領選を控え、東欧諸国が輸入を禁止したウクライナ産小麦がトルコに流入し、これから収穫期を迎える国内産小麦の価格に影響するのではとの懸念を回避するためとみられている。なお、これに関し、4月26日、ウクライナ農業政策食料省は免税されているウクライナ産穀物のトルコへの輸入は第3国向けの加工貿易にかかるものであると改めて明示した。

3 黒海穀物イニシアティブとロシア産穀物等の輸出に係るメモランダム の再々延長

（1）ロシアの意向と輸出動向

前年7月に合意した黒海穀物イニシアティブと同時に、ロシア産穀物や肥料の輸出を促進するメモランダムについても国連とトルコ、ロシアの間で合意されている。

この中で、ロシア側は、ロシアの金融機関のSWIFTからの排除によるロシア産穀物の輸出決済への影響の改善や、ウクライナ侵攻以降休止している、肥料原料としてのロシア産アンモニアのパイプラインを利用したオデーサ港経由での輸出再開を求めており、こうした状況が改善されない限り、穀物イニシアティブの延長は合意しないと主張してきた。

こうした中で、ロシアの穀物輸出については、史上最高であった生産量を背景に、2022/23年度の小麦輸出量は前年度より35%増加しており、世界貿易に占めるシェアは21%に拡大している。なお、輸出先は、従来と変わらず中東、北アフリカ諸国が中心とな

っており、これらの多くは対露経済制裁を行っていない。

これから収穫期を迎える 2023/24 年度の小麦生産に関しては、史上最高だった 2022/23 年度よりは減産となるものの、USDA の 5 月見通しによれば、生産量は過去 5 年平均

(7,956 万トン) を上回る 8,150 万トンで、輸出量は史上最高の 4,550 万トンの見込み。

(2) 黒海穀物イニシアティブとメモランダム の再々延長までの動向

前年 11 月、本年 3 月と延長されてきた黒海穀物イニシアティブは、ロシアによるウクライナ侵攻が継続する中、4 月下旬に国連グテーレス事務総長からウクライナ、ロシア、トルコ宛に再々延長の検討に関するレターが発出され、その後、ロシア側の主張する 5 月中旬の期限に向けて協議が行われた。これに先立ち、5 月 14 日には、トルコの大統領選挙が実施され、黒海穀物イニシアティブを仲介した現職のエルドアン大統領と野党のケマル・クルチダルオール氏が伯仲し、同月 28 日の決選投票にもつれ込んだ。

このような情勢の中、黒海穀物イニシアティブの今後の動向が懸念されていたが、期限を迎えた 5 月 17 日には、トルコのエルドアン大統領が、ロシアが 60 日間の再々延長について合意したと発表した。

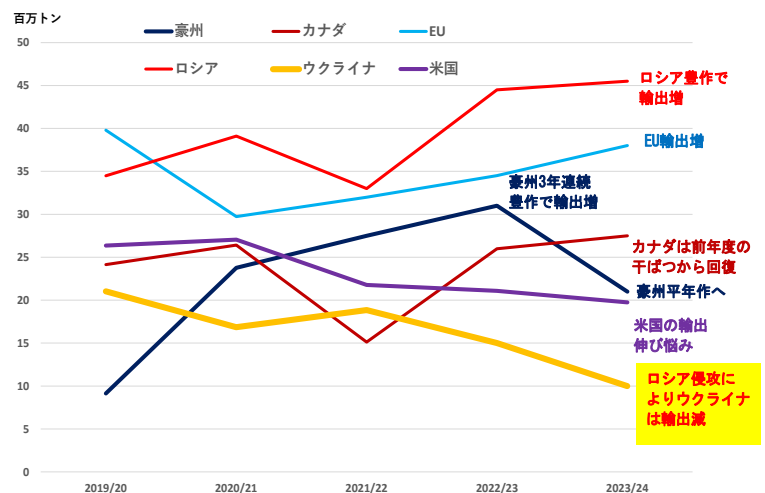
4 国際価格・貿易へ影響

(1) 小麦

小麦のシカゴ相場については、黒海穀物イニシアティブが合意された前年 7 月以降下落し、11 月、3 月の期限とその延長を迎え、上下を繰り返してきた。4 月に入り、米国やカナダの作付意向面積の増加見通しなどから下落傾向で推移し、米国の冬小麦産地の作柄改善から 5 月 2 日にはブッシェル当たり 5 ドル 96 セントと 6 ドルを下回った。その後、東欧やトルコのウクライナ産穀物の輸入制限、黒海穀物イニシアティブの延長に対する不透明感から上昇したものの、その合意延長を受け、5 月 19 日にはブッシェル当たり 6 ドル 5 セントとなっている。

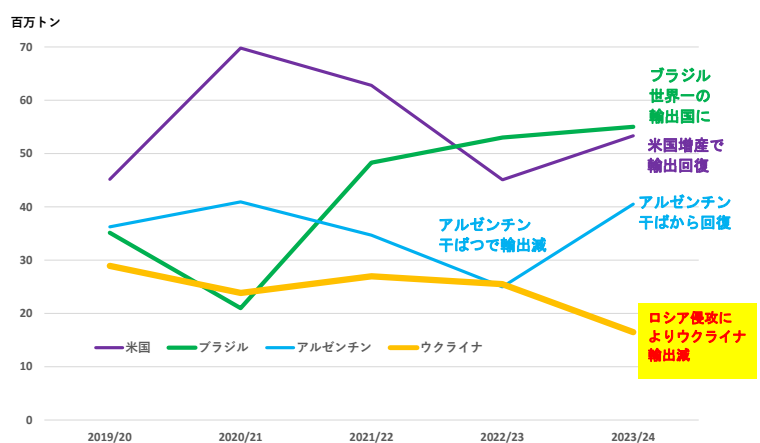
2023/24 年度の世界の小麦生産量は、前年度を上回り史上最高となると予想されており、北半球ではこれから冬小麦が収穫期を迎える。しかしながら、ウクライナでは、戦争の影響からの作付面積の減少による減産見込みに加え、天候が乾燥傾向となっており、今後の生育等の動向に注視が必要である。

図 3 小麦の主要輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2023.5)を農林水産省で加工

図 4 とうもろこしの主要輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2023.5)を農林水産省で加工

(2) とうもろこし

とうもろこしの相場は、小麦と同様、黒海穀物イニシアティブの合意を受けて下落し、それ以降上下を繰り返してきた。4月以降、米国の作付意向面積の増加やその後の順調な作付け進展、ブラジルの2年連続豊作見通しなどから下落傾向で推移してきた。その後、5月に小麦同様に一時上昇したが、黒海穀物イニシアティブの合意延長を受け、5月19日には期近物で1年6か月ぶりのブッシェル当たり5ドル55セントまで下落した。

2023/24年度の世界のとうもろこし生産量は、米国で史上最高の豊作の見通しなどで史上最高が見込まれている。しかしながら、ウクライナでは小麦と同様、戦争の影響等を受け作付面積が減少し、減産が見込まれている。

(3) 今後の動向

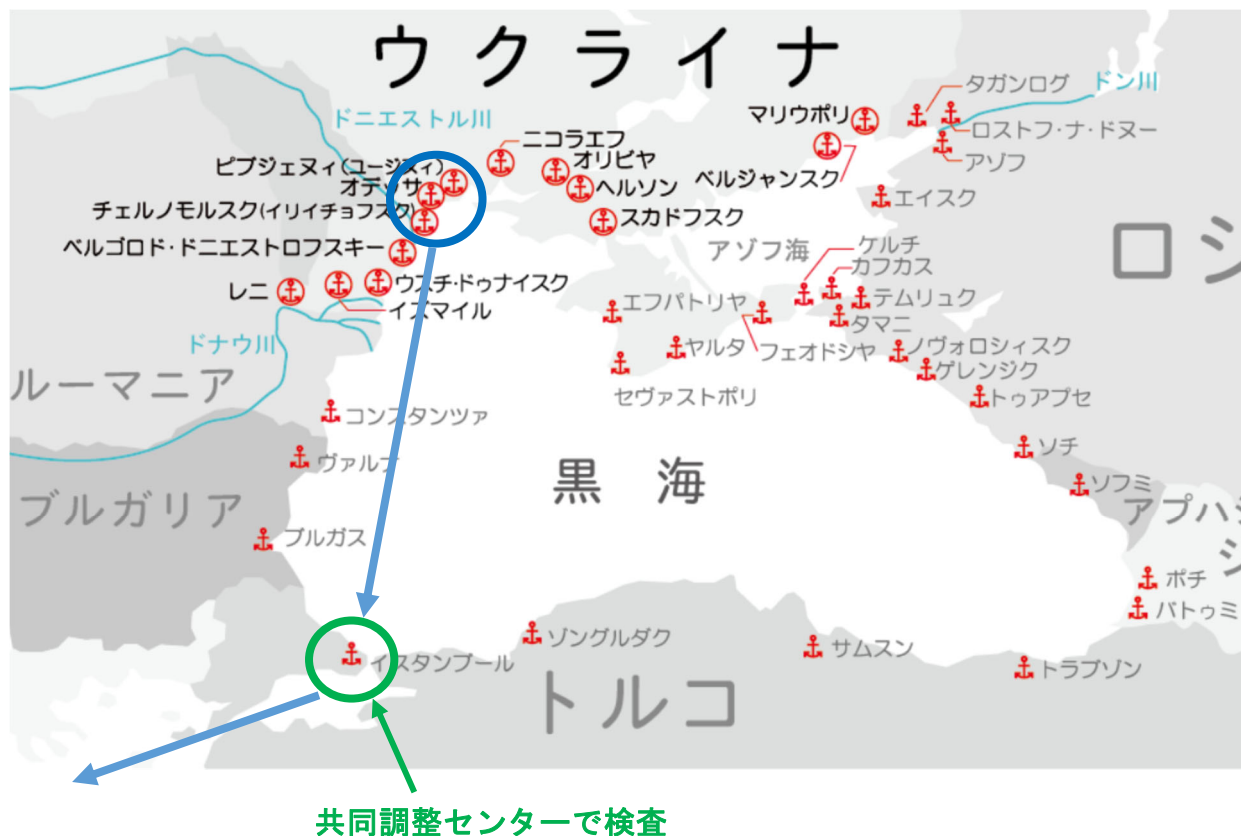
北米では、現在、春小麦、とうもろこし、大豆が作付期から初期生育期を迎えており、おおむね順調である。一方、前年度史上最高の豊作となった豪州でも冬小麦や菜種が作付けから初期生育期を迎えているが、ラニーニャ現象の収束により乾燥傾向となっている。

今後、主産国の天候に加え、ウクライナ情勢などが相場の変動の要因となるとみられるが、特に、米国産とうもろこしが受粉期を迎える7月が、再々延長された黒海穀物イニシアティブの期限と重なることもあり、国際穀物需給や国際相場の動向について引き続き注視が必要である。

<黒海穀物イニシアティブとロシア産食品・肥料輸出メモランダム>

黒海穀物イニシアティブ	ロシア産食品・肥料輸出メモランダム
ウクライナの黒海から穀物の安全な輸出を通じて、世界の食料価格を安定化	ロシア産の食品および肥料の世界市場への展開についての協力を通じて、世界の食料生産や価格を安定化
国連・ウクライナ・トルコ・ロシア (国連・ウクライナ・トルコの3者及び 国連・ロシア・トルコの3者でそれぞれ署名)	国連・ロシア
2022年7月22日に120日間合意 (10月29日～11月2日まで一時ロシア撤退表明) 同年11月19日から120日間延長 2023年3月19日以降60日間再延長 (ウクライナ側は120日間延長を主張) 同年5月18日以降60日間再々延長	同左
イスタンブール付近に共同調整センターを設置し、ウクライナ産農産物輸出にかかる入港前後の船舶を検査し、安全運航を保証。 オデーサ、チェルノモルスク、ピブジェヌイ3港を指定	ロシアの穀物や肥料輸出を促進 欧米諸国の経済制裁の影響の除外、ウクライナのオデーサ港からのアンモニアの輸出促進など
2022年8月～2023年4月まで ウクライナ産農産物計で2,931万トン輸出 (ほかに陸路での輸出あり) 45か国向けに輸出(中国、スペイン、トルコなど)	<穀物> 2022年8月～2023年4月まで、ロシア産穀物 4,720万トン輸出(前年同期3,509万トン、33%増) <肥料> 2022年計で、ロシア産肥料193億ドル輸出 (対前年54%増)
ロシアの検査の遅延行為などで滞船発生	ロシア側は欧米の経済制裁で穀物輸出に支障があり、改善が進んでいないとしているが、穀物輸出そのものは順調

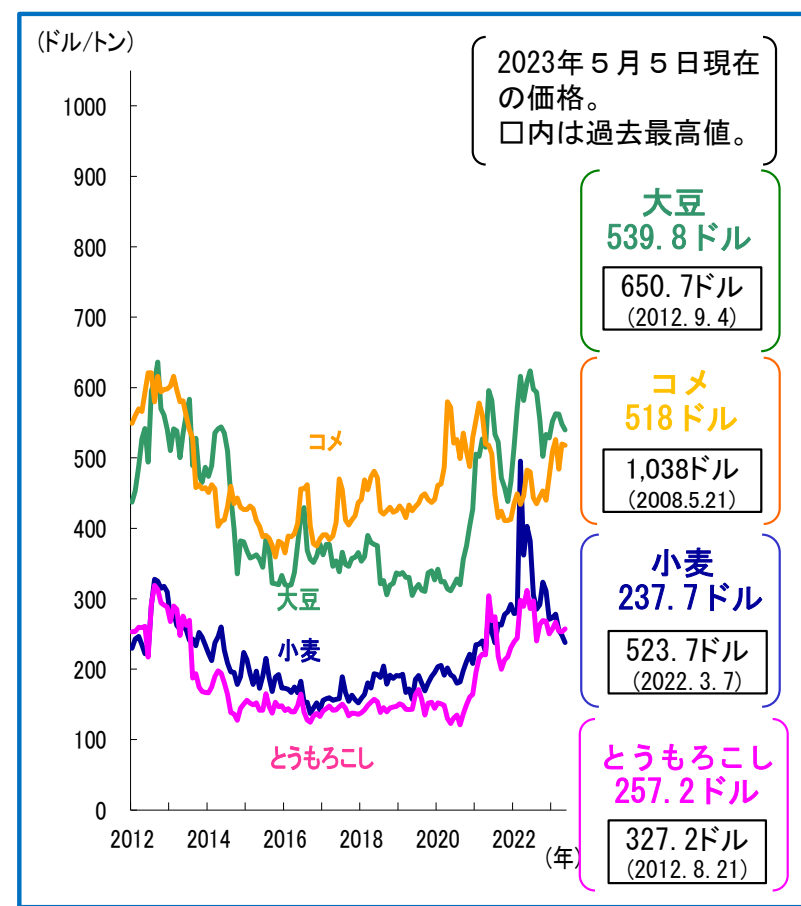
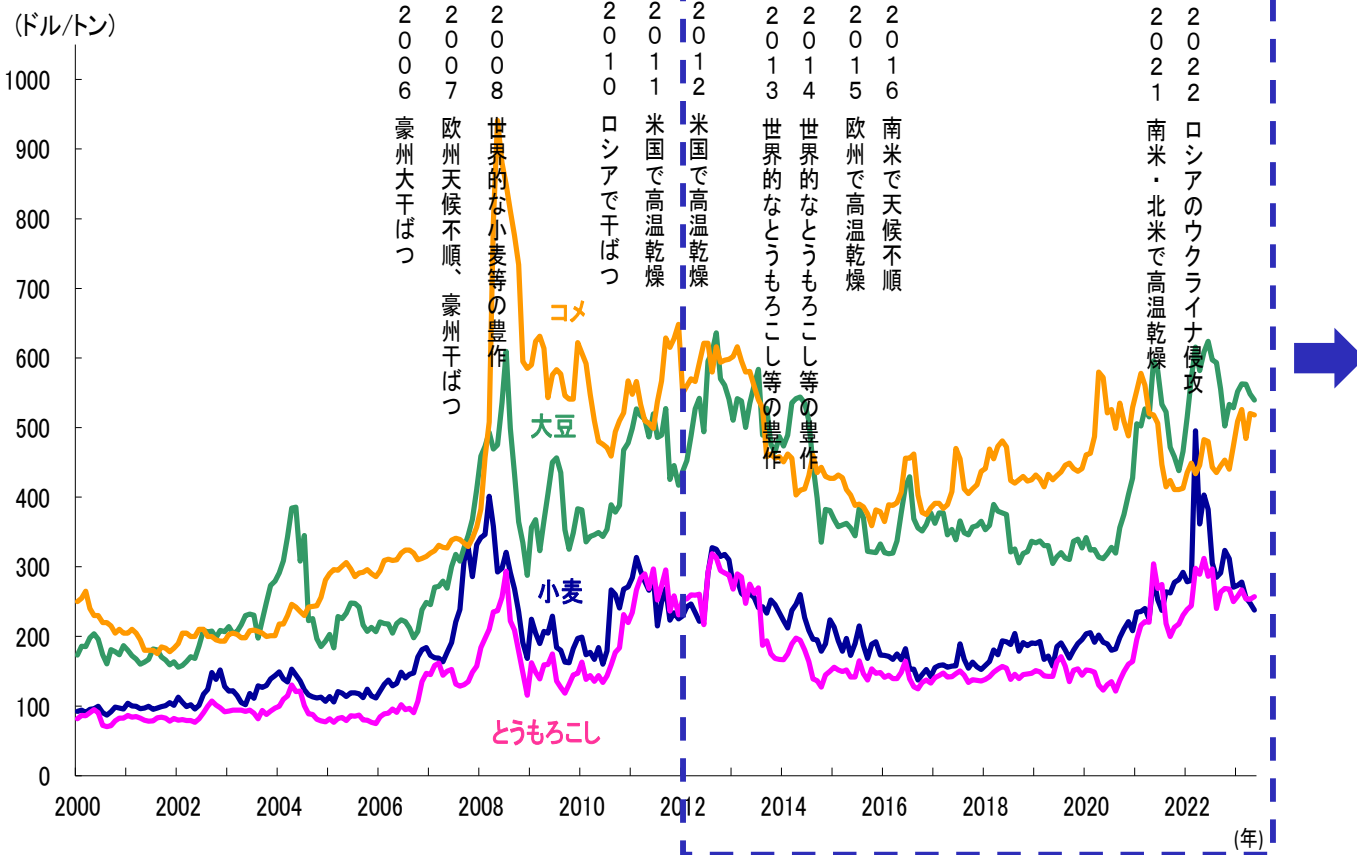
<黒海港湾地図>



資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの輸出再開などもあり低下。一方で、とうもろこし、大豆は、アルゼンチンの干ばつから依然として高水準。コメは、2013年以降低下も、2020年ベトナムの輸出枠設定等で一時的に上昇。2022年9月以降、インドの輸出規制やインドネシアの需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



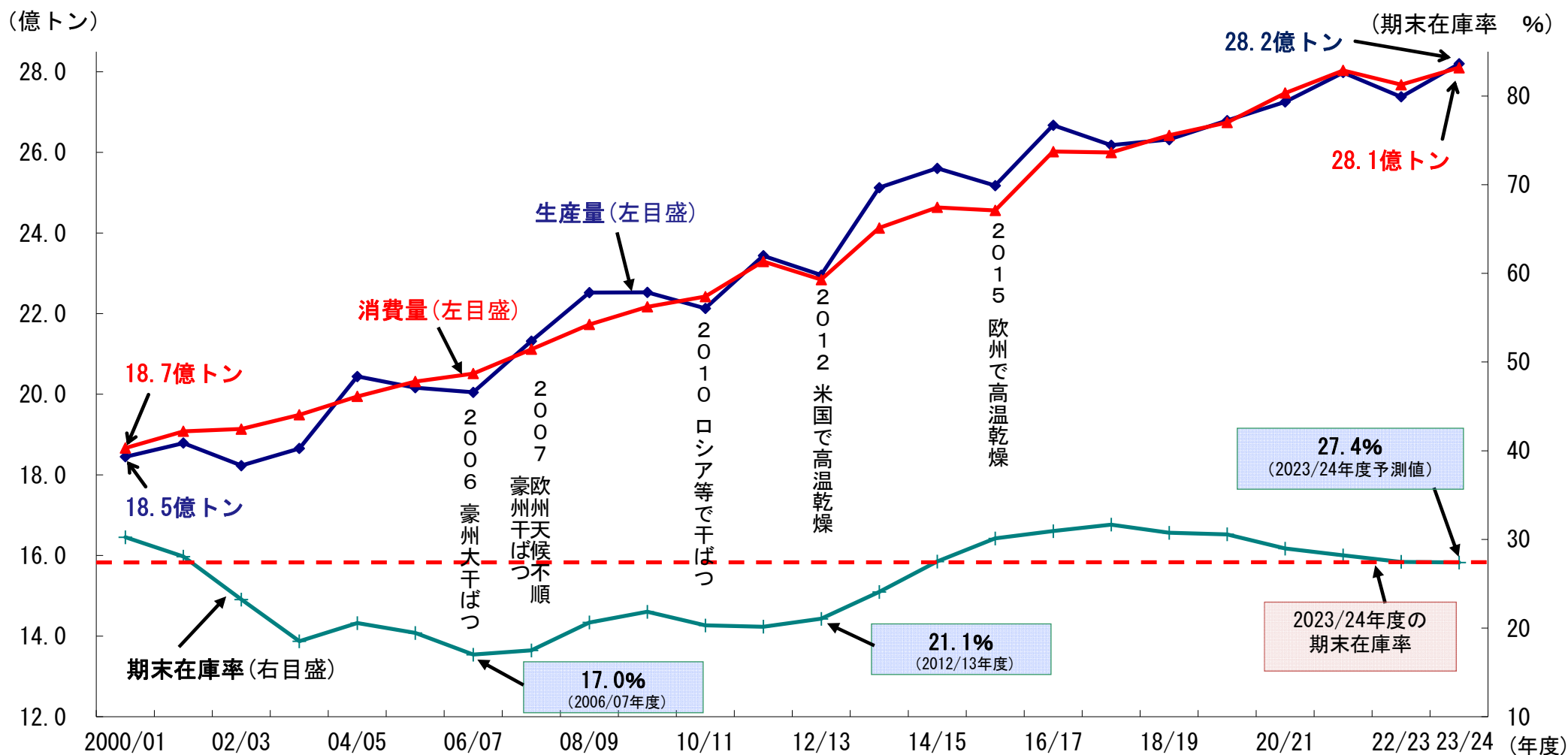
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セトルメント）である（但し、4月は7日が休場であったため、6日の価格）。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2023/24年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2023/24年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.4%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

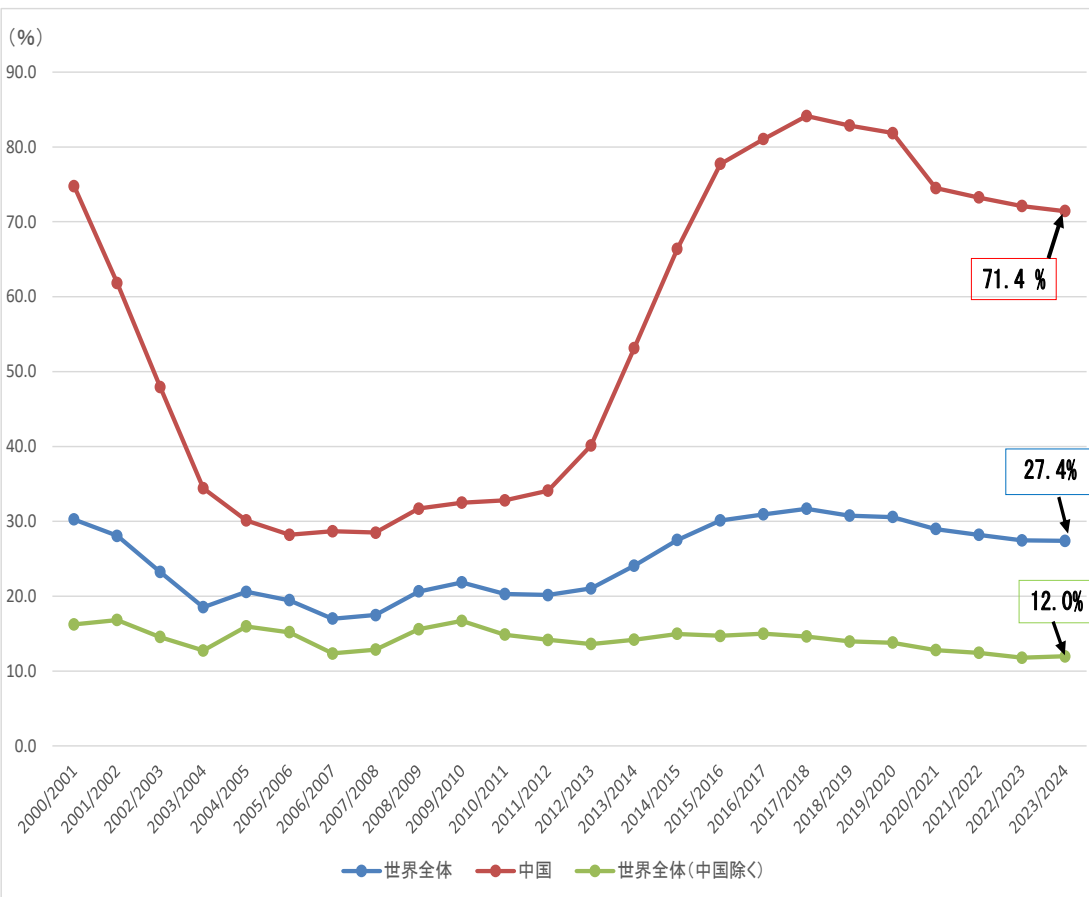


資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(May 2023)、「PS&D」

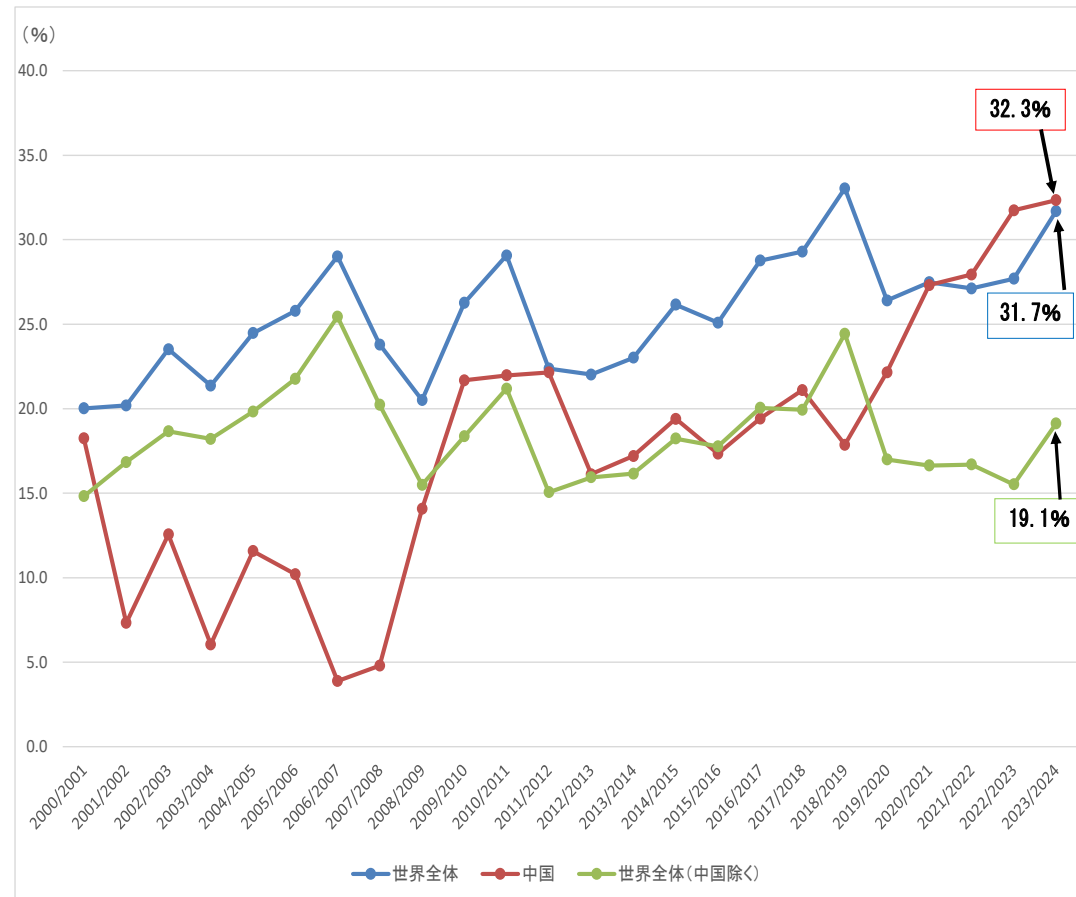
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(May 12, 2023)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

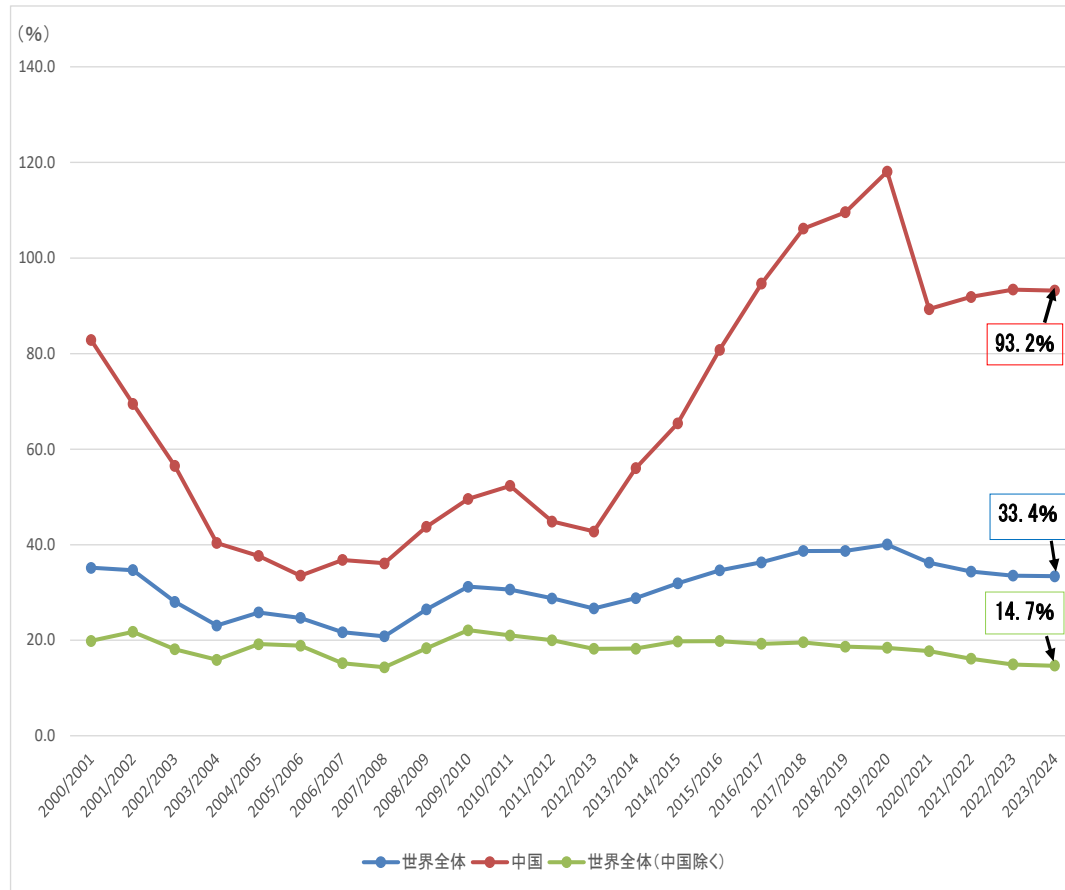
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

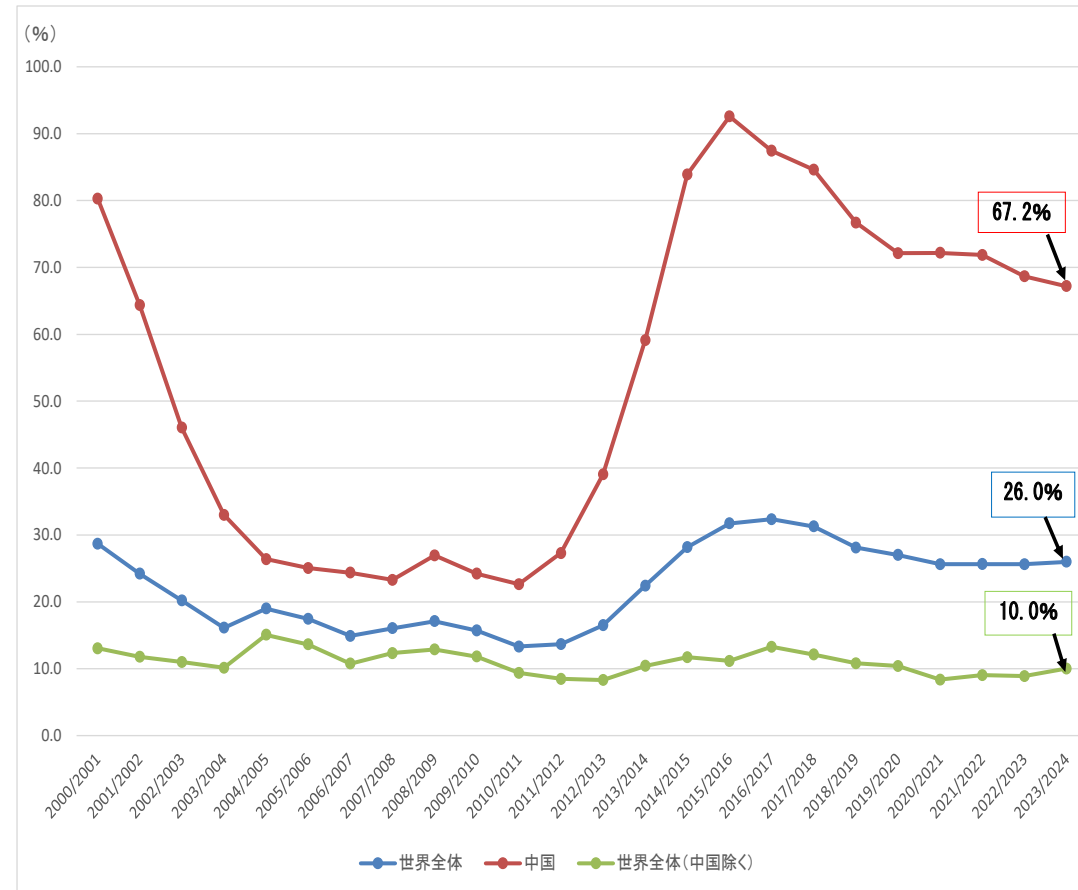
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(May 12, 2023)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

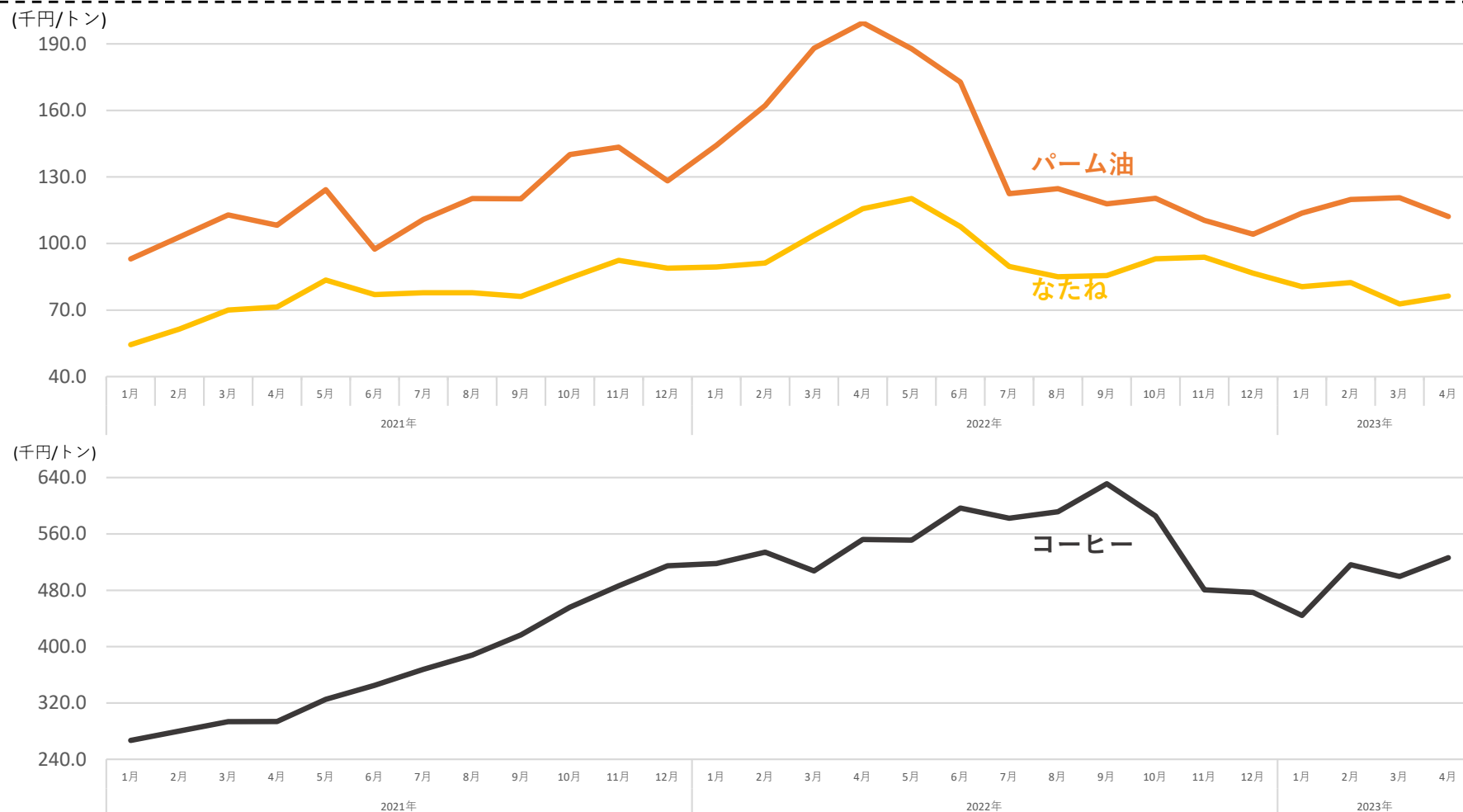
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 4－1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年に熱波による減産があったが、2022年は回復基調から平年並みの収量に近づいた**。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも前年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことにより市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。



2023年5月20日現在
□内は2020年4月以降の最高値。

パーム油
112.1 千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

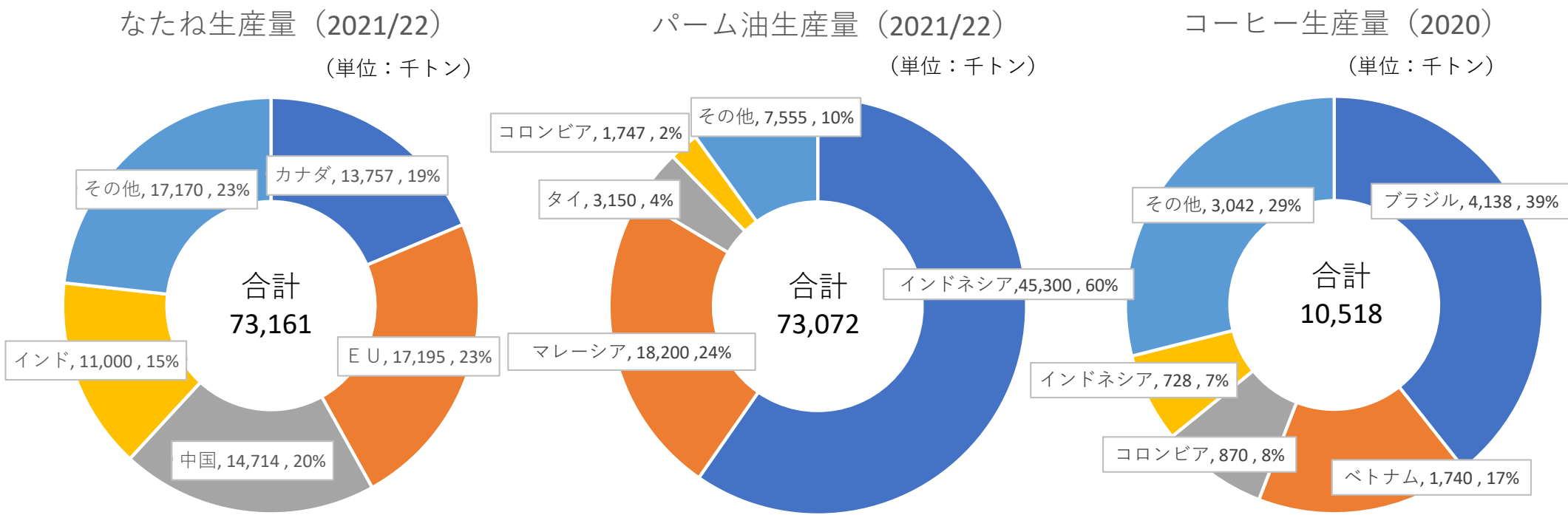
なたね
76.4千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

コーヒー
526.2千円/トン
631.1千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

○主要生産国の生産状況



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade） ※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade） ※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合	パーム油	輸入量	割合	コーヒー	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%	マレーシア	500	78.7%	ブラジル	112	28.7%
オーストラリア	853	40.6%	インドネシア	135	21.3%	ベトナム	106	27.2%
その他	0	0.0%	その他	0	0.0%	コロンビア	47	12.1%
合計	2,101	100.0%	合計	635	100.0%	その他	125	32.1%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205） ※財務省「貿易統計」（HSコード：1511） ※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年			
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.9
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年			
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年			
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
コ二	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
 注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
 2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年4月の国内の加工食品の消費者物価指数は107.1～163.0（前年同月比で6.3%～30.1%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年10月～令和5年4月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4		R5				
品目	平均	平均	平均	平均	平均	11月	12月	1月	2月	3月	4月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	114.2	114.1	115.0	115.0	114.3	114.8	6.3%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	114.2	111.6	113.1	114.6	113.1	113.9	13.8%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	109.1	109.9	110.3	110.4	112.0	114.5	11.0%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	162.7	162.5	164.0	163.9	164.3	163.0	21.0%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	104.9	104.4	104.5	105.9	106.5	107.1	6.4%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	136.1	137.4	137.3	137.2	139.0	148.6	20.0%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	118.6	117.5	119.2	121.4	121.9	133.9	30.1%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	98.5	98.7	98.6	98.6	98.9	109.8	10.8%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	107.9	108.3	108.7	109.4	110.2	111.6	9.0%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年10月～令和5年5月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4		R5						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	111.3	112.2	111.5	110.7	111.3	111.3	111.3	0.0%	6.4%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	110.6	110.6	111.2	111.2	110.6	110.6	111.8	1.1%	12.9%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	107.2	107.6	108.5	108.1	110.2	113.7	114.1	0.4%	11.4%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	161.2	161.2	162.2	162.2	161.9	161.2	161.2	0.0%	23.2%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	102.7	102.7	102.3	103.4	103.6	105.2	105.0	-0.2%	5.4%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	128.9	128.3	129.6	128.9	130.3	137.9	142.7	3.5%	21.8%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	115.4	110.9	116.9	118.4	117.9	129.3	130.3	0.8%	24.7%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	98.6	98.6	98.6	98.6	98.4	108.9	110.3	1.3%	11.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2023年6月号（5月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）肥育牛出荷頭数の減少により、肥育牛価格は依然として堅調を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002756.html

（EU）牛飼養頭数、牛肉生産量の減少は23年も続く見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002757.html

（豪州）成牛と畜頭数の増加により、牛肉輸出量も大幅に増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002758.html

（ブラジル）23年の牛肉生産量は2年連続で増加の予測

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002759.html

◆豚肉

（米国）豚飼養頭数、3年ぶりに前年を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002760.html

（カナダ）と畜処理能力の低下を背景に、23年の豚肉生産量は減少の予測

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002761.html

（中国）と畜頭数の増加を受け、豚肉価格は引き続き低水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002762.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）生乳出荷量は増加も、生乳取引価格や乳製品価格はともに下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002763.html

（豪州）生乳生産量の減少が続く中、次年度乳価への注目が高まる

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002764.html

（NZ）22/23年度の集乳量、前年度を下回る見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002765.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）アルゼンチンの生産量が5年ぶりに4000万トンを下回る見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002766.html

（世界：大豆）アルゼンチンは下方修正続くも、ブラジルの増産などで大豆期末在庫は微増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002767.html

（米国）米国の輸出量は前年度比25.1%減と前月から据え置き

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002768.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002769.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料:FAO「Food Price Index」(2023.5)より作成

注:穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

新連載!!【今月のコラム】

本号より、不定期・新連載として【今月のコラム】をスタートいたします。

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介いただけたらと思います。

★シンガポールの食料事情①：輸入依存と食料や資源の自給率対策

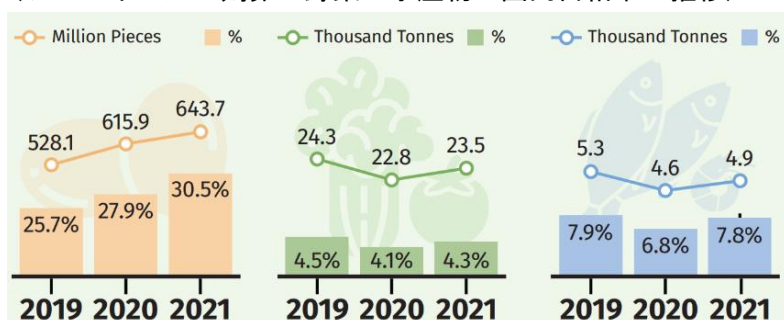
1. 狭い国土と食料問題

さて、皆さんのシンガポールのイメージというと、マーライオン・お金持ち・都市国家、という感じでしょうか。シンガポールは「地図で示すと『赤い点』にしかない小さな国」という揶揄で「レッドドット」とも呼ばれており、広さは日本の東京 23 区ほどしかありません。

その土地に住む約 550 万人の食料を賄うのは容易ではありません。狭い国土であり湿地帯も多く、住宅地や工業地との競合もあり、国内で食料生産に利用できる土地はわずか 1%程度といわれています。日本の農用地は 14%といわれていますので、いかに狭いかが分かります。

その結果、シンガポールの食料自給率は 4%で最も自給出来ている鶏卵でも 30.5%です。その他に高いものでも水産物 3.7%、野菜 4.1%となっており、それ以外の食料はほぼ全量輸入に依存しています。

(シンガポールの鶏卵・野菜・水産物の国内自給率の推移)



2. 食料自給率向上対策

このような状況の下、2019 年に政府は食料自給率を 2030 年に 30%まで向上させる政策「30 by 30」を決定しました。一方、現実的には国内で生産可能な農林水産品は限られますので、現在も比較的国内で生産されている鶏卵・野菜・水産物（魚・エビ養殖）の生産に重点を置きつつ、それらの投資誘致や技術開発を積極的に支援することとしています。

例えば野菜工場や培養肉研究も盛んです。家畜の細胞だけでなくエビやウナギなどの水産物細胞を使った培養肉を研究している企業もあります。加えて、シンガポールでは 2020 年に世界で初めて培養肉の販売が承認され、既に Good Meat 社の培養鶏肉はレストラン「Huber's Butchery」で販売されており一般消費者も食べることができます。他方、残念ながらまだ流通量が少なく月に数回の予約はすぐ埋まってしまう状況です。

(シンガポールの植物工場例)



(Good Meat 社の培養鶏肉)



3. 水・エネルギーの海外依存

食料自給率に対する国民の関心は、日本と同様、ウクライナ情勢による穀物高騰や食料品インフレによって非常に高まりました。例えば、鶏肉は多くをマレーシアから輸入していますが、飼料高により一時的にマレーシアが輸出制限した際は日々その動向が大きく報道されましたが、食料を海外に依存している国としては危機感がより身近に感じられるようです。

加えて、あらゆる物を海外に依存している不安感・危機感が常にこの国に根差しています。シンガポールは降水量は多いですが、国土が狭く山が無い（最も高い標高で 163m）ため、保水力に乏しい土地です。そのため、政府は積極的に貯水池増設や海水淡水化に取り組んできましたが、それでもいまだに国内の飲用水需要の半分はマレーシアからの輸入水に依存しています。

一方で、2003 年からは、下水再生水を逆浸透や紫外線照射などで更に浄化処理した NEWater（ニューウォーター）という飲用再生水でも国内の水需要を補っており、現在既に国内需要の 40%を賄っています。なお、昨年販売されたこの再生水を利用したビール「NEWBrew」も話題となりました。

（シンガポールのクラフトビール会社 Brewerkz が開発した「NEWBrew」）



電力の依存も例外ではありません。シンガポールの全電力の 95%は天然ガス由来で、かつ天然ガスは主にパイプラインによりインドネシア・マレーシアから輸入しています。再生可能エネルギーについても開発に取り組んではいますが、前述のように水資源に乏しいため水力発電は難しい状況です。風力発電、太陽光発電にも取り組んでいますが、赤道直下で気流変動が少ないことや土地制約からあまり成果をあげていないようです。

4. 輸入依存と輸入検疫

多くを輸入に依存しているため、動植物検疫措置は他国と比較して厳しくありません。恐らく東南アジアでは最も寛容だと思えますし、欧米に比べると遥かに輸入しやすく、食品事業者からの輸入トラブルによる相談も他国と比較してとても少ないです。

穀物や野菜など、他国であれば農薬・燻蒸など各種輸入要件が厳しいところも多いですが、その 1 つには、シンガポールは昔から様々な動植物が輸出入されているため、国内の動植物固有種が少ない（既に多くの外来種が普及）ため、生物多様性の保護という考え方が薄いという理由もあります。ただし、肉類など畜産物の検疫は例外でとても厳しく、日本から輸出する牛肉・豚肉などは全て施設認定が必要ですし、加工品も肉が 5%以上含まれるものも同様に認定が必要です。また、個々の輸入品によっては厳格な検疫もあり、日本の場合、生牡蠣や昨年輸入緩和したふぐ加工品が度々検疫で止められる事があります。

5. コメ備蓄義務

最後に、シンガポール政府が行っている唯一の備蓄政策について説明させて頂きたいと思います。シンガポールはコメも全量輸入に依存しており、備蓄制度が設けられています。コメの輸入事業者は企業庁の輸入ライセンスを取得することに加え、備蓄制度（The Rice Stockpile Scheme (RSS)）に参加する義務を負います。具体的には、輸入事業者は輸入量に応じて政府指定倉庫に一定量（精米の場合、月間輸入量の2倍で最低月間輸入量は50トン）を確保しておき、政府から指示がある際に有償で抛出する義務を負います。シンガポールは土地代・倉庫代が高く、この備蓄義務による保管コストを理由にコメ輸入を諦める事業者もあり課題となっております。

（輸入米の保管状況）



今回はシンガポールの国としての食料政策を主にご説明させて頂きましたが、次回は、このような状況に対し、シンガポールの消費者はどのような問題意識や関心を持っているのか、普段の食生活ではどのような消費志向を持っているのか、についてお話させて頂ければと思います。

文責：伊藤 哲也

（日本貿易振興機構（ジェトロ）JF00D シンガポール代表）

【データ・画像出典】

- ・シンガポール食品庁「30 by 30」「Singapore Food Statistics 2021」「Rice Stockpile Scheme (RSS)」
<https://www.ourfoodfuture.gov.sg/30by30/>
<https://www.sfa.gov.sg/publications/sgrfs>
<https://rice.sfa.gov.sg/Home/RiceStockpileScheme.aspx>
<https://rice.sfa.gov.sg/Home/RiceStockpileScheme/PermitApplication.aspx>
- ・Good Meat 社ウェブサイト
<https://www.goodmeat.co/butchery>
- ・シンガポール水資源庁「Our Water, Our Future」「NEWater」
<https://www.pub.gov.sg/resources/publications>
<https://www.pub.gov.sg/watersupply/fournationaltaps/newater>
- ・シンガポールエネルギー市場機構
https://www.ema.gov.sg/Piped_Natural_Gas_and_Liquefied_Natural_Gas.aspx
- ・Brewerkz 社ウェブサイト
<https://brewerkz.com/newbrew/>

本コラムは、執筆者が現地活動で得られた情報や公開情報に基づいて作成したものです。あくまで情報提供を目的としたものであり、その正確性、相当性、完全性を保証するものではなく、当省が本コラムに従って決断した行為に起因する損失等に対して責任を負うことはありません。

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量 前年度比  前月比 **—**

- ・ロシア、豪州等で減少したものの、アルゼンチン、インド等で増加し、前年度から増加した。史上最高の見込み。

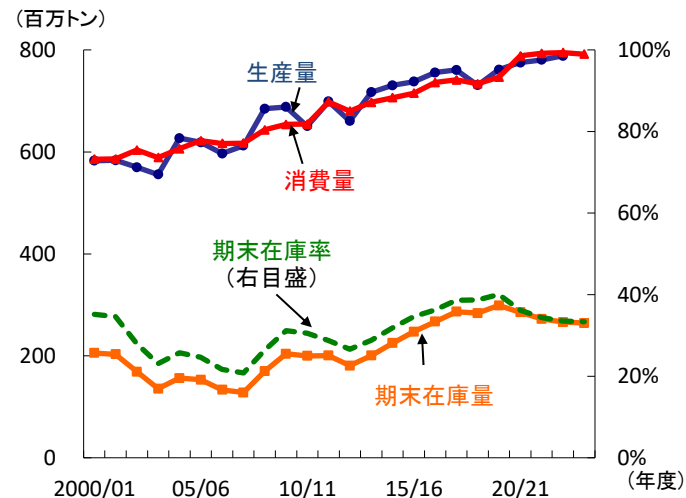
消費量 前年度比  前月比 **—**

- ・EU、中国等で増加したものの、ウクライナ、ロシア等で減少し、前年度から減少した。

輸出量 前年度比  前月比 **—**

- ・アルゼンチン、EU 等で増加したものの、豪州、ウクライナ等で減少し、前年度から減少した。

期末在庫量 前年度比  前月比 **—**



資料：USDA「PS&D」（2023. 5. 12）をもとに農林水産省にて作成

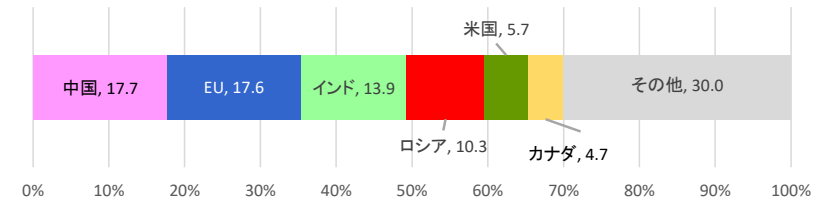
◎世界の小麦需給

（単位：百万トン）

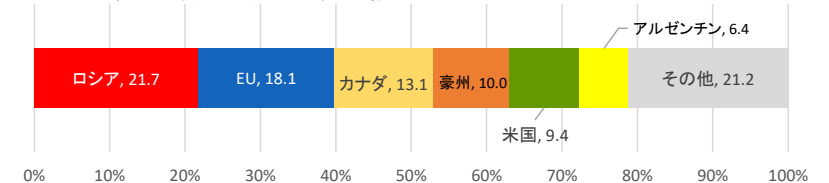
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	780.3	788.3	789.8	—	0.2
消 費 量	793.1	794.7	791.7	—	▲ 0.4
うち飼料用	161.0	156.1	150.9	—	▲ 3.4
輸 出 量	203.0	215.2	209.7	—	▲ 2.6
輸 入 量	199.4	207.2	207.5	—	0.2
期末在庫量	272.7	266.3	264.3	—	▲ 0.7
期末在庫率	34.4%	33.5%	33.4%	—	▲ 0.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (12 May 2023)

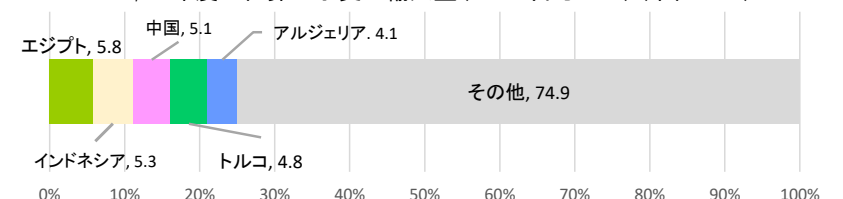
○ 2023/24年度の世界の小麦の生産量(789.8百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸出量(209.7百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸入量(207.5百万トン) (単位：%)



(2) 国別の小麦の需給動向

< 米国 > 2023/24 年度の生産量は前年度から 0.6%増加の 45.2 百万トン

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2023/24 年度の実生産量は、過去 5 年平均(48.7 百万トン)を 7.2%下回るものの、前年度に比べ 0.6%増加の 45.2 百万トンの見込み。

同「Crop Production」(2023.5.12)によれば、冬小麦は前年度に比べ 2.4%増加の 30.8 百万トン、春小麦及びデュラム小麦は同 3.4%減少の 14.4 百万トンの見込み。

同「Wheat Outlook」(2023.5.16)によれば、5 月 9 日現在、冬小麦の生産地の 48%が依然として干ばつ状況となっており、主にハード・レッド・ウインター(HRW)への影響が懸念されている。2 年続きの干ばつの影響で単収の低下と耕作放棄が進み、HRW の生産量は 14.0 百万トンと前年度を下回る見込み。なお、冬小麦の作付面積に占める収穫面積の割合は 67%と 1917/18 年度以降最低である。

一方、ソフト・レッド・ウインター(SRW)は、単収は減少したものの、収穫面積の増加により、11.0 百万トンと前年度より増加し 2015/16 年度以降で最高となる見込み。

「Crop Progress」(2023.5.15)によれば、5 月 14 日時点の冬小麦の出穂進捗率は 49%と前年度の 46%、過去 5 年平均の 48%を上回っている。また、作柄評価(やや良い～良)は 29%と前年度(27%)に比べ 2 ポイント増加したものの、干ばつの影響により冬小麦主産地のカンザス州の実生産量は 1964/65 年度以降最低の 5.2 百万トンの見込み。なお、今後の降雨が単収を決める重要な要因となる。

また、春小麦の主要生産 6 州の作付進捗率は 40%と前年度(37%)を上回るものの、ノースダコタ州等では融雪による土壌水分過多や残雪により播種作業が進まず、過去 5 年平均(57%)を下回っている。また、出穂進捗率は 13%と前年度同時期(15%)、過去 5 年平均(23%)を下回っている。

【貿易情報・その他】2023/24 年度の輸出量は、国内供給の引き締めと価格が主要輸出国に比べ高いことから、前年度に比べ 6.4%減少の 19.7 百万トン(1972/73 年度以降最低)の見込み。USDA によれば、米国の輸出価格(FOB)は低調な輸出需要から 4 月 5 日時点の 386 ドル/トンから低下し、5 月 9 日時点で 373 ドル/トンとなったものの、主要輸出 6 か国の中では一番高い。

なお、2022/23 年度の輸出は、価格競争力が弱く低調で、2022 年 6 月から 2023 年 3 月の輸出量は 17.9 百万トンで、前年度同時期に比べ 4 % 下回っている。また、2023 年 4 月の輸出量は 149.0 万トン(前年度同時期 164.8 万トン)で、輸出先国は、メキシコ(17.4%)、日本(15.4%)、タイ(7.7%)の順。

小麦一米国 (冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年6月～24年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	44.8	44.9	45.2	—	0.6
消 費 量	29.6	29.9	30.3	—	1.1
うち飼料用	1.6	1.5	1.9	—	27.3
輸 出 量	21.8	21.1	19.7	—	▲ 6.4
輸 入 量	2.6	3.4	3.7	—	7.9
期末在庫量	19.0	16.3	15.1	—	▲ 7.1
期末在庫率	37.0%	31.9%	30.2%	—	▲ 1.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.03	14.36	15.01	—	4.5
単収(t/ha)	2.98	3.13	3.01	—	▲ 3.8

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)

表：米国産冬小麦の品種別生産量の推移 (2022/23～2023/24)

(百万トン)			
品 種	2022/23年度	2023/24年度	増加率
ハード・レッド・ウインター	14.5	14.0	-3.1
ソフト・レッド・ウインター	9.2	11.0	20.6
ハード・ホワイト・ウインター	0.3	0.3	-4.3
ソフト・ホワイト・ウインター	6.1	5.4	-11.3
冬小麦計	30.0	30.8	2.4

資料：USDA 「Crop Production」(2023.5.12)をもとに農林水産省で作成

図：米国産小麦の作付面積の推移 (2012/13～2023/24 年度)

2023年 (2023年4月)				2022年 (2022年1月～12月)				2021年 (2021年1月～12月)			
国 名	輸出量	シェア		国 名	輸出量	シェア		国 名	輸出量	シェア	
メキシコ	25.9	17.4	メキシコ	376.3	19.0	メキシコ	740.4	17.7			
日本	22.9	15.4	フィリピン	228.4	11.5	フィリピン	505.2	12.1			
タイ	11.5	7.7	日本	212.2	10.7	日本	435.1	10.4			
エチオピア	10.8	7.2	韓国	122.1	6.2	韓国	293.3	7.0			
ケニア	9.5	6.4	ナイジェリア	117.3	5.9	中国	289.9	6.9			
フィリピン	5.8	3.9	台湾	82.1	4.1	ナイジェリア	272.0	6.5			
エジプト	5.5	3.7	イエメン	70.8	3.6	台湾	178.7	4.3			
その他	57.1	38.3	その他	775.2	39.1	その他	1,476.6	35.2			
計	149.0	100.0	計	1,984.4	100.0	計	4,191.2	100.0			

資料：USDA「Federal Grain Inspection Service Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

< カナダ > 2023/24 年度の春小麦の播種は5月に入り進展

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.5.23)によれば、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、平年並みの天候となれば、他の穀物からのシフトによる播種面積の増加から、前月予測から 1.4 百万トン上方修正され 35.8 百万トン(前年度比 5.7%増加、過去 5 年平均比 14.2%増)の見込み。品種別の生産量は、普通小麦が 29.9 百万トン(前年度比 5.5%増)、デュラム小麦が 5.8 百万トン(同 6.9%増)と、前年度に比べそれぞれ増加。

播種面積は、普通小麦がオーツ麦等からの作付けのシフトで 8.46 百万ヘクタール(前年度比 7.9%増)、デュラム小麦が 2.45 百万ヘクタール(同 0.9%増加)と、それぞれ前年度に比べ増加。

普通小麦のうち、①春小麦の播種面積は 7.85 百万ヘクタール(前年度比 7.5%増)と増加し、州別には、最大生産州のサスカチュワン州(0.34 百万ヘクタール増)での増加が大きい。②主に飼料用途の冬小麦は、前年度に比べ 0.61 百万ヘクタール(同 13%増)と増加した。

カナダ各州政府によれば、①寒冷な天候で春穀物の播種進捗率が 38%(過去 5 年平均 53%)と遅れていたサスカチュワン州では、5 月中旬に播種が進み、小麦の播種進捗率は春小麦が 43%、デュラム小麦が 38%となった。②マニトバ州では、温暖な天候に恵まれているものの、春穀物の播種進捗率は 25%と過去 5 年平均(63%)を下回っている。なお、一部の早播きの小麦は発芽が進んでいる。③アルバータ州では、低温により播種作業が遅れていたものの、5 月中旬の気温上昇で播種が進展し、春小麦の播種進捗率は、38%となり前年同時期(26%)を上回った。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測から 0.8 百万トン上方修正され 24.8 百万トン(前年度比 1.2%増)の見込みで、普通小麦が 20.0 百万トン(前年度比 1.8%増)、デュラム小麦が 4.8 百万トン(同 1.0%減)の見込み。デュラム小麦は、欧州、米国からの需要が減少するものの、乾燥天候により生産量が減少する北アフリカからの需要が増加する見込み。

USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、生産量の増加に加え、豪州の減産見通しによるアジア市場での競合の減少により需要増、特に中国向けが増加することから、史上最高の 27.5 百万トンの見込み。カナダ産小麦は、豪州産のシェアが高いインドネシア市場向けの輸出も増加する見込み。

また、AAFC によれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度に比べ 62.3%増加の 24.5 百万トン。

小麦一カナダ (春小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年8月～24年7月)		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	22.4	33.8	37.0 (35.8)	—	9.4
消 費 量	10.2	9.6	9.6 (9.3)	—	0.5
うち飼料用	5.2	4.5	4.5 (4.9)	—	—
輸 出 量	15.1	26.0	27.5 (24.8)	—	5.8
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	—	—
期末在庫量	3.7	2.5	3.0 (5.8)	—	19.7
期末在庫率	14.5%	7.1%	8.2% (17.0%)	—	1.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.20	10.08	10.60 (10.70)	—	5.2
単収(t/ha)	2.44	3.35	3.49 (3.34)	—	4.2

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(23 May 2023)

表 カナダ産小麦の生産量、収穫面積、単収の推移

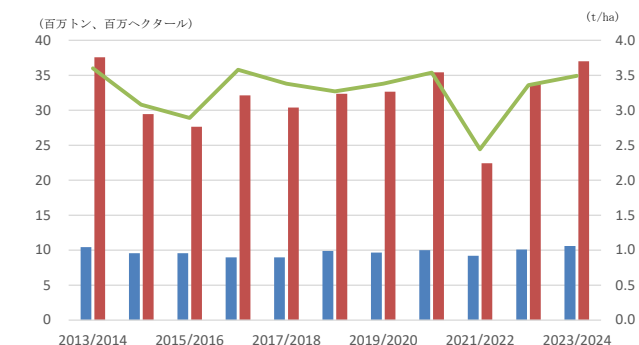
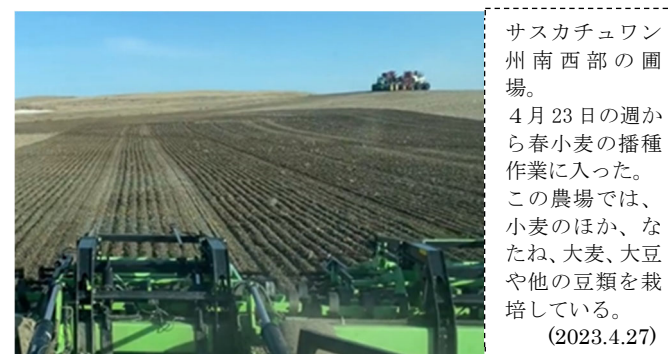


写真 カナダ産小麦の播種 (サスカチュワン州 2023. 4. 27)



サスカチュワン州南西部の圃場。
4月23日の週から春小麦の播種作業に入った。
この農場では、小麦のほか、なたね、大麦、大豆や他の豆類を栽培している。
(2023.4.27)

＜ 豪州 ＞2023/24 年度の生産量は前年度比 25.6%減の 29.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、収穫面積の減少と単収の低下から史上最高であった前年度に比べ 25.6%減少の 29.0 百万トン(過去 5 年平均 27.8 百万トン)の見込み。

2022 年に記録的な降雨で豊作をもたらしたラニーニャ現象が終息し、仮にエルニーニョが発生し、乾燥天候となれば、単収が低下し、生産量が減少すると見られている。なお、豪州気象局による今後の 3 か月予報によれば、豪州の大部分で降水量は過去の中央値を下回る可能性が高い。

USDA によれば、4 月に豪州南部と西部の生産地で、にわか雨により播種前の土壌水分が供給された。一方、東部の生産地では、乾燥天候となり播種は進んでいるが、深層の土壌水分は 3 月の降雨により平均近くの水準を保っている中、表層の土壌水分はこの乾燥天候で減少した。

生育状況は、4 月より播種が開始され、生産地全域の播種進捗率は 60%以上となった。産地別の播種状況は、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)では土壌水分も高く播種は順調。土壌水分が少なかったサウスオーストラリア州(SA 州)等の一部では、播種を遅らせ、生育期間が比較的短い早生品種への切り替えが実施されている。

GIWA(ウェスタンオーストラリア州穀物団体)(2023.5.19)によれば、播種前の降雨により土壌水分が供給された地域を中心に、播種は例年よりも早く 5 月に終了する見込み。菜種等からのシフトが見込まれるものの、ウェスタンオーストラリア州(WA 州)北部で乾燥状態の継続や、さらに南部の降雨量の少なさから放牧地や休閑地の増加が見込まれ、小麦の播種面積は、4.39 百万ヘクタールと前年度から減少する見込み。なお、今後の降雨によっては、播種面積の増加の可能性もある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、国内消費量はほぼ変わらない中、生産量が約 26%も減少することから、前年度に比べ、32.3%減少の 21.0 百万トンの見込み。

豪州産の輸出先は、東アジアと東南アジア諸国であるものの、豪州の輸出量の減少により、豪州の伝統的な市場であったインドネシア、タイ、ベトナム等では、豪州産から生産量の回復したアルゼンチン産にシフトすると見られる。

なお、2022/23 年度の実輸出量は、中国やアジア諸国の需要が強く、前月予測から 2.5 百万トン上方修正され、31.0 百万となる見込み。2023 年 3 月の輸出量は 378.9 万トンと前年度同期を 52.6%上回る。輸出先国は、中国(30.0%)、ベトナム(10.2%)、インドネシア(8.7%)の順で、アジア向けが多い。

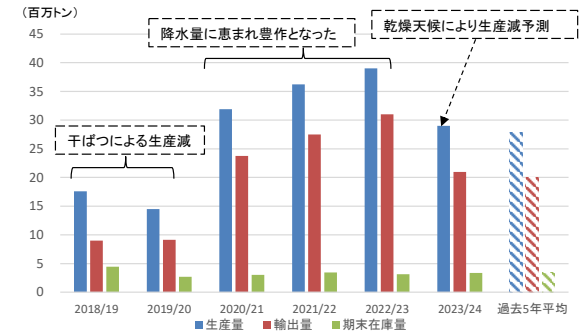
小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年10月～24年9月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	36.2	39.0	29.0	(27.9)	—	▲ 25.6
消 費 量	8.5	8.5	8.0	(8.4)	—	▲ 5.9
うち飼料用	5.0	5.0	4.5	(4.7)	—	▲ 10.0
輸 出 量	27.5	31.0	21.0	(21.5)	—	▲ 32.3
輸 入 量	0.2	0.2	0.2	(0.3)	—	—
期末在庫量	3.5	3.2	3.4	(2.2)	—	6.3
期末在庫率	9.6%	8.0%	11.6%	(7.5%)	—	3.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)※	12.73	13.00	12.50	(12.40)	—	▲ 3.8
単収(t/ha)	2.85	3.00	2.32	(2.25)	—	▲ 22.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)
IGC 「Grain Market Report」(20 April 2023)

図：豪州の生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料:USDA「PS&D」(2023.5.12)をもとに農林水産省で作成

図：豪州産小麦の輸出量と輸出先国

2023年3月			2023年1月～2023年3月			2022年1月～2022年3月		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
中国	113.6	30.0	中国	278.5	27.6	中国	145.0	18.5
ベトナム	38.7	10.2	インドネシア	108.3	10.7	インドネシア	111.3	14.2
インドネシア	33.0	8.7	ベトナム	90.2	8.9	フィリピン	100.5	12.8
タイ	32.8	8.7	韓国	83.5	8.3	ベトナム	69.9	8.9
フィリピン	30.3	8.0	フィリピン	82.8	8.2	韓国	53.5	6.8
韓国	28.1	7.4	タイ	78.0	7.7	イエメン	37.0	4.7
その他	102.4	27.0	その他	287.2	28.5	その他	267.5	34.1
計	378.9	100.0	計	1008.5	100.0	計	784.7	100.0

資料:豪州統計局

< EU27 > 2023/24 年度の生産量 (USDA) は前年度比 3.5%増加の 139.0 百万トン

【生育・生産状況】欧州委員会(2023.4.27)によれば 2023/24 年度の EU27 の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 4.0%増加の 139.5 百万トンの見込み。そのうち、普通小麦は同 3.9%増加の 131.9 百万トン、デュラム小麦は同 5.5%増加の 7.5 百万トンの見込み。前年度に比べると、普通小麦はドイツ、ベルギー等で減少したものの、ハンガリー、ルーマニアで増加、デュラム小麦はフランス、ドイツ等で減少するものの、イタリア、ギリシャ、スペイン等で増加する見込み。

各国の生育状況は、欧州の大部分で4月中旬から5月上旬にかけ降雨に恵まれ、フランス、ドイツ、ポーランドでは生育状況は良好である。イタリアでは降雨があり干ばつが緩和され、生育状況は比較的良好であるが、一部で洪水が生じている。一方、ポルトガル、スペインでは局所的な降雨はあったものの、乾燥状態の悪化と平年より高い気温で冬小麦の生育に悪影響を及ぼしている。なお、フランスアグリメールによれば、小麦の生育状況の評価を示す「とても良い」「良い」の状態は、5月15日時点で、普通小麦は93%(前年度同期75%)、デュラム小麦は87%(同73%)と前年度を上回っている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前年度に比べ1.9%減少の109.5百万トン。そのうち、飼料用消費は期首在庫量及び生産量の増加から、前年度に比べ3.4%増加の45.0百万トンの見込み。2023/24年度の輸入量は、小麦及び他の飼料用穀物の生産量の増加による輸入需要の減少により、前年度に比べ33.3%減少の7.0百万トンの見込み。特にウクライナからの輸入が減少する見込み。

2023/24年度の輸出量は、主要輸出国のフランスやルーマニアでの生産量の増加や、ウクライナからの輸出が減少することに伴い、前年度に比べ10.1%増加の38.0百万トンの見込み。

2022/23年度の輸出量は、低調な輸出ペースから、前月予測から0.5百万トン下方修正され34.5百万トン。欧州委員会によれば、2023年2月の輸出量は197.8万トン。輸出先国は、普通小麦がモロッコ(17.4%)、アルジェリア(16.8%)の順で、北アフリカ諸国向けが多い。また、デュラム小麦は、チュニジア(37.4%)、アラブ首長国連邦(29.8%)の順で、中東、アフリカ向けが多い。

ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題について、欧州委員会は、4月28日、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニアでのウクライナ産穀物の過剰供給を緩和するために、暫定的に5月2日～6月5日までウクライナ産小麦、とうもろこし、菜種、ひまわりの種子の輸入に規制を設定した。同時に、ハンガリー等5か国は各国の単独措置での輸入規制の解除を表明した。

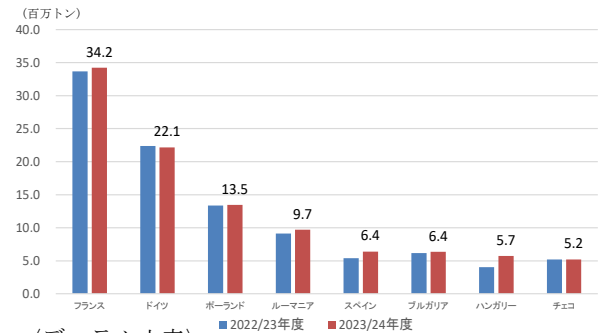
小麦－EU27（冬小麦を主に栽培）

(単位:百万トン)

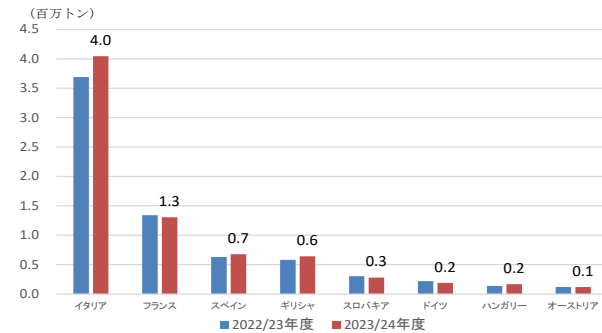
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	138.2	134.3	139.0	(137.8)	—	3.5
消 費 量	108.3	107.5	109.5	(107.7)	—	1.9
うち飼料用	45.0	43.5	45.0	(43.0)	—	3.4
輸 出 量	32.0	34.5	38.0	(36.0)	—	10.1
輸 入 量	4.6	10.5	7.0	(5.4)	—	▲ 33.3
期末在庫量	13.3	16.2	14.7	(17.4)	—	▲ 9.3
期末在庫率	9.5%	11.4%	9.9%	(12.1%)	—	▲ 1.4
(参考)						
収穫面積(百万ha)	24.28	24.35	24.43	(24.10)	—	0.3
単収(t/ha)	5.69	5.52	5.69	(5.72)	—	3.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
USDA 「World Agricultural Production」(12 May 2023)
IGC 「Grain Market Report」(20 April 2023)

図 EU27 の普通小麦及びデュラム小麦の生産量の推移
(普通小麦)



<デュラム小麦>



資料：EU 委員会 Cereals Production, Area, and Yield(2023. 4. 27)を
もとに農林水産省で作成

< 中国 > 2023/24 年度の生産量は、史上最高の 140.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実生産量は、前年度に比べ 1.7%増加の 140.0 百万トンと史上最高となる見込み。

生産コストは増加しているものの、価格水準が高く、高い収益性が見込まれることから、作付意欲が高まっている。なお、中国の小麦生産量の 25%を占める河南省の調査によれば、2022/23 年度のヘクタール当たりの種子、農薬、肥料等の投入コストは、18%上昇している。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 3 月号」によれば、気温が平年を上回り、生産地のほとんどの地域で降水量は十分で生育に適した天候となっている。このため、冬小麦の生育は全体的に良好である。生育段階は、北部のほとんどの冬小麦は再生長期にあり、江淮、江漢地域は徐々に穂孕み期に入っている。また、中国南西部は開花期に入っている。3 月下旬の全国の冬小麦の一類苗と二類苗(※)の割合は 89.4%に達し、生育状況は前年度及び平年を上回っている。例年、収穫は 5 月中旬に開始され、6 月末に終了する。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前年度に比べ 0.7%増加の 149.0 百万トンの見込み。食用用途等が前年度に比べ 1.7%増加の 117.0 百万トン。飼料用途は、相対的に価格が低下した他の飼料用穀物への需要のシフトから、前年度に比べ 3.0%減少の 32.0 百万トンの見込み。

2023/24 年度の輸入量は、①生産量の増加、②とうもろこし等へのシフトによる飼料用需要の減少(豪州産飼料用小麦の輸入量の減少)から、前年度に比べ 22.2%減少の 10.5 百万トンの見込み。

また、2022/23 年度の輸入量は、前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、13.5 百万トンと、1992/93 年度以降最高となる見込み。2022 年 7 月から 2023 年 3 月までの輸入量は、9.5 百万トンを超え、輸入先国のシェアは豪州 55%、カナダ 22%となった。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 3 月号」によれば、小麦は 3 月に国内市場へ十分に供給された一方、小麦粉やふすまの販売価格が下落して製粉企業の需要は減少したため、今後の国内の小麦価格は低下するとみられる。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、前年度に比べ、0.4%増加し 139.7 百万トンの見込みで、世界の期末在庫量に占める中国の割合は、52.8%と半分を超える。

※一類苗は生育が正常で元気に成長している苗。二類苗は通常の苗よりやや小さく弱まっている苗

小麦—中国（冬小麦を主に栽培）

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	137.0	137.7	140.0 (139.0)	—	1.7
消費量	148.0	148.0	149.0 (141.3)	—	0.7
うち飼料用	35.0	33.0	32.0 (25.0)	—	▲ 3.0
輸 出 量	0.9	0.9	0.9 (1.1)	—	—
輸 入 量	9.6	13.5	10.5 (6.7)	—	▲ 22.2
期末在庫量	136.8	139.1	139.7 (143.0)	—	0.4
期末在庫率	91.9%	93.4%	93.2% (100.4%)	—	▲ 0.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.57	23.52	23.60 (23.70)	—	0.3
単収(t/ha)	5.81	5.86	5.93 (0.00)	—	1.2

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)

IGC 「Grain Market Report」(20 April 2023)

図 中国産小麦の生産量の推移

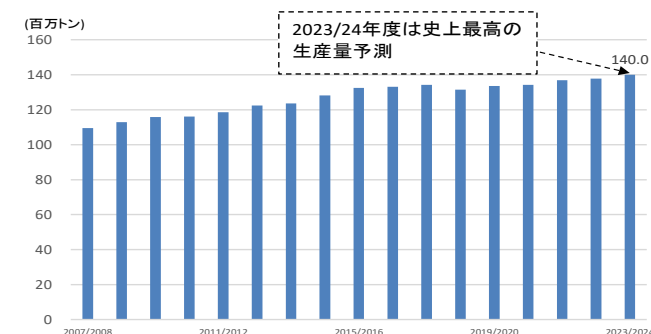
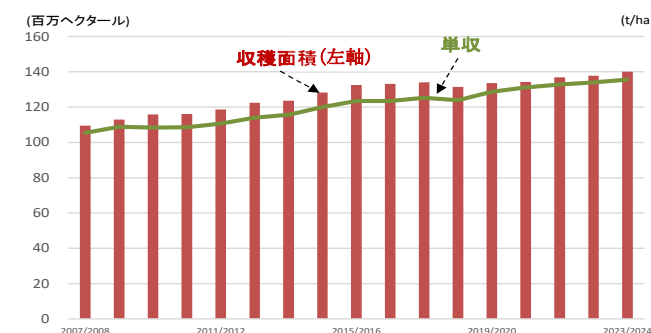


図 中国産の小麦の収穫面積と単収の推移



資料: USDA 「PS&D」(2023.5.12)をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2023/24 年度の輸出量は史上最高の 45.5 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、収穫面積の減少と単収の低下から、史上最高の前年度に比べ 11.4%減少の 81.5 百万トン(過去 5 年平均 79.6 百万トン、2.4%)の見込み。作期別生産量は、冬小麦は播種期の降雨過多による収穫面積の減少から、前年度に比べ 14.7%減少の 58.0 百万トン、春小麦も収穫面積の減少から同 2.1%減少の 23.5 百万トン。

ロシア農業省によれば、5 月 12 日時点で、春小麦の播種面積は 5.33 百万ヘクタール(前年度同期比 37.7%増)で、前年度を上回る播種進捗率(41.0%、前年度同期 29.7%)となっている。

ロシア気象センターによれば、生育状況は、①ヨーロッパ部北部の中央連邦管区等では、冬小麦は分げつ期から茎たち期。作柄は良好から並みだが、一部で越冬期の表層の水結から不良。4 月上旬に春小麦の播種が開始。②同南部の南連邦管区等では、冬小麦は茎たち期。作柄は良好で、一部並み。春小麦は出芽期から子葉形成期。③アジア部のウラル連邦管区では、順調な越冬期終盤を迎えている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、生産量は減少するものの、前年度の史上最高の生産量から期首在庫量が豊富なことや、ウクライナの輸出余力の減少から、史上最高の 45.5 百万トン。同年度の世界の小麦輸出量に占めるロシアのシェアは 21.7%と世界第 1 位の見込み。

2022/23 年度の輸出量は、穀物年度末に向け、輸出量ペースが減速すると見られることから、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、前年度に比べ 34.8%増加の 44.5 百万トンの見込み。

現地情報会社によれば、旧来の輸出先である中東、アフリカ諸国向けの輸出量は、ウクライナ侵攻前後の比較では、国ごとで増減があるものの大きな変化はみられない。国別では、当初減少していたトルコ向けの輸出が 2022 年 10 月から増加している。また、2023 年 4 月の輸出量は、前月に比べ 8.2%減少するものの、同月の過去 3 年平均(196.7 万トン)を上回る 429.5 万トンと水準は高い。輸出先国は、トルコ(27.7%)、イラン(12.9%)、エジプト(10.5%)の順。

USDA によれば、ロシア産小麦の輸出価格(FOB)は、播種の順調な進展等から、4 月 5 日時点の 275 ドル/トンから低下し 260 ドル/トンと主要小麦輸出国の中で最低である(最高は米国の 373 ドル/トン)。

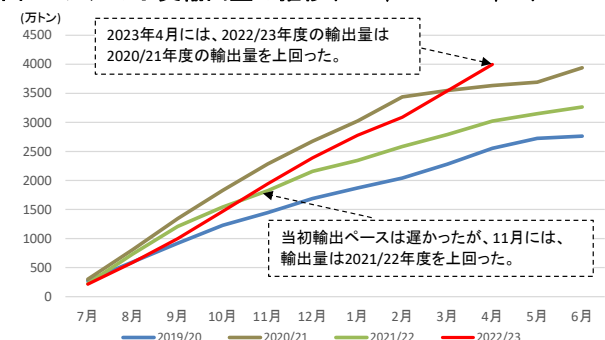
現地情報会社によれば、4 月は、豊富な在庫量や高水準な輸出関税のため、国内取引価格が生産コスト以下となる場合が多数あった。今後、この状況が継続すると、生産者の売渡が減少し、7 月～8 月には輸出量ペースが伸び悩む可能性もある。

小麦一口ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)
(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	75.2	92.0	81.5 (83.6)	—	▲ 11.4	
消 費 量	41.8	42.3	41.0 (46.3)	—	▲ 3.0	
うち飼料用	18.5	19.0	18.0 (21.0)	—	▲ 5.3	
輸 出 量	33.0	44.5	45.5 (42.2)	—	2.2	
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.2)	—	—	
期末在庫量	12.1	17.6	12.9 (11.8)	—	▲ 26.6	
期末在庫率	16.2%	20.3%	15.0% (13.4%)	—	▲ 5.4	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	27.63	29.00	27.50 (27.79)	—	▲ 5.2	
単収(t/ha)	2.72	3.17	2.96 (3.01)	—	▲ 6.6	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)
IGC 「Grain Market Report」(20 April 2023)

図：ロシアの小麦輸出量の推移(2019/20～2022/23)



資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

表：ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2023年4月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年4月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年1月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
トルコ	118.9	27.7	トルコ	748.6	18.8	トルコ	648.9	21.5
イラン	55.3	12.9	エジプト	688.6	17.3	イラン	552.7	18.3
エジプト	45.2	10.5	カザフスタン	270.2	6.8	エジプト	475.2	15.7
アルジェリア	27.0	6.3	サウジアラビア	231.8	5.8	カザフスタン	217.3	7.2
サウジアラビア	26.8	6.2	イラン	230.0	5.8	アゼルバイジャン	157.6	5.2
カザフスタン	24.0	5.6	アゼルバイジャン	190.5	4.8	サウジアラビア	91.6	3.0
イスラエル	15.0	3.5	パキスタン	175.2	4.4	スーダン	65.1	2.2
その他	117.3	27.3	その他	1,451.4	36.4	その他	813.6	26.9
計	429.5	100.0	計	3,986.3	100.0	計	3,022.0	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2023/24 年度の生産量は5年平均を 38.2%下回る

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、収穫面積の減少と単収の低下から、前年度に比べ21.1%減少の16.5百万トン(過去5年平均26.7百万トン、38.2%減)。

なお、ウクライナ農業政策食料省2023年度第1回生産見通し(2023.3.21)によれば、2023/24年度の生産量は前年度(20.5百万トン)から減少し、16.6百万トンの見込み。5月18日時点の春小麦の播種面積は0.29百万ヘクタール(前年度比31.8%増)で、播種進捗率は89.7%となっている。

4月の気温は平年並み。土壌水分は一部で水分過多となったものの、十分な降雨により良好であった。生育段階は、冬小麦は分けつ期から節間伸長期初期。作柄は概ね良好であるが、一部では土壌水分過多の影響により葉の黄変が発生。また、春小麦は出芽期から子葉形成期。作柄は並みから良好。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、ロシアのウクライナ侵攻による港湾の閉鎖や2013/14年度以降で最低の生産量から、前年度に比べ、33.3%減少の10.0百万トンの見込み。

また、2022/23年度の輸出量は、陸路とEUの港湾を利用した「連帯レーン」と「黒海穀物イニシアチブ」による輸出から、前月予測から0.5百万トン上方修正され、15.0百万トンの見込み。ロシアの侵攻の影響を受けたものの、前年度に比べ20.2%の減少に留まっている。

ウクライナ政府等によれば、2022/23年度のうち2022年7月～2023年4月のウクライナの小麦の輸出量は1,440.5万トン(海上輸送、陸路等での全ての輸出が含まれる)。また、輸出先国は、トルコ(21.3%)、ルーマニア(16.3%)、スペイン(14.7%)の順。ロシアのウクライナ侵攻後、ルーマニア、スペイン、ポーランド等の一部のEU諸国向けが増加した。また、黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、合意に基づく2022年8月から2023年4月までの黒海港湾からの小麦輸出量は802.8万トンで、輸出先国は、スペイン(24.0%)、トルコ(17.1%)、バングラデシュ(10.6%)の順。

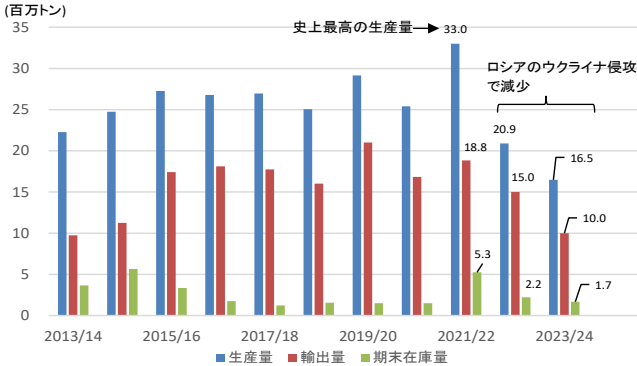
なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、2023年3月19日に60日間の再延長がされ、その期限の5月17日に再び60日間の延長(7月中旬まで)が合意。また、ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題について、欧州委員会は、4月28日、ポーランド等5か国に、暫定的に5月2日から6月5日までウクライナ産小麦等の輸入規制(トランジットは除く)を設定。また、トルコは5月から小麦等の穀物に対して130%の関税を賦課するとした。ウクライナのトルコ向け小麦輸出量の比率が高いため、影響が出る可能性がある。

小麦－ウクライナ(主に冬小麦を栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	33.0	20.9	16.5 (20.2)	—	▲ 21.1	
消 費 量	10.5	9.0	7.1 (11.6)	—	▲ 21.1	
うち飼料用	4.5	4.0	2.5 (2.6)	—	▲ 37.5	
輸 出 量	18.8	15.0	10.0 (11.5)	—	▲ 33.3	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	—	▲ 25.0	
期末在庫量	5.3	2.2	1.7 (1.7)	—	▲ 24.1	
期末在庫率	18.0%	9.3%	9.9% (7.3%)	—	0.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.41	5.30	4.30 (5.65)	—	▲ 18.9	
単収(t/ha)	4.45	3.94	3.84 (3.57)	—	▲ 2.5	
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(12 May 2023) IGC 「Grain Market Report」(20 April 2023)						

図:ウクライナの小麦生産量、輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2023.5.12)をもとに農林水産省で作成

表:ウクライナ産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2023年4月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年4月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年2月※)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
トルコ	48.6	34.7	トルコ	307.2	21.3	エジプト	273.8	15.1
スペイン	29.3	20.9	ルーマニア	234.2	16.3	インドネシア	265.5	14.7
ルーマニア	18.2	13.0	スペイン	211.9	14.7	トルコ	178.7	9.9
バングラデシュ	14.4	10.3	バングラデシュ	87.6	6.1	パキスタン	146.9	8.1
エジプト	4.7	3.4	ポーランド	87.6	6.1	サウジアラビア	75.1	4.1
イタリア	4.1	2.9	イタリア	51.7	3.6	イエメン	64.7	3.6
レバノン	3.6	2.6	エジプト	50.4	3.5	バングラデシュ	63.2	3.5
その他	17.2	12.3	その他	409.9	28.5	その他	743.4	41.0
計	140.1	100.0	計	1,440.5	100.0	計	1,811.3	100.0

資料:現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成
※2022年3月から2022年6月までの輸出データはロシアのウクライナ侵攻により不明

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比  前月比 **—**

・ウクライナ等で減少も、米国、アルゼンチン、EU、中国等で増加し、前年度を上回る見込み。

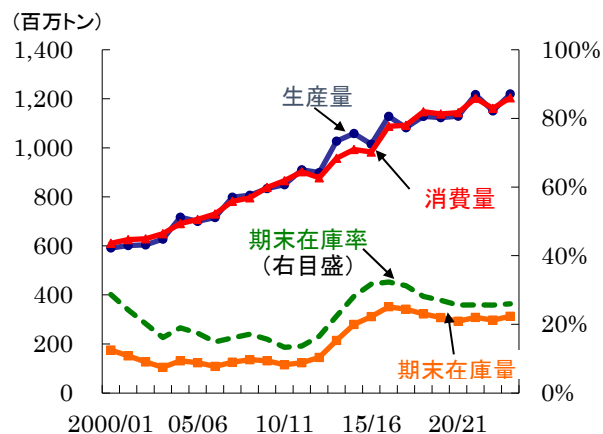
消費量 前年度比  前月比 **—**

・ウクライナ等で減少も、米国、中国、ブラジル等で増加し、前年度を上回る見込み。

輸出量 前年度比  前月比 **—**

・ウクライナ等で減少も、アルゼンチン、米国、ブラジル等で増加し、前年度を上回る見込み。

期末在庫量 前年度比  前月比 **—**



資料：USDA「PS&D」（2023. 5. 12）をもとに農林水産省にて作成

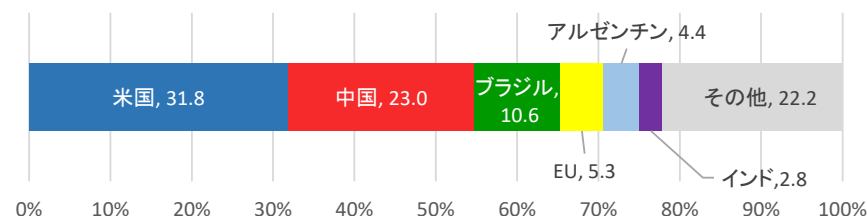
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

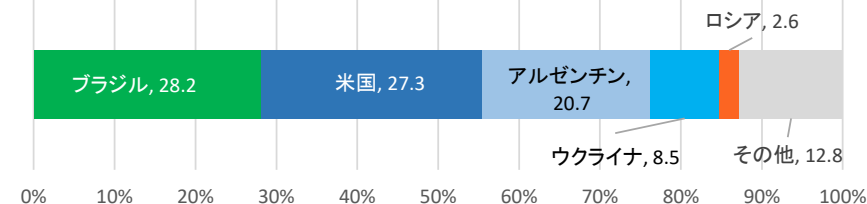
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,217.3	1,150.2	1,219.6	—	6.0
消費量	1,202.1	1,160.9	1,204.1	—	3.7
うち飼料用	746.6	730.5	758.6	—	3.9
輸出量	206.2	175.4	195.3	—	11.3
輸入量	184.5	175.4	184.5	—	5.2
期末在庫量	308.2	297.4	312.9	—	5.2
期末在庫率	25.6%	25.6%	26.0%	—	0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 May 2023）

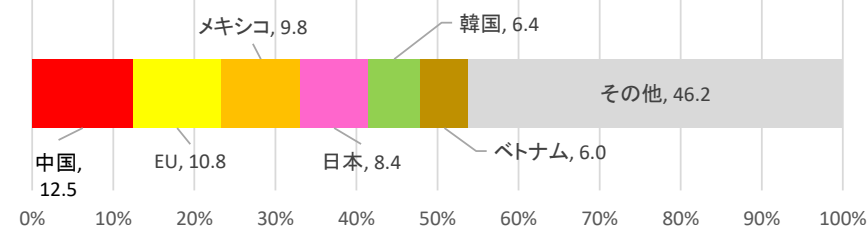
○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,219.6 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸出量(195.3 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸入量(184.5 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の生産量は 11.2%増で史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、単収及び収穫面積が増加することから、前年度より 11.2%増の 387.8 百万トンで史上最高の見通し。

USDA「Crop Progress」（2023.5.15）によれば、適度な降雨があり、5 月 14 日現在で作付け進捗率は 65%となっており、前年度同期（45%）、過去 5 年平均（59%）を上回っている。発芽率も 30%となっており、前年度同期（13%）、過去 5 年平均（25%）を上回っている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、飼料用及びエタノール用等の需要の増加により前年度に比べ 3.6%増の 314.6 百万トンの見通し。飼料用の消費量については、価格低下に伴う需要増により、前年度に比べ 7.1%増の 143.5 百万トンの見込み。エタノール用等の消費量については、自動車用のガソリン消費及びガソリンへのエタノール混合率が増加するとの予想から、前年度より 1.0%増の 134.6 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、増産に伴う国際的なとうもろこし価格の低下による回復期待から、前年度より 18.3%増の 53.3 百万トンの見込み。2023/24 年度の世界最大の輸入国になると見込まれる中国への輸出を巡って、ブラジル産、ウクライナ産との輸出競争が激化する見通し。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.5.12）によれば、本年 5 月の輸出価格については、ブラジルの増産による価格低下により、主要な輸出国で大幅に低下した。米国の価格については、主要輸出先の需要が低調なことや、中国向け輸出成約のキャンセル等で、米国产への需要が弱まり、低下傾向で推移している。なお、2023 年輸出量（1 月 1 日～5 月 4 日）は 15.1 百万トンで、内訳はメキシコ（5.2 百万トン）、日本（3.1 百万トン）、中国（1.7 百万トン）の順である。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、生産量が大幅に増加することから、前年度より 56.8%増の 56.4 百万トンの見込み。期末在庫率は 15.3%で、前年度より上昇し、2018/19 年度（15.5%）以来の高水準となる見込み。

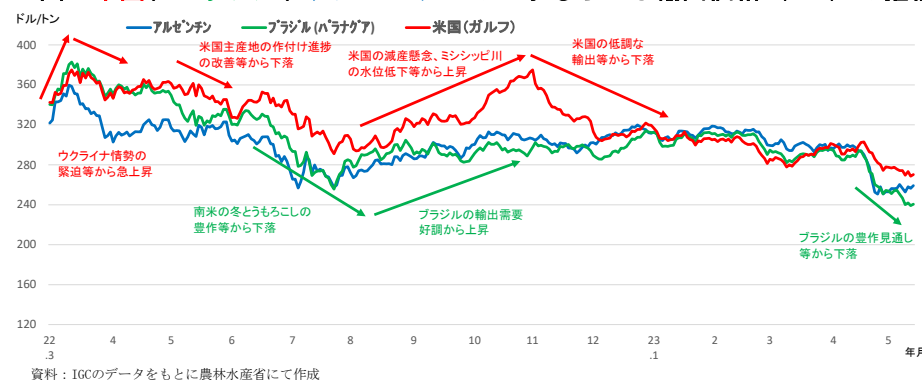
とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年9月～24年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	382.9	348.8	387.8	—	11.2
消 費 量	317.1	303.7	314.6	—	3.6
うち飼料用	145.3	134.0	143.5	—	7.1
エタノール用等	135.3	133.4	134.6	—	1.0
輸 出 量	62.8	45.1	53.3	—	18.3
輸 入 量	0.6	1.0	0.6	—	▲ 37.3
期末在庫量	35.0	36.0	56.4	—	56.8
期末在庫率	9.2%	10.3%	15.3%	—	5.0
（参考）					
収穫面積(百万ha)	34.53	32.05	34.03	—	6.2
単収(t/ha)	11.09	10.88	11.39	—	4.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 May 2023）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



＜ ブラジル ＞ 2023/24 年度の生産量は引き続き高水準の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の実生産量は、129.0 百万トンと史上最高の前年度より 0.8%減少するものの、引き続き高水準を維持する見通し。

ブラジル食料供給公社 (CONAB) 農業モニタリング月報 (2023.4.27) によれば、2022/23 年度の夏とうもろこしについては、リオ・グランデ・ド・スール州等の主要生産地域で 4 月 1 日から 21 日にかけて降水量が少なかったため、収穫作業が順調に進展した。

冬とうもろこしについては、3 月～5 月の降雨が重要とされており、主要生産州であるマト・グロッソ州、パラナ州では降雨に恵まれ、作柄は良い。今後、5 月後半以降の成熟期に向けた降雨を注視する必要がある。

CONAB 月例報告 (2023.5.11) によれば、収穫中の 2022/23 年度の夏とうもろこしの生産量は、前年度比 8.1%増の 27.0 百万トンの見込み。大豆収穫後の 2 月以降に作付けされた冬とうもろこしの生産量は、前年度比 11.8%増の 98.5 百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比 10.4%増の 125.5 百万トンで史上最高の見込み。(P.23 大豆ーブラジルのクロップカレンダー参照)。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、加工用及び飼料用需要の増加等から、前年度より 3.4%増の 76.5 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前年度から引き続き高水準の実生産量と安価な輸出価格から、前年度より 3.8%増の 55.0 百万トンで史上最高となり、2 年連続で世界第 1 位の輸出国となる見込み (右図参照)。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1～4 月の輸出量は 10.3 百万トンで、前年同期 (4.2 百万トン) と比べ 2.5 倍となっている。内訳は、1 位が日本 1.8 百万トン、2 位が韓国 1.2 百万トン、3 位が中国 1.1 百万トンの順。前年 11 月末以降開始された中国向け輸出は、大豆の輸出が一巡し、輸送や港湾の輸出キャパシティに余裕が出てくる本年後半以降、冬とうもろこしの収穫を受け本格化するとみられる。

とうもろこしーブラジル

(大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約 8 割、夏とうもろこしは約 2 割)

(単位: 百万トン)

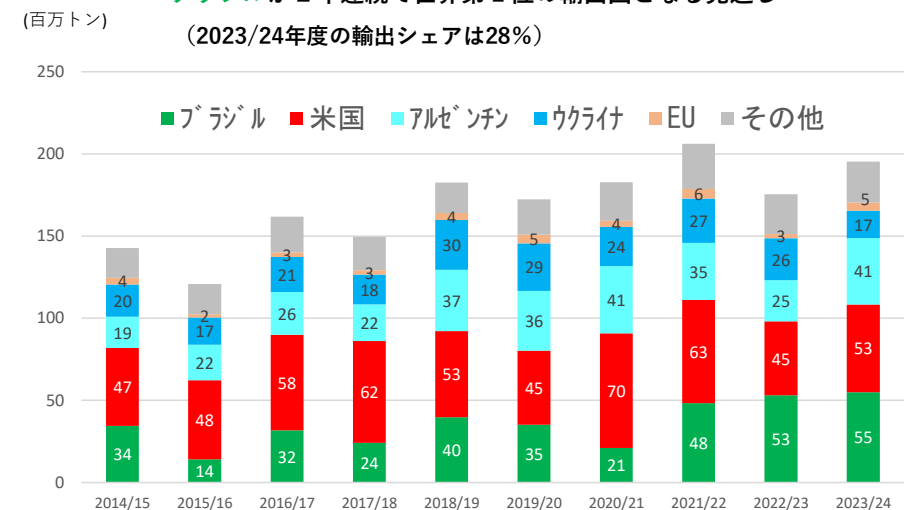
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年3月～25年2月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	116.0	130.0	129.0 (127.0)	—	▲ 0.8	
消 費 量	70.5	74.0	76.5 (79.1)	—	3.4	
うち飼料用	59.5	61.5	62.5 (54.3)	—	1.6	
輸 出 量	48.3	53.0	55.0 (49.0)	—	3.8	
輸 入 量	2.6	1.0	1.2 (0.5)	—	20.0	
期末在庫量	4.0	8.0	6.7 (4.1)	—	▲ 16.3	
期末在庫率	3.3%	6.3%	5.1% (3.2%)	—	▲ 1.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	21.80	22.70	22.90 (22.40)	—	0.9	
単収(t/ha)	5.32	5.73	5.63 (5.67)	—	▲ 1.7	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)
IGC 「Grain Market Report」(20 April 2023)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移

ブラジルが 2 年連続で世界第 1 位の輸出国となる見通し

(2023/24 年度の輸出シェアは 28%)



資料: USDA 「PS&D」 (2023. 5. 12) のデータをもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の生産量は、平年並みの天候になるとの見通しから、高温・乾燥により生産量が激減した前年度から 45.9%増の 54.0 百万トンで史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.5.18）によれば、2022/23 年度の収穫進捗率は 25%であり、前年同期（27%）より遅れている。生産量は、ブエノスアイレス州等主産地で長引く乾燥の影響で 36.0 百万トンとなり、過去 5 年平均（51.0 百万トン）を 29%下回る見込み。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、生産量の増加に伴い需給が緩和し、飼料用消費が増加することから、前年度より 12.5%増の 13.5 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、高温・乾燥により減産した前年度から生産量が回復し、輸出量も回復する見通しから、前年度より 62.0%増の 40.5 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1～3 月の輸出量は 4.7 百万トンで、前年同期（6.8 百万トン）と比較し、2022/23 年度産が減産したため 30.9%減。内訳は、1 位がペルー 62.2 万トン、2 位がアルジェリア 56.0 万トン、3 位がマレーシア 55.7 万トンの順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧水産大臣は、とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。2023 年 5 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンに設定されている。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形を発行するなどの救済施策を公表した。しかし、農業者から救済措置が不十分という抗議活動があったため、4 月 10 日には、各種税の支払い猶予措置などの救済施策を公表した。

とうもろこしーアルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年3月～25年2月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.5	37.0	54.0 (61.0)	—	45.9
消 費 量	14.5	12.0	13.5 (20.4)	—	12.5
うち飼料用	10.5	8.0	9.3 (15.5)	—	16.3
輸 出 量	34.7	25.0	40.5 (40.9)	—	62.0
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.4)	—	—
期末在庫量	1.5	1.5	1.5 (2.2)	—	0.7
期末在庫率	3.0%	4.1%	2.8% (3.6%)	—	▲ 1.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.10	6.70	7.00 (8.20)	—	4.5
単収(t/ha)	6.97	5.52	7.71 (7.44)	—	39.7

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)
IGC 「Grain Market Report」(20 April 2023)

写真：北部サンタフェ州の早植えとうもろこしの圃場風景 (5月1日撮影)

2022 年末から 2023 年初めにかけて作付けされ、成熟期を迎えている。
本圃場では作柄は良好。収穫作業は 7 月を予定。



< 中国 > 2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高、輸入量増加の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24 年度の実産量は、大豆の増産政策により作付けが大豆にシフトすることから、とうもろこしの作付面積がわずかに減少するものの、主産地における単収の増加が見込まれることから、前年度より 1.0%増の 280.0 百万トンで史上最高の見込み。

5月上旬、春とうもろこしは、主産地の黒竜江省等で播種期を迎えている。

【需要状況】USDAによれば、2023/24 年度の消費量は、国際的なとうもろこし価格の低下と国内の経済成長を背景とした飼料用需要の増加から、前年度より 1.7%増の 304.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24 年度の輸入量は、国内の飼料用需要の増加を背景として、国際価格が国内価格より低下したことにより、米国、ウクライナに加え、前年から開始されたブラジルからの輸入が増加すると予想されており、前年度より 27.8%増の 23.0 百万トンの見込み。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 3 月号」によると、2023 年 1 月・2 月計の輸入量は、前年同期より 13.7%増の 532 万 8 千トン。主な輸入先は、米国（輸入量の 44.1%）、ブラジル（同 27.7%）、アルゼンチン（同 22.1%）である。

同月報によれば、3 月の国内価格は、2,940 元/トンと前月（2,980 元/トン）から下落した。気温が徐々に上昇し、保管が難しくなるため、農家の売却意欲が高まっており、主要生産地の農家から市場に出回った。一方、飼料・加工メーカーは買付けに消極的であり、とうもろこし市場は依然として低迷している。また、3 月の輸入価格は、2,660 元/トンと前月（2,760 元/トン）から下落した。3 月の内外価格差は 2 月より拡大し、2022 年 12 月以降、国内価格が国際価格よりも高い状況が続いている。

他の飼料用需要との競合についても、2023/24 年度において、とうもろこし国際価格の下落から、2022/23 年度に生じた小麦、飼料用碎米への輸入代替は、相対的に低価格なとうもろこし輸入へと回帰すると推測される。

とうもろこしー中国

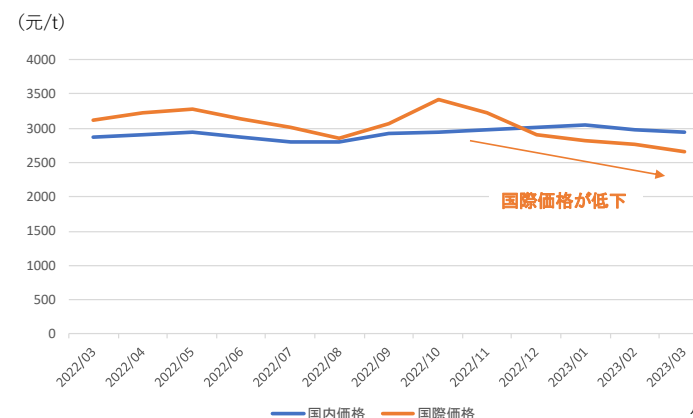
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	272.6	277.2	280.0 (276.2)	—	1.0	
消費量	291.0	299.0	304.0 (310.3)	—	1.7	
うち飼料用	209.0	218.0	223.0 (210.0)	—	2.3	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	—	—	
輸 入 量	21.9	18.0	23.0 (29.0)	—	27.8	
期末在庫量	209.1	205.3	204.3 (170.8)	—	▲ 0.5	
期末在庫率	71.9%	68.7%	67.2% (55.0%)	—	▲ 1.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	43.32	43.07	43.00 (43.00)	—	▲ 0.2	
単収(t/ha)	6.29	6.44	6.51 (6.42)	—	1.1	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)
IGC 「Grain Market Report」(20 April 2023)

図：中国におけるとうもろこし価格の内外価格差

(2022 年 3 月～2023 年 3 月)

(国際価格の低落により、国内価格が高い状況)



資料：農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 3 月号」より

農林水産省にて作成

< ウクライナ > ロシアの侵攻により、2023/24 年度の生産量は前年度比 18.5%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、ロシアによる侵攻の影響で収穫面積及び単収がいずれも減少することから、前年度より 18.5%減の 22.0 百万トンで 2012 年以来最低の水準となる見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、5 月 18 日時点での 2023/24 年度の播種済面積は 3.3 百万ヘクタールで、播種期の終盤を迎えている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、生産量の減少による供給減から、前年度より 11.3%減の 5.5 百万トンの見込み。背景には戦争の影響で畜産物生産が減少することによる飼料用需要の減退もあると推測される。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、生産量の減少及び主要輸出先の EU における増産から、前年度より 35.3%減の 16.5 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022 年 8 月～2023 年 4 月の輸出量は 1,991 万トン。輸出先国は、中国、ルーマニア、スペイン、イタリア、ハンガリー、ポーランドの順となっている。上記の輸送手段としては、黒海港湾からの輸出が約 6 割、黒海港湾以外の港湾からの輸出が約 1 割、鉄道・トラック等が約 3 割となっている。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された前年 8 月 1 日～4 月 30 日の黒海港湾からのとうもろこし輸出量は 1,477 万トンであり、輸出先国は、中国（461 万トン）、スペイン（271 万トン）、イタリア（140 万トン）、オランダ（119 万トン）の順となっている。

なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、2023 年 3 月 19 日に 60 日間の再延長がされ、その期限となる 5 月 17 日に再び 60 日間の延長（7 月中旬まで）が合意された。

また、ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題について、欧州委員会は、4 月 28 日、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニアの東欧 5 か国に、暫定的に 5 月 2 日から 6 月 5 日までウクライナ産とうもろこし等の輸入規制を設定した。

とうもろこしーウクライナ

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	42.1	27.0	22.0 (21.0)	—	▲ 18.5
消費量	9.9	6.2	5.5 (7.6)	—	▲ 11.3
うち飼料用	8.7	5.0	4.5 (4.8)	—	▲ 10.0
輸 出 量	27.0	25.5	16.5 (15.0)	—	▲ 35.3
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	—	—
期末在庫量	6.1	1.4	1.4 (1.3)	—	—
期末在庫率	16.5%	4.4%	6.3% (5.7%)	—	1.9

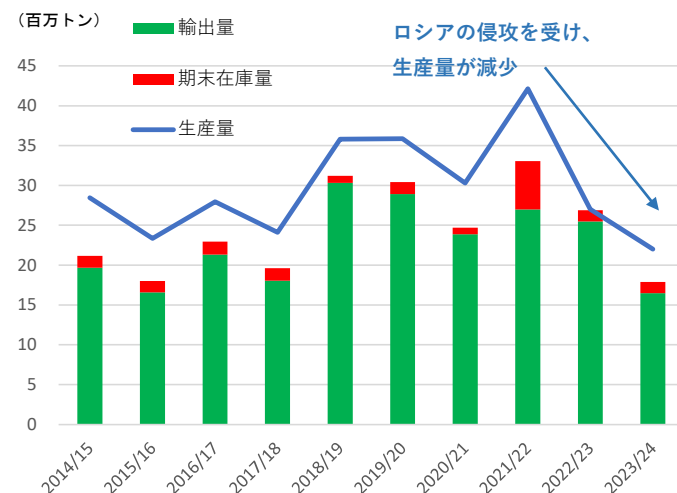
(参考)

収穫面積(百万ha)	5.49	4.05	3.40 (3.20)	—	▲ 16.0
単収(t/ha)	7.68	6.67	6.47 (6.56)	—	▲ 3.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)

IGC「Grain Market Report」(20 April 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移

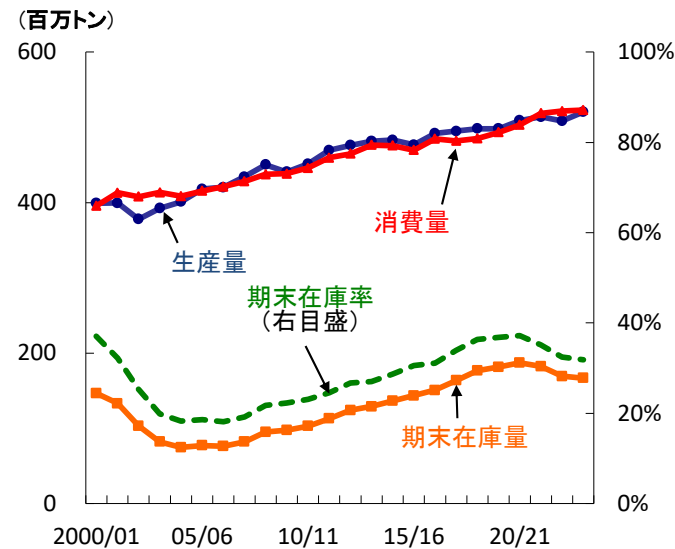


資料：USDA「PS&D」(2023.5.12)をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

＜米国農務省（USDA）の見通し＞		2023/24 年度	
生産量	前年度比 ↑	前月比	—
・パキスタン、中国、米国、インド等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。			
消費量	前年度比 ↑	前月比	—
・中国等で減少も、インド等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。			
輸出量	前年度比 ↑	前月比	—
・タイ、ベトナム等で減少も、パキスタン、米国等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。			
期末在庫量	前年度比 ↓	前月比	—



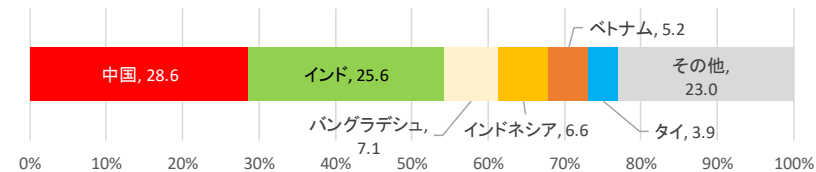
資料：USDA「PS&D」（2023. 5. 12）をもとに農林水産省にて作成

◎世界のコメ需給

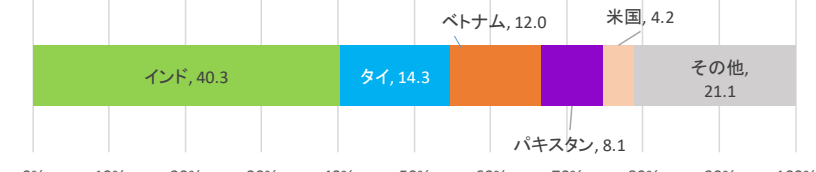
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	513.9	508.4	520.5	—	2.4
消 費 量	518.8	521.5	523.0	—	0.3
輸 出 量	56.9	55.5	55.8	—	0.6
輸 入 量	54.5	53.9	53.1	—	▲ 1.4
期末在庫量	182.3	169.2	166.7	—	▲ 1.5
期末在庫率	35.1%	32.4%	31.9%	—	▲ 0.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 May, 2023）

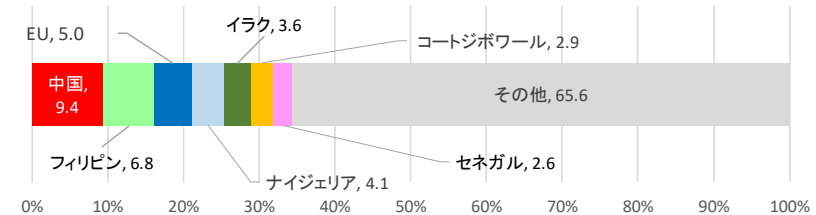
○ 2023/24年度 世界のコメの生産量(520.5百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸出量(55.8百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸入量(53.1百万トン) (単位：%)



（２）国別のコメの需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の生産量は増加、消費量は史上最高の見込み

【生育・生産動向】米国農務省（USDA）によれば、2023/24 年度の実生産量は、長粒種、中・短粒種とも、収穫面積の増加（対前年度比 17.0%）及び単収の増加（対前年度比 2.7%）から、対前年度比 20.2%増の 6.1 百万トンとなる見込み。深刻な干ばつで 2 年連続作付面積が減少していた中・短粒種の主産地であるカリフォルニア州では、灌漑用水の供給が平年を上回ると見込れることや、史上最高の価格水準等から、作付面積が飛躍的に増加する見込み（前年度比 49.1%増）。また長粒種の産地でも、高水準の価格等から作付面積が増加する見込み。

同「Crop Progress」（2023.5.15）によれば、主要生産 6 州の 5 月 14 日時点の作付進捗率は 83%と、前年同期（78%）、過去 5 年平均（76%）よりも進展している。発芽率は 65%と、前年同期（51%）、過去 5 年平均（54%）より高い。作柄評価はやや良から良が 70%と、前年同期（72%）を下回っている。なお、カリフォルニア州では作付けが 4 月末に開始されたが、播種開始時期の豪雨やその後の低温のため、作付進捗率は 40%と、前年同期（79%）、過去 5 年平均（62%）よりも遅れている。また、発芽率も 2 %と、前年同期（17%）、過去 5 年平均（13%）よりも遅れている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、生産量の増加見通しから、対前年度比 2.1%増の 4.9 百万トンと、史上最高となる見込み。背景には、今後、増産による国内取引価格の下落があると推測される。

2023/24 年度の輸入量は、生産量増加に伴う砕米及び中・短粒米の輸入減少から、対前年度比 0.8%減の 1.2 百万トンの見込み。

2023/24 年度の輸出量は、生産量増加と米国産価格の低下から、対前年度比 21.1%増の 2.4 百万トンの見込み。ただ長粒種は、南米産との価格競争から前年度比 8.3%と、輸出増加は一定程度に収まる見込み。

USDA「Rice Outlook」（2023.5.16）によれば、5 月 9 日までの週のイラク向け長粒種（2 等、砕米 4 % 混入）の価格は 760 ドル/トンと、本年 1 月末以降、2008 年 10 月初旬（772 ドル/トン）以来の高値となっている（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。また中粒種（地中海向けカリフォルニア米（1 等、砕米 4 % 混入））の価格は 1,650 ドル/トンと、前年 12 月末以降、史上最高となっている。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

（単位：百万精米トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年 8 月～24年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.1	5.1	6.1	—	20.2
消 費 量	4.8	4.8	4.9	—	2.1
輸 出 量	2.6	1.9	2.4	—	21.1
輸 入 量	1.2	1.3	1.2	—	▲ 0.8
期末在庫量	1.3	0.9	1.0	—	12.5
期末在庫率	17.0%	13.1%	13.7%	—	0.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.01	0.88	1.03	—	17.0
単収(もみt/ha)	8.64	8.28	8.50	—	2.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 May 2023）

写真：アーカンソー州の生育状況の風景（5月 10 日撮影）



< インド > 2023/24 年度の生産量・消費量とも史上最高の見込み

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、史上最高であった昨年度と同水準の収穫面積、及び史上最高の単収（対前年度比 1.0%増）が見込まれることから、対前年度比 0.8%増の 133.0 百万トンと、8 年連続で史上最高となる見込み。

インド農業農民福祉省によると、カリフ米作付済み面積は、5 月 19 日時点で 2.8 百万ヘクタールと、前年同期（3.0 百万ヘクタール）に比べ 0.2 百万ヘクタール少ない状況。

USDA によると、主に 4 月後半の豪雨により、今後作付けされるカリフ米向けの灌漑用水が十分に供給されるとともに、猛暑が緩和されラビ米の収穫作業が進展した。2022/23 年度のラビ米の収穫は 4 月でほぼ終了した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前年度に引き続き、政府の低所得世帯向け食料配給プログラム（約 8 億人が対象）向けにコメを 60 百万トン程度供給することから、対前年度比 0.4%増の 113.0 百万トンと史上最高の見込み。

2023/24 年度の輸出量は、特に中東からバスマティ米の需要が急増するなど輸出需要が堅調なこと等から、前年度と同水準の 22.5 百万トンと史上最高の見込み。

インドは、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を抑制する観点から、前年 9 月 9 日に輸出規制を発動（碎米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））。ただ、引き続き他のアジア諸国と比べ価格競争力があること等から、2023/24 年度の輸出量は史上最高となる見込み。また、依然として世界の輸出量の 40%を占め、世界第 1 位の輸出国となる見込み。

なお、現地情報によると、4 月 11 日、インドは在庫水準の改善を理由に、2022 年 9 月に導入された種子用米に対する 20 パーセントの輸出税を撤廃したとのこと。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2023.5.12) によれば、インド産米（碎米 5 %混入）の 5 月 9 日までの週の輸出価格は 440 ドル/トンと、前月から 6 ドル/トン上昇したものの、アジア主要輸出国の中で依然として最低の価格水準（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

2023/24 年度の期末在庫量は、対前年度比 8.1%減の 28.5 百万トンの見込み。

※国際連合「世界人口予測 2022」報告書（2022.7.11）によれば、2023 年 7 月 1 日時点で、インドの人口は推定 14 億 2,863 万人と、年央には中国の人口（14 億 2,567 万人）を上回り世界第 1 位となる見込み。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位：百万精米トン)

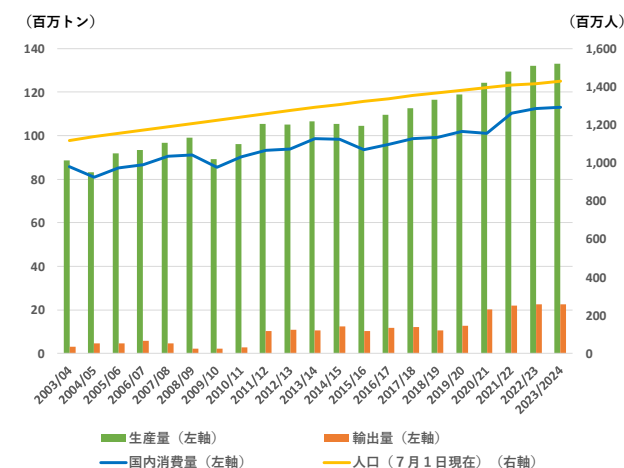
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	129.5	132.0	133.0 (132.5)	—	0.8
消 費 量	110.5	112.5	113.0 (111.4)	—	0.4
輸 出 量	22.0	22.5	22.5 (20.5)	—	—
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	—	—
期末在庫量	34.0	31.0	28.5 (32.8)	—	▲ 8.1
期末在庫率	25.7%	23.0%	21.0% (24.9%)	—	▲ 1.9

(参考)

収穫面積(百万ha)	46.28	47.00	47.00 (45.75)	—	—
単収(もみt/ha)	4.20	4.21	4.25 (2.86)	—	1.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)
IGC 「Grain Market Report」(20 April 2023) (単収は精米t/ha)

図：インドのコメ生産量・消費量・輸出量と人口の推移



資料：USDA 「PS&D」(2023.5.12) 及び国連「World Population Prospects 2022」をもとに農林水産省にて作成。なお 2022 年、2023 年の人口は予測値。

< 中国 > 南部の早場米の生育は順調

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前年度の干ばつから回復して収穫面積が増加し、史上最高の単収が見込まれることから、前年度比 2.1%増の 149.0 百万トンと、史上最高の見込み。

3月上旬に南部で早場米の播種が始まった。早場米の作付け地は広東、海南、湖北、安徽、江西の各地区で、合計 2.48 百万ヘクタール。中央政府が穀物の増産を推進していることから、南部の各州政府は農家にコメの増産を奨励しているほか、多様な栽培方法による増産方法を模索している。なお、南東部では、3月下旬から4月上旬にかけて豪雨があり、土壌水分が改善して稲の生育が促進された。4月は南東部で平年以上の降雨があり、5月に入っても豪雨が続いているが、生殖生長期にある南部の早場米に好条件となっている。

農業農村部によれば、黒竜江省で5月中旬に播種が概ね終了したとのこと。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、とうもろこしの増産見込みによる飼料用米の消費量の減少から、前年度比 1.9%減の 152.0 百万トンの見込み。

2023/24年度の輸入量は、コメの輸入価格が上昇する一方、とうもろこしの国際価格の下落に伴い、とうもろこしに対する飼料用としての価格優位性が低下したため、飼料用碎米の輸入がわずかに減少するものの、前年度並みの 5.0 百万トンの見込み。なお、中国はこれまで、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインド等から輸入してきた。

なお、USDAによれば、2022年の年間輸入量は、コメの関税割当制度が設けられてから初めて、割当数量（5.32 百万トン）を超え、6.26 百万トンとなった。

また、中国外交部によれば、4月14日にブラジル農業畜産省と中国税関総署が、コメを含むブラジル産農産物の中国への輸出に関する衛生検疫手続の協議の促進に合意した。

中国海関統計によれば、2023年3月の輸入量は 39.0 万トン（前年同期比 25.0%減）、1－3月の輸入量は 1.0 百万トン（前年同期比 39.0%減少）となった。背景には、インドの輸出規制による価格上昇の影響等があると見られる。

コメー中国

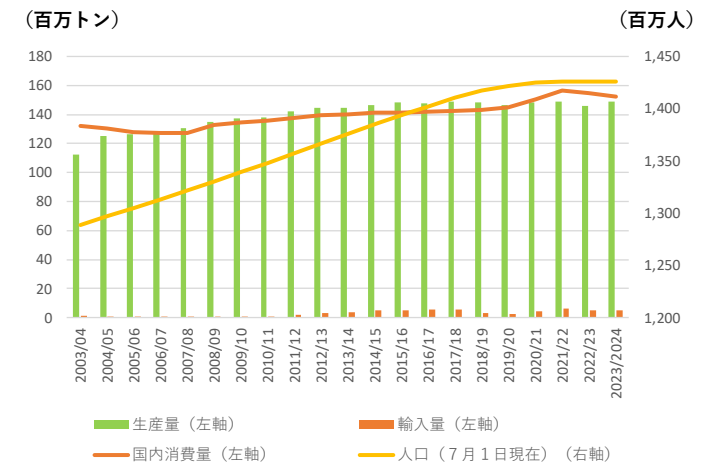
北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位：百万精米トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	149.0	146.0	149.0 (148.9)	—	2.1
消費量	156.4	155.0	152.0 (150.4)	—	▲ 1.9
輸出量	2.1	2.1	2.0 (2.2)	—	▲ 4.8
輸入量	6.0	5.0	5.0 (4.4)	—	—
期末在庫量	113.0	106.9	106.9 (105.6)	—	0.0
期末在庫率	71.3%	68.1%	69.4% (69.2%)	—	1.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	29.92	29.45	29.85 (30.03)	—	1.4
単収(もみt/ha)	7.11	7.08	7.13 (4.86)	—	0.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)
IGC「Grain Market Report」(20 April 2023) (単収は精米t/ha)

図：中国のコメ生産量・消費量・輸入量と人口の推移



資料：USDA「PS&D」(2023.5.12)及び国連「World Population Prospects 2022」
をもとに農林水産省にて作成。なお2022年、2023年の人口は予測値。

< タイ > 乾季米（全作付面積の約 2 割）はほぼ収穫済、雨季米の作付面積は減少見込み

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、コメの価格上昇による作付面積の増大、及び史上最高の単収が見込まれることから、前年度比 1.5%増の 20.5 百万トンの見込み。

2022/23 年度の実産量は、良好な天候と十分な降雨により、2021/22 年度比 1.5%増の 20.2 百万トンの見込み。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.5）によると、乾季米の収穫はほぼ終了した。収穫面積の増加から、収量は前年度よりも 23%程度増加の見込み。降雨に恵まれ天候も良好だったことから単収も良好。雨季米は、作付けに向けて圃場を耕起しながら 5 月末に予想される降雨を待っている状況。作付面積は、肥料・殺虫剤・燃料の各費用の高騰や、エルニーニョ現象の発生懸念による降雨不足から減少の見込み。こうした状況を受け、収益が高く乾燥に強いキャッサバ等へ作付転換している農家もいる。

なお、現地情報によると、タイ国家水資源事務局は、今後の水不足に備えて、ダムの貯水量を確保するため、一期作以降はより少ない水で栽培できる作物に切り替える減反を農家に提案した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、インドネシアへの輸出見込みが予想を下回ることから、対前年度比 5.9%減の 8.0 百万トンの見込み。ただ、依然としてインドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2021/22 年度比 10.4%増の 8.5 百万トンの見込み。

タイ米輸出業者協会によれば、2023 年 1～3 月の輸出量は、前年同期の 174.2 万トンから 32.2 万トン増加し、206.4 万トンとなった。検疫問題で 7 年間停止していたタイ産米の輸入を 2022 年に再開したイラクが 33.8 万トン（前年同期 29.3 万トン）、政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大しているインドネシアは、前年同期の 0.3 万トンから急増して 27.0 万トンとなった。そのほか、南アフリカが 17.0 万トン（同 12.0 万トン）と増加しているが、米国が 17.8 万トン（同 23.5 万トン）と減少。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.5.12）によれば、5 月 9 日までの週のタイ産米（長粒、2 等精米）の輸出価格は、インドネシアからの需要増大により、前月から 16 ドル上昇し、515 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

コメータイ

夏の雨季作と冬の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（24年1月～24年12月）		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	19.9	20.2	20.5 (20.7)	—	1.5
消費量	12.8	12.8	12.8 (12.4)	—	—
輸出量	7.7	8.5	8.0 (8.3)	—	▲ 5.9
輸入量	0.1	0.2	0.2 (0.3)	—	—
期末在庫量	3.5	2.6	2.4 (6.7)	—	▲ 5.9
期末在庫率	17.1%	12.0%	11.5% (32.3%)	—	▲ 0.4
（参考）					
収穫面積(百万ha)	10.70	10.85	10.90 (10.85)	—	0.5
単収(もみt/ha)	2.81	2.82	2.85 (1.86)	—	1.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)
IGC「Grain Market Report」(20 April 2023)（単収は精米t/ha）

表：タイの国別輸出量

（単位：万トン）

国名	2022 年 1～3 月	2023 年 1～3 月	増減
1 イラク	29.3	33.8	4.5
2 インドネシア	0.3	27.0	26.7
3 米国	23.5	17.8	▲ 5.7
4 南アフリカ	12.0	17.0	5.0
5 セネガル	4.8	12.1	7.3
6 バングラデシュ	0.0	11.5	11.5
7 中国	21.6	10.8	▲ 10.8
8 日本	8.2	9.4	1.2
9 カメルーン	1.3	7.0	5.7
10 モザンビーク	3.5	5.0	1.5
計	174.2	206.4	32.2

資料：タイ米輸出業者協会（2023.5）

< ベトナム > 冬春作の単収は増加見込み。輸出価格は2021年5月以来の高水準

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、収穫面積はわずかに減少も、単収は過去最高だった前年度の水準を維持する見込みから、前年度並みの27.0百万トンの見込み。長期的には肥料高騰や高収益作物等（果物・野菜・養殖）への転換等により、収穫面積は減少傾向にある。

2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、2021/22年度比0.7%増の27.0百万トンの見込み。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.5）によると、北部では冬春作が幼穂育成期から穂ばらみ期にある。十分な灌漑用水と良好な天候から、単収増加が見込まれる。南部では冬春作は収穫期終盤にある。作付済み面積（1.88百万ヘクタール）に対し、収穫済み面積は現時点で1.57百万ヘクタール（進捗率83.5%）。良好な天候と塩害の減少から、単収は7.12もみトン/ヘクタールと、前年度より1.6%高くなっている。他方、南部のうちメコンデルタ地域では、安定的な天候条件の下、夏秋作（雨季米）の播種がピークを迎えており、播種済み面積は0.51百万ヘクタールとなっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、2023年にインドネシアへの備蓄向け輸出が終了すること等から、前年度比5.6%減の6.7百万トンの見込み。

2022/23年度の輸出量は、2021/22年度並みの7.1百万トンの見込み。

ベトナム関税総局によれば、2023年1～4月の輸出量は289.7万トンと、前年同期（205.8万トン）に比べ40.8%増加した。上位からフィリピン（128.7万トン）、中国（50.7万トン）、インドネシア（30.6万トン）、マレーシア（16.0万トン）となっている。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.5.12）によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の5月9日までの週の価格は、インドネシアやマレーシア等からの需要が増加したことから、前月の価格から15ドル/トン上昇して500ドル/トンと、2021年5月以来の高値となった。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

（単位：百万精米トン）

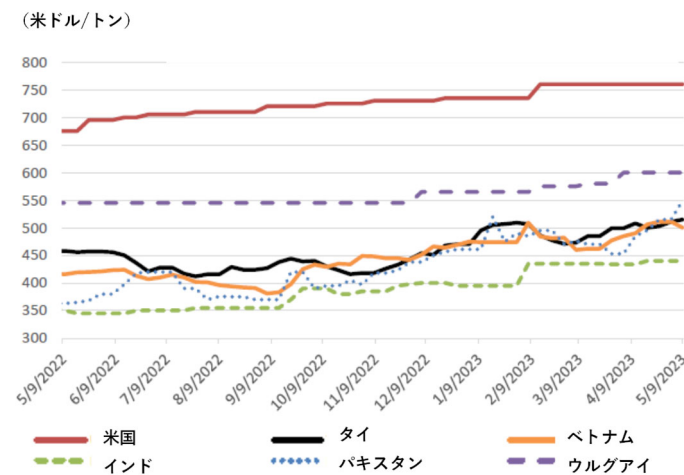
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年1月～24年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	26.8	27.0	27.0 (28.3)	—	—
消費量	21.5	21.5	21.6 (22.2)	—	0.5
輸出量	7.1	7.1	6.7 (7.2)	—	▲ 5.6
輸入量	1.5	1.1	1.3 (1.1)	—	18.2
期末在庫量	2.4	1.9	1.9 (3.0)	—	—
期末在庫率	8.2%	6.5%	6.5% (10.2%)	—	0.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.19	7.17	7.16 (7.10)	—	▲ 0.1
単収(もみt/ha)	5.96	6.03	6.03 (3.90)	—	—

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)
IGC「Grain Market Report」(20 April 2023)（単収は精米t/ha）

図：長粒種のFOB価格の推移



資料：USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.5.12）より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 —

・アルゼンチン、ブラジル、米国等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

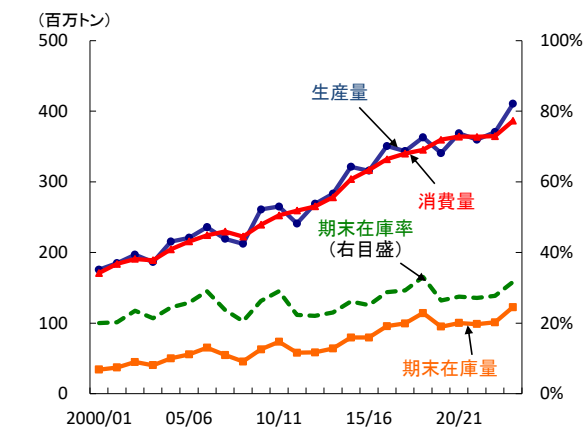
消費量 前年度比 ↑ 前月比 —

・アルゼンチン、中国、ブラジル、米国等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

輸出货量 前年度比 ↑ 前月比 —

・米国等で減少も、ブラジル等で増加し、前年度を上回り、史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 —



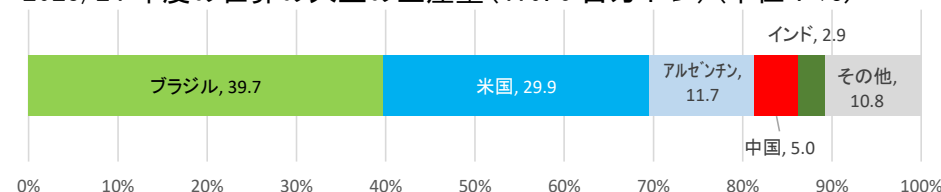
◎ 世界の大豆需給

（単位：百万トン）

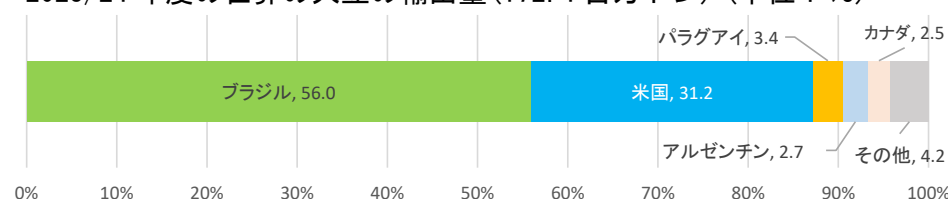
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	359.9	370.4	410.6	—	10.8
消 費 量	363.8	364.9	386.5	—	5.9
うち搾油用	314.2	313.3	332.3	—	6.1
輸 出 量	154.0	168.4	172.4	—	2.4
輸 入 量	156.6	165.2	169.8	—	2.8
期末在庫量	98.7	101.0	122.5	—	21.2
期末在庫率	27.1%	27.7%	31.7%	—	4.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 May 2023）

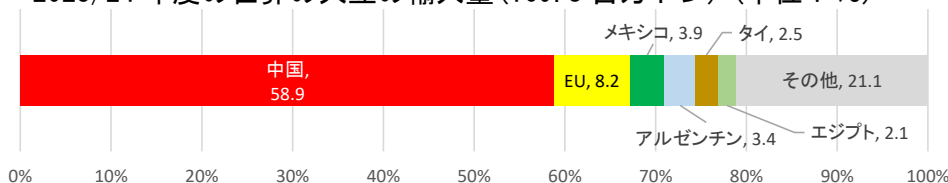
○ 2023/24 年度の世界の大豆の生産量 (410.6 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸出货量 (172.4 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸入量 (169.8 百万トン) (単位：%)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 2023/24 年度の生産量は 122.7 百万トンで史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、単収の増加等により前年度より 5.5%増の 122.7 百万トンの見通し。

USDA「Crop Progress」(2023.5.15)によれば、5月14日現在で作付け進捗率は 49%と、適度な降雨があり、前年度同期(27%)、過去5年平均(36%)を上回っている。発芽率も 20%と、前年度同期(8%)、過去5年平均(11%)を上回っている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、バイオ燃料・飼料用需要増による搾油の収益改善の見通しから前年度より 4.1%増の 66.3 百万トンで史上最高の見込み。なお、背景としては、環境志向に伴い、バイオ燃料向けの搾油工場の新設による需要増が見込まれていることがあるとみられる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、生産量が増加し価格の低下が見込まれるものの、史上最高の豊作見通しとなったブラジル産と比べ相対的な価格競争力が落ちていることから、前年度より 2.0%減の 53.8 百万トンの見込み。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、生産量が増加し、南米産との激しい競争により輸出量が減少することから、前年度より 55.5%増の 9.1 百万トンとなる見込み。結果として期末在庫率は 7.6%で、過去4年で最も高い水準となる見込み。

USDA によれば、2023 年輸出量(2023 年1月1日～5月4日)は、18.5 百万トンであり、内訳は中国(11.0 百万トン)、メキシコ(1.7 百万トン)、ドイツ(1.3 百万トン)の順。

USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」(2023.5.12)によれば、大豆輸出価格は、4月中旬以降、ブラジルとアルゼンチンの 2023 年産の収穫が進展することに伴い、全体的に低下し続けている。

なお、米国の輸出価格は、前年 12 月以降、ブラジル産に比べ割高で推移しており、2 月以降、ブラジル産の収穫期を迎え価格差が広がった(右図参照)。

大豆－米国

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年9月～24年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	121.5	116.4	122.7	—	5.5
消費量	62.8	63.7	66.3	—	4.1
うち搾油用	60.0	60.4	62.9	—	4.1
輸出量	58.7	54.8	53.8	—	▲ 2.0
輸入量	0.4	0.5	0.5	—	—
期末在庫量	7.5	5.9	9.1	—	55.5
期末在庫率	6.1%	4.9%	7.6%	—	2.6

(参考)
 収穫面積(百万ha) 34.93 34.94 35.09 — 0.4
 単収(t/ha) 3.48 3.33 3.50 — 5.1
 資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
 「World Agricultural Production」(12 May 2023)

図: 米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格(FOB)の推移



資料: IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

< ブラジル > 2023/24 年度の生産量・輸出量は、史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 10 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の生産量は、作付面積が史上最大となる見通しから、前年度より 5.2%増の 163.0 百万トンと史上最高の見込み。

また、ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2023.5.11）によれば、2022/23 年度の生産量は、南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受けた 2021/22 年度より 23.3%増の 154.8 百万トンに回復する見込み。

USDA「World Agricultural Production」（2023.5.12）によれば、5 月初期時点で、収穫進捗率は 75%で、前年度（81%）を下回っている。中西部主産地のマツト・グロソ州では収穫が完了。南部のパラナ州では 5 月 8 日現在、収穫は完了。

CONAB 農業モニタリング月報（2023.4.27）によれば、干ばつの被害を受けた南部のリオ・グランデ・ド・スール州では、4 月 1 日から 21 日にかけての降水量が少なかったため、収穫期を迎える大豆の圃場にとって良好な条件となった。

リオ・グランデ・ド・スール州では、5 月 11 日現在、収穫進捗率は 87%に達している。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、搾油用需要が増加することから、前年度より 4.7%増の 59.7 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、2 年連続で生産量が史上最高を更新し、価格競争力が高まる見込みから、前年度より 3.8%増の 96.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1 月～4 月の輸出量は 33.6 百万トンで、前年同期（32.4 百万トン）に比べ 3.7%増となっている。輸出先の内訳は、1 位が中国（24.2 百万トン）、2 位がスペイン（1.1 百万トン）、3 位がアルゼンチン（0.9 百万トン）となっている。豊作見通しの 2022/23 年産の収穫が進んでおり、4 月以降、輸出量が増加する見込み。

大豆ーブラジル

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年10月～24年9月）			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	130.5	155.0	163.0 (159.0)	—	5.2	
消 費 量	54.0	57.0	59.7 (58.8)	—	4.7	
うち搾油用	50.7	53.3	55.8 (56.0)	—	4.7	
輸 出 量	79.1	93.0	96.5 (97.7)	—	3.8	
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.2)	—	▲ 10.0	
期末在庫量	27.6	33.1	40.4 (8.1)	—	21.9	
期末在庫率	20.7%	22.1%	25.8% (5.2%)	—	3.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.60	43.70	45.60 (44.75)	—	4.3	
単収(t/ha)	3.14	3.55	3.57 (3.55)	—	0.6	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 May 2023）
IGC「Grain Market Report」（20 April 2023）

ブラジルのクロープカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の大豆の作付けは、2022年9月以降、順次開始。
2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし																					
冬とうもろこし																					
大豆																					

資料：CONAB穀物レポート（2023.5.11）

< アルゼンチン > 2023/24 年度の生産量は、前年度より回復の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 11 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の生産量は、高温・乾燥の影響を大きく受けた前年度より 77.8%増の 48.0 百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.5.18）によれば、2022/23 年度の大豆の収穫進捗率は 69.2%。生産量は、高温・乾燥による遅植え大豆の収穫面積の大幅な減少から下方修正され、21.0 百万トン（過去 5 年平均（45.0 百万トン）より 53%減）の見通し。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、生産量の増加に伴い搾油量が回復することから、前年度より 14.4%増の 43.2 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、干ばつにより減産し価格競争力が弱まった前年度から生産量が回復する見込みから、前年度より 39.4%増の 4.6 百万トンの見込み。アルゼンチンは、丸大豆の搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第 1 位の輸出国である。

USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、国内生産量の増加に伴い、前年度より 31.3%減の 5.7 百万トンの見込み。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%と設定。2022 年 3 月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2%引き上げたが、2023 年 1 月からは 31%に戻っている。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形を発行するなどの救済施策を公表した。さらに、4 月 10 日には、各種税の支払い猶予措置などの救済施策を公表した。また、外貨獲得のため、4 月 10 日から 5 月 31 日までの間の 45 日間を超えない範囲で、大豆優遇為替レート（1 ドル＝300 ペソ）を適用する。

「OIL WORLD Monthly」（2023.4.28）によれば、大豆優遇レートに基づく大豆の販売は、ここまで予想を大きく下回っている状況にある。急速なインフレーションと更なる通貨切下げの噂から、多くの農業者は売りを控えている。

大豆ーアルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	43.9	27.0	48.0 (43.5)	—	77.8
消 費 量	46.0	37.8	43.2 (42.3)	—	14.4
うち搾油用	38.8	31.5	36.5 (38.5)	—	15.9
輸 出 量	2.9	3.3	4.6 (4.8)	—	39.4
輸 入 量	3.8	8.3	5.7 (5.3)	—	▲ 31.3
期末在庫量	23.9	18.2	24.1 (3.7)	—	32.5
期末在庫率	48.9%	44.2%	50.3% (8.0%)	—	6.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.90	15.00	16.40 (16.10)	—	9.3
単収(t/ha)	2.76	1.80	2.93 (2.70)	—	62.8

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)
IGC 「Grain Market Report」(20 April 2023)

写真：北部サンタフェ州の早植え大豆の収穫風景 (5月1日撮影)

夏季の高温・乾燥の影響で草丈が小さく、莢の数が少ない。
収穫する量が少ないため、急速に収穫作業が進んでいる。



< 中国 > 2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高、輸入量増加の見通し

【生産・生育状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、単収が減少するものの、収穫面積が増加することから、前年度より 1.1% 増の 20.5 百万トンで史上最高の見込み。

2 月 13 日に公表された中国共産党・国務院（内閣に相当）の中央 1 号文件には、引き続き大豆の作付け拡大の取組等について記載された。

USDA 「Grain and Feed Annual」（2023.4.6）によれば、政府は、大豆ととうもろこしの間作を奨励しており、2022/23 年度に間作は 100 万ヘクタール増加した。大豆主産地の東北地区の黒竜江省等においては、補助金を考慮しても、とうもろこしの収益が高い見込みであるが、国有農場を中心に大豆の作付けを増加させると推測される。

なお、5 月、主産地の東北地区の黒竜江省等では播種期を迎えている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、国内の大豆粕需要と食料需要が増加することにより、前年度より 4.7% 増の 118.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、需要増から前年度より 2.0% 増の 100.0 百万トンの見込み。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、前年度より 6.7% 増の 38.2 百万トンで史上最高の見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前年度から 0.6 ポイント増加し、32.3% となる見込み。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 3 月号」によれば、2023 年 1 月・2 月計の輸入量は、前年同期より 16.0% 増の 1,617 万トン。主な輸入元は、米国（総輸入量の 71.6%）、ブラジル（同 13.9%）、アルゼンチン（同 8.4%）である。

3 月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月並みの 6,040 元/トンとなった。気温の上昇で貯蔵が難しくなったため、農家の売却意欲が高まったものの、国産の需要は低調であり、国内の大豆の売買は少ない状況にある。また、3 月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、5,400 元/トンと前月並みとなった。

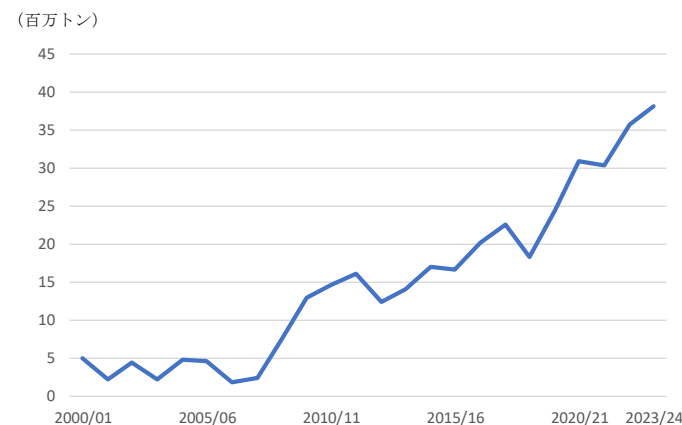
大豆—中国

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	16.4	20.3	20.5	(19.8)	—	1.1
消費量	108.4	112.7	118.0	(118.2)	—	4.7
うち搾油用	87.9	91.0	95.0	(98.5)	—	4.4
輸出量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	—	-
輸入量	91.6	98.0	100.0	(99.5)	—	2.0
期末在庫量	30.3	35.8	38.2	(31.2)	—	6.7
期末在庫率	27.9%	31.7%	32.3%	(26.4%)	—	0.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)	8.42	10.24	10.45	(9.95)	—	2.1
単収(t/ha)	1.95	1.98	1.96	(1.98)	—	▲ 1.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 May 2023)
IGC 「Grain Market Report」(20 April 2023)

図：中国における大豆の期末在庫量の推移
(2023/24 年度は 38.2 百万トンで史上最高の見込み)



出典：米国農務省「PS&D」（2023.5）を農林水産省で加工

< カナダ > 2023/24 年度の作付意向面積は前年度比 4.5%増の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前年度から 0.7%減の 6.5 百万トンの見込み。

カナダの大豆生産は、小麦やなたねと異なり、東部のオンタリオ州が主産地で、生産量の半分以上のシェアがある。オンタリオ州に隣接するマニトバ州、ケベック州でも生産されている。

カナダ統計局「Principal field crop areas, March 2023」(2023.4.26)によれば、2023/24 年度の作付意向面積は、前年度から 4.5%増の 223 万ヘクタールの見込み。特に、生産量が2位のマニトバ州で大きく増加するとみられている。なお、本調査は例年と異なり前年 12 月時点で生産者に聞き取りを行っており、その後の動向については留意が必要である。

カナダ農務農産食品省 (AAFC) 「Outlook for Principal Field Crops」(2023.5.23)によれば、単収は、平年並みの天候に恵まれれば、3.0 トン/ヘクタールとなり、生産量は前年から 2.4%増の 6.7 百万トンが見込まれている

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前年度並みの 2.6 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前年度より 2.2%減の 4.4 百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会 (Canadian Grain Commission) によれば、2022/23 年度 (2022 年 8 月～2023 年 7 月) のうち、2022 年 8 月～2023 年 3 月の輸出量は 305.6 万トンとなり、国別では、中国向け (128.8 万トン) が 42%を占め、続いて、イラン (44.8 万トン)、アルジェリア (36.5 万トン)、イタリア (25.1 万トン) の順となっている。2023 年 3 月の輸出量は 6.4 万トンで、アルジェリア向けが 4.4 万トン、ベルギー向けが 2.0 万トンである。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、前年度並みの 0.5 百万トンの見込みであり、期末在庫率は、前年度より 0.5 ポイント増の 6.9%の見込み。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

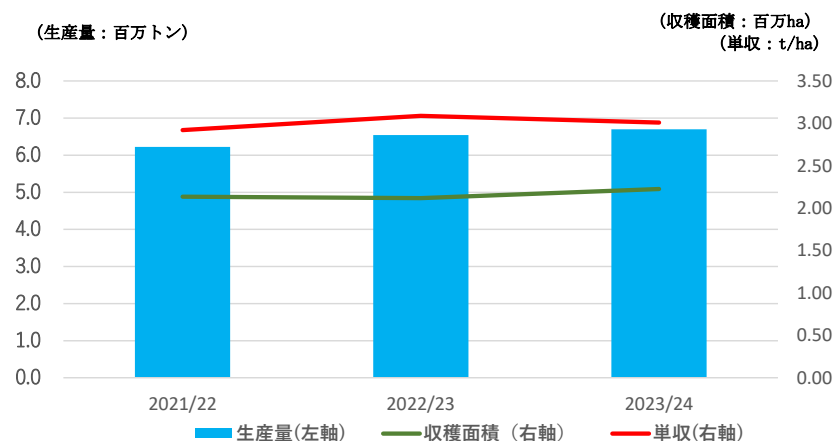
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年8月～24年7月）		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.2	6.5	6.5 (6.7)	—	▲ 0.7
消 費 量	2.3	2.6	2.6 (2.5)	—	—
うち搾油用	1.8	2.0	2.0 (1.9)	—	—
輸 出 量	4.3	4.5	4.4 (4.7)	—	▲ 2.2
輸 入 量	0.5	0.6	0.5 (0.5)	—	▲ 9.1
期末在庫量	0.4	0.5	0.5 (0.4)	—	6.7
期末在庫率	6.5%	6.4%	6.9% (4.9%)	—	0.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.08	2.12	2.20 (2.23)	—	3.8
単収(t/ha)	2.99	3.09	2.95 (3.01)	—	▲ 4.5

資料：USDA 「PS&D」

「World Agricultural Production」(12 May 2023)

AAFC 「Outlook for Principal Field Crops」(23 May 2023)

図：カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC 「Outlook for Principal Field Crops」(2023.5.23)をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2023/24年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	23年6月～24年5月	23年9月～24年8月	23年8月～24年7月	23年9月～24年8月
カナダ	23年8月～24年7月			23年8月～24年7月
豪州	23年10月～24年9月		24年3月～25年2月	
EU	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
中国	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月
ロシア	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		23年9月～24年8月
ウクライナ	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
ブラジル		24年3月～25年2月	24年4月～25年3月	23年10月～24年9月
アルゼンチン	23年12月～24年11月	24年3月～25年2月		23年10月～24年9月
タイ			24年1月～12月	
インド	23年4月～24年3月		23年10月～24年9月	
ベトナム			24年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2023/24年度は、米国の小麦では2023年6月～2024年5月、ブラジルのとうもろこしでは2024年3月～2025年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

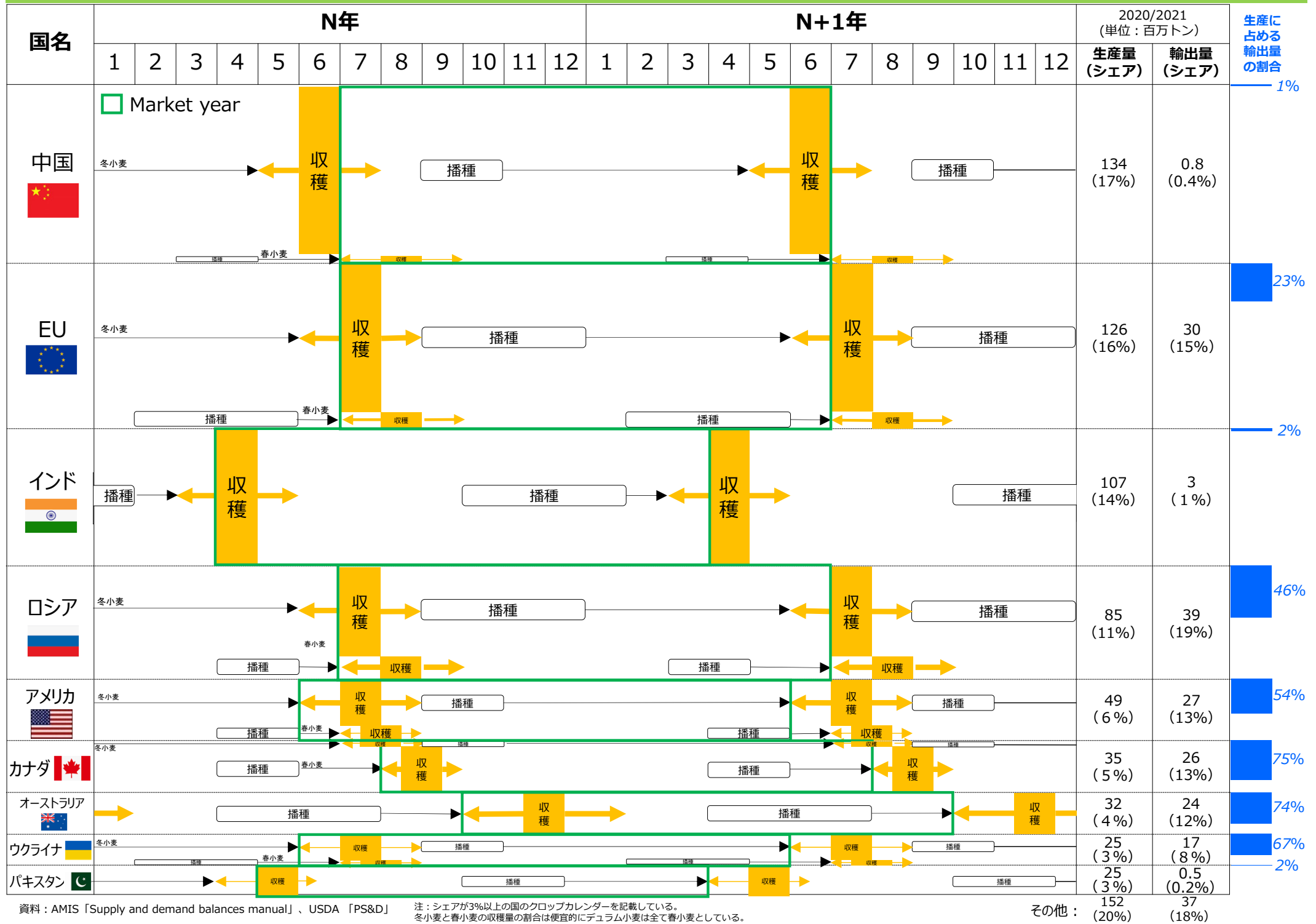
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏 : $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



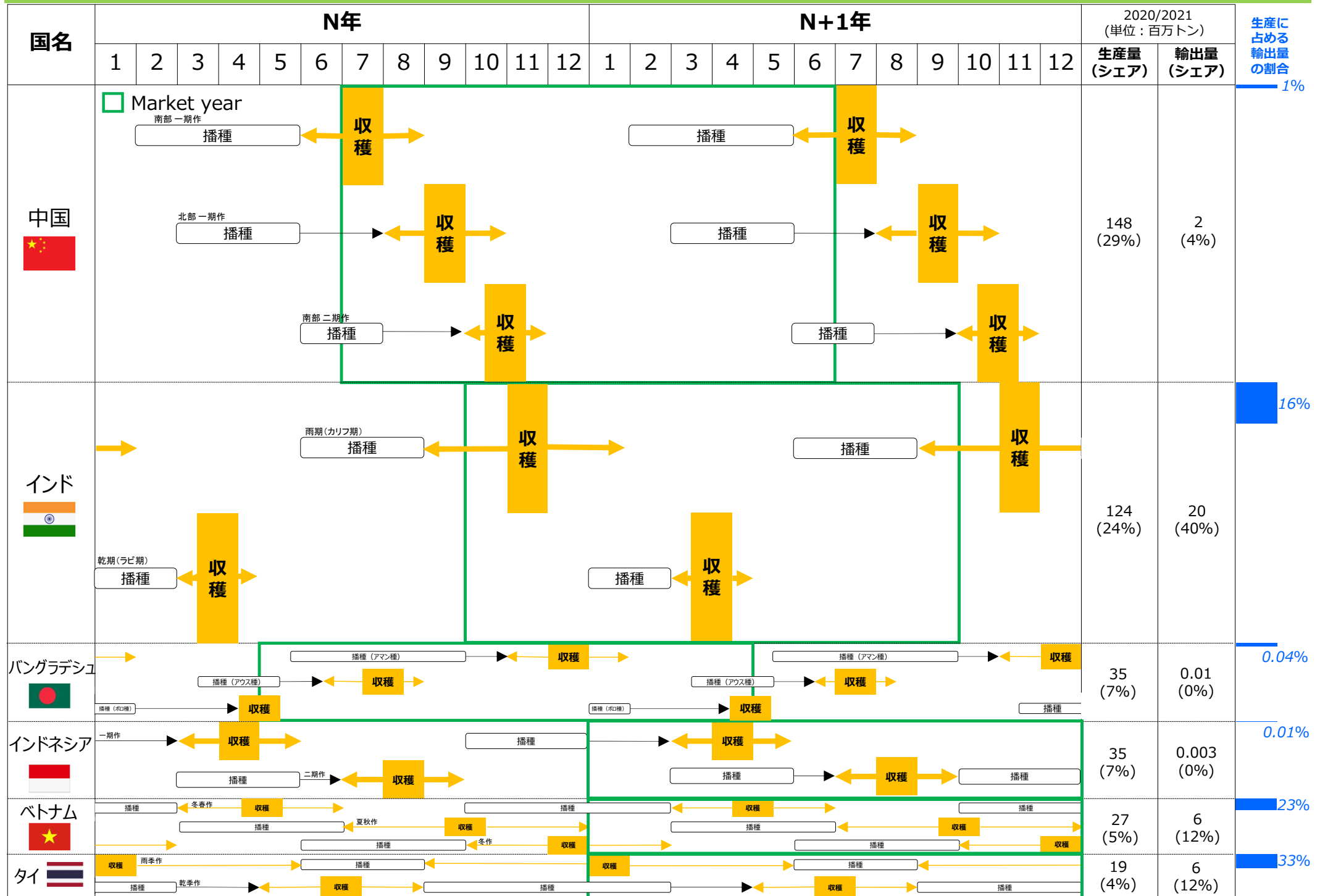
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。
冬小麦と春小麦の収穫量の割合は便宜的にデュラム小麦は全て春小麦としている。

その他：

主要生産国のクロップカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

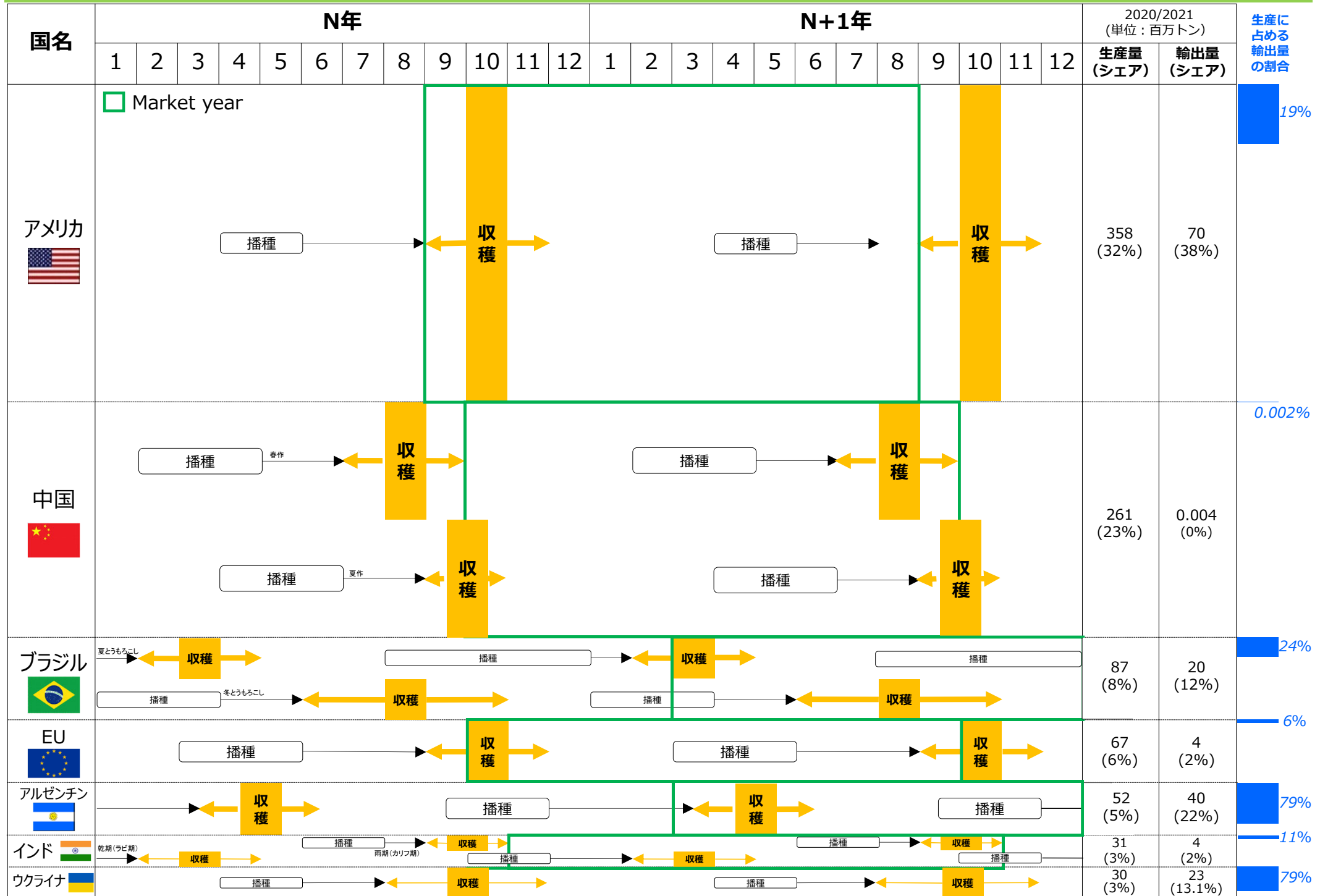
その他：

121
(24%)

16
(32%)

主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



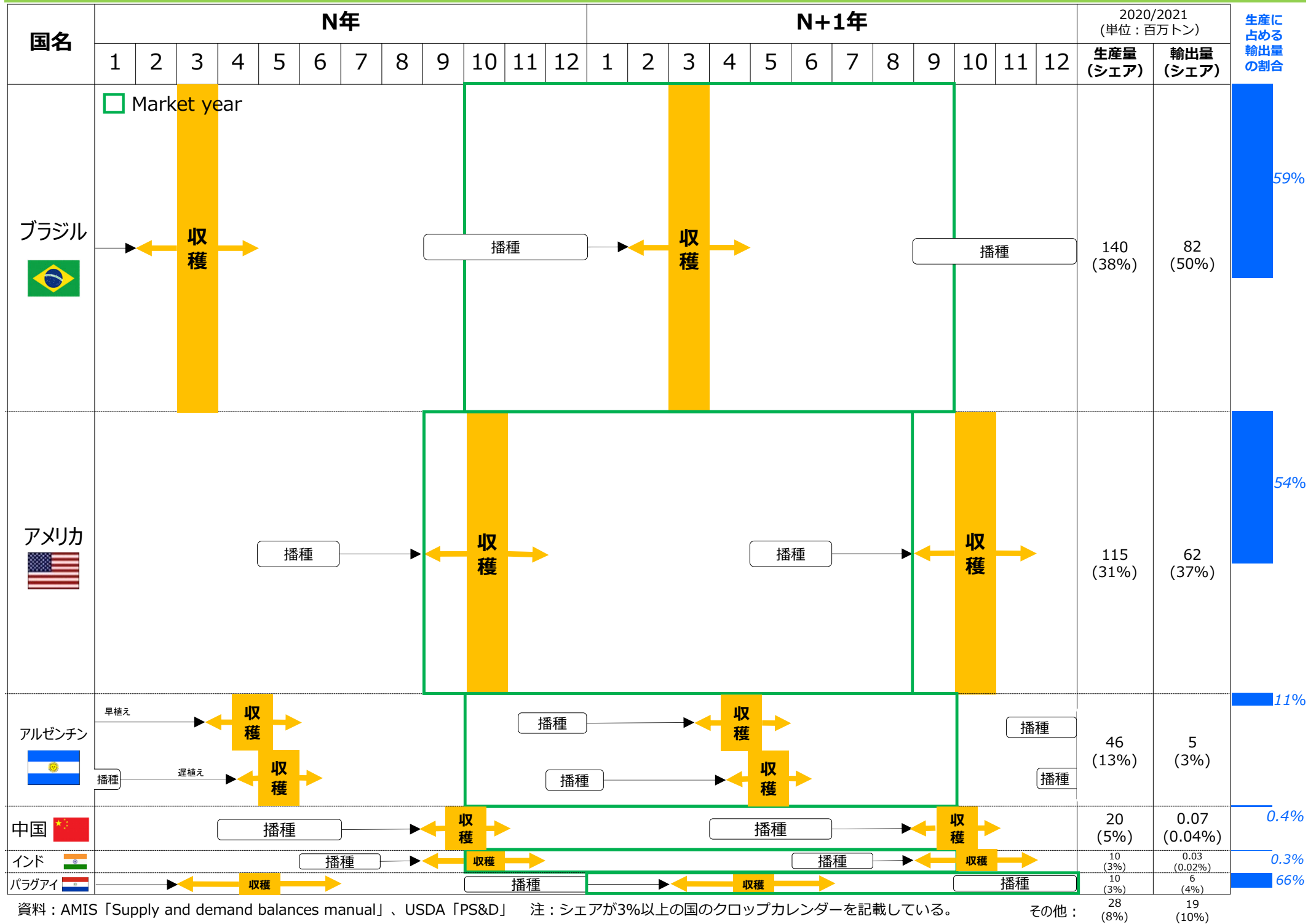
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他：242 (19%) 21 (11%)

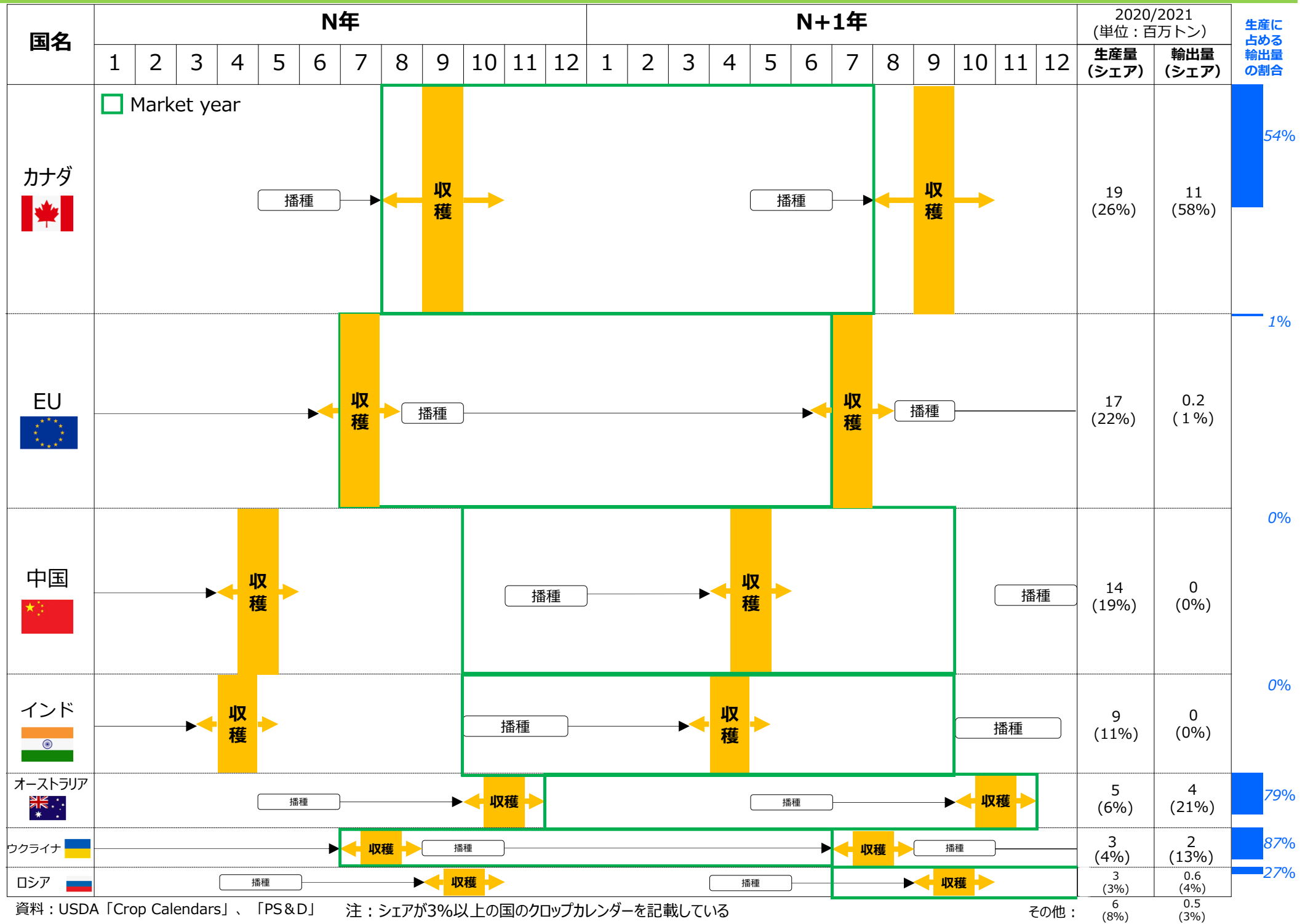
主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



第23号特別分析トピック:我が国と世界の肥料をめぐる動向(更新)

基礎編・国内編

肥料について

- 肥料の三要素は、窒素(N)、りん酸(P)、加里(K)である。
- 二次要素としてカルシウム、マグネシウム等、微量元素としてホウ素、マンガン等がある。

〔三要素〕

	各成分の働き
窒素(N)	植物(特に葉)の成長を促す。
りん酸(P)	開花結実を促す。
加里(K)	根の発育を促す。

〔二次要素〕

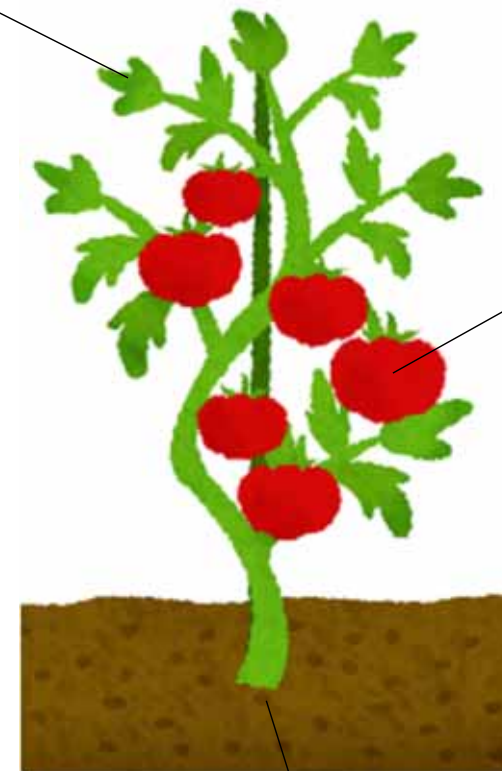
	各成分の働き
カルシウム(石灰)	植物による肥料成分の吸収を容易にする。
マグネシウム(苦土)	植物の新陳代謝を活発にする。
硫黄	葉緑素の生成に資する。

〔微量元素〕

	各成分の働き
ホウ素、マンガン、鉄、銅、亜鉛、モリブデン、塩素、ニッケル	植物の細胞膜などの形成維持やタンパク質の生成を助けるなど植物の健全な成長に資する。

肥料の三要素の役割

窒素:葉・茎



りん酸:
花・果実

加里:根・植物全体

注:上記の各要素は、いずれも欠乏による生理病と過剰障害に注意が必要。

肥料の種類

○ 肥料は、化学肥料と有機質肥料に大別される。

〔主な肥料の種類〕

	分 類	主な肥料	参考
化学肥料 (化学的に製造)	窒素質肥料	尿素(48.2%)、硫安(29.0%)、石灰窒素(1.6%)、硝安(1.2%) ※()内は国内需要(国産+輸入)の割合。28肥年Nトンベース。	石灰窒素は、農薬効果も期待できる。
	りん酸質肥料	熔成りん肥(6.0%)、過りん酸石灰(0.9%) ※()内は国内需要(国産+輸入)の割合。28肥年P ₂ O ₅ トンベース。 窒素窒肥料と比べ単肥での利用が少ない。	熔成りん肥は、りん成分が土壌中に緩やかに溶出することなどから土づくりに利用しやすい。
	加里質肥料	塩化加里(83.0%)、硫酸加里(14.8%) ※()内は国内需要(国産+輸入)の割合。28肥年K ₂ Oトンベース。	速攻性の肥料であり、単肥よりも化成肥料や配合肥料の原料となる。
	複合肥料	高度化成肥料、普通化成肥料、配合肥料	N、P、Kのうち2成分以上の肥料成分を含む。
	石灰質肥料	炭酸カルシウム肥料、消石灰	主に土壌の酸度矯正を目的とするアルカリ性の肥料。
	その他肥料	ケイ酸質肥料、苦土肥料	ケイ酸質肥料は、イネ科の植物の耐病、耐虫性等を高める。
有機質肥料 (動植物性の有機物が原料)	堆肥	牛ふん堆肥、豚ふん堆肥、鶏ふん堆肥	土づくりににも使用される。
	動植物質肥料	魚粕粉末、菜種油粕、骨粉	動物の肉・骨や魚、草本性植物の種子等から、圧搾等により水分・脂肪・油を搾った後の粕やその粉末。
	有機副産物肥料	汚泥肥料	下水道処理場等から回収した有機副産物を基に生産。

注: 家畜ふん堆肥の中で最も肥料成分が高い鶏ふん堆肥で、N:3%、P:7%、K:4%(千葉県農業総合研究センター調べ)。

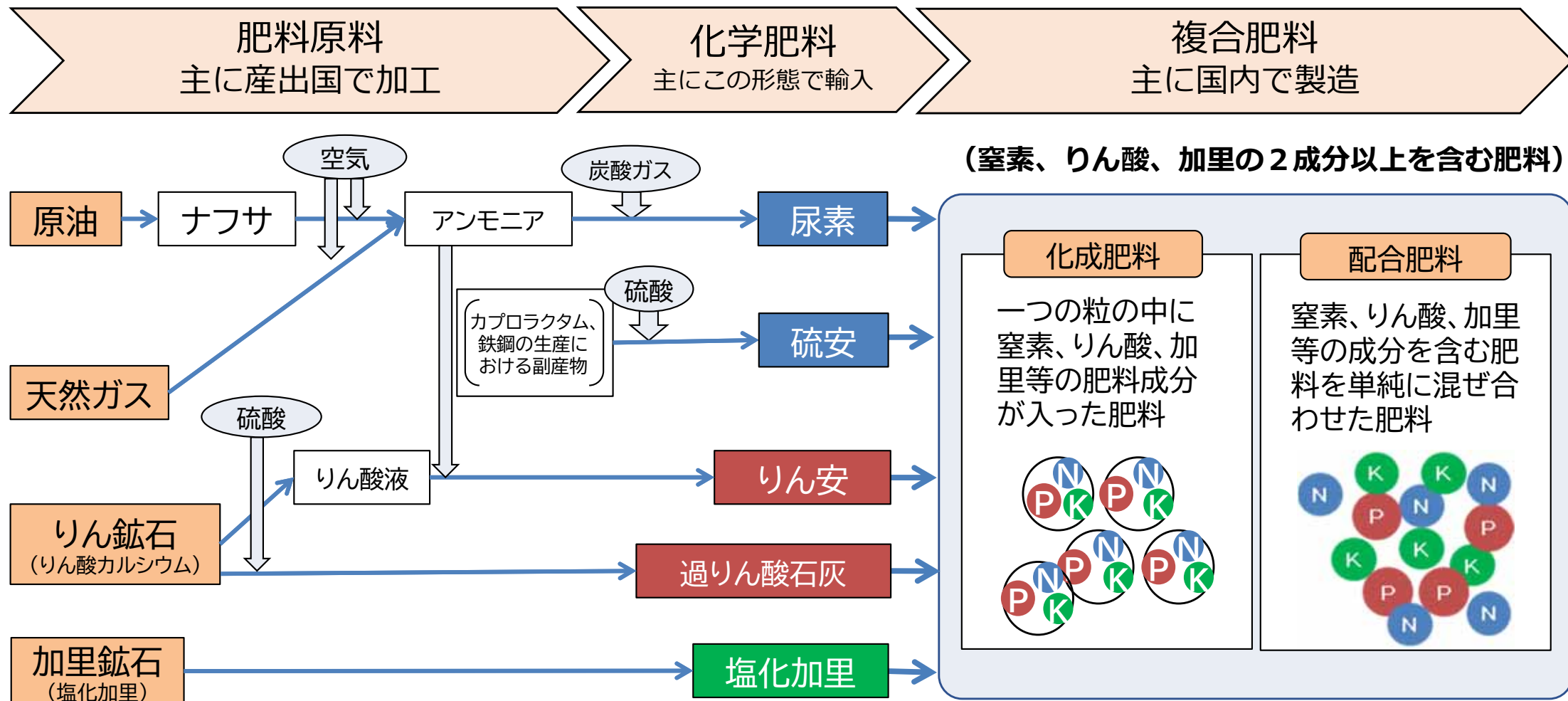
一般的な化学肥料である高度化成肥料は、N:14%、P:14%、K:14%。窒素窒肥料の割合には工業用を含む。

資料: ポケット肥料要覧2021/2022

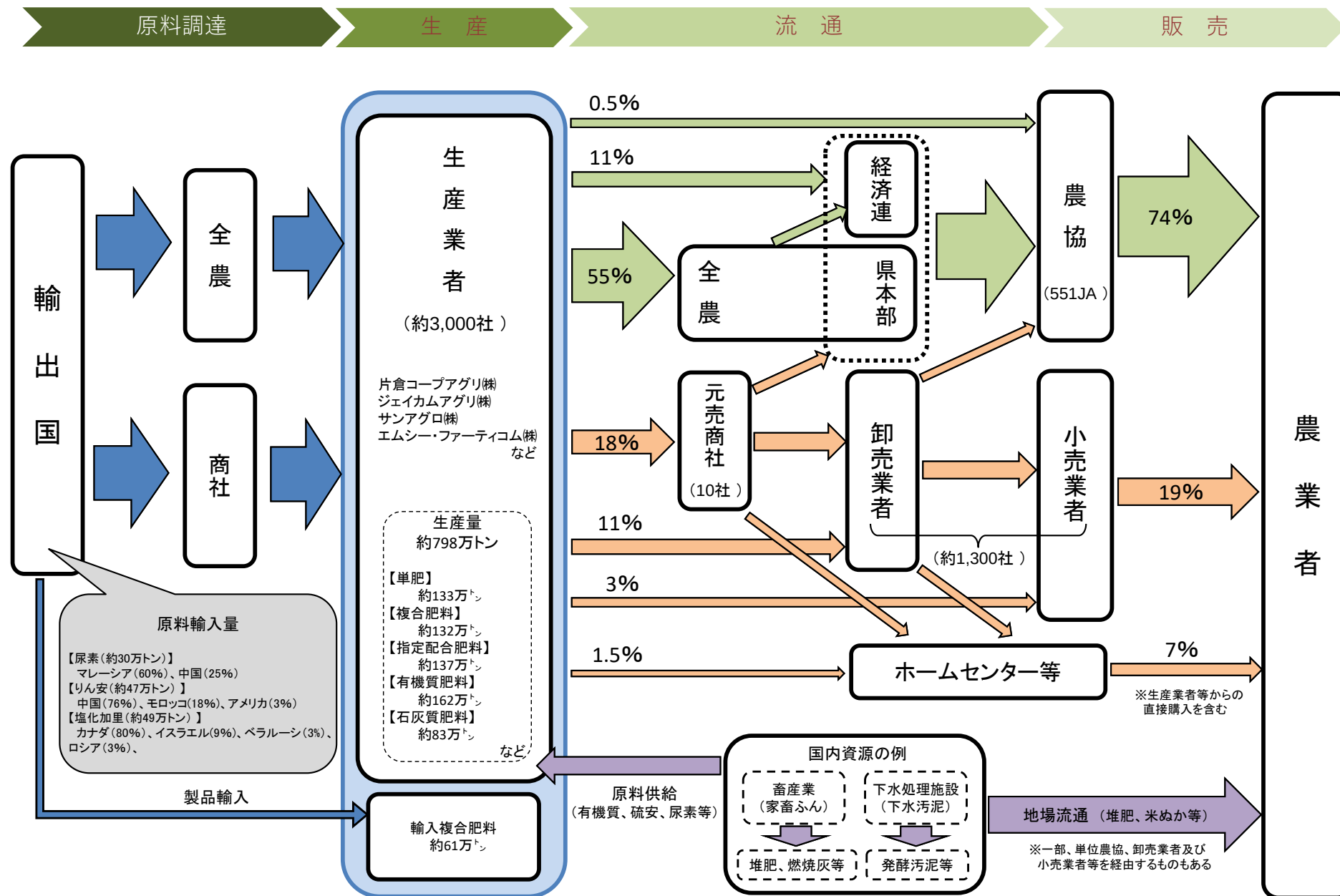
主要化学肥料の製造工程

○ 化学肥料は、化石燃料(原油、天然ガス)や鉱物資源(りん鉱石、加里鉱石等)が原料である。

【主な製造工程】



肥料の流通構造(商流)



注1:「原料輸入量」は、財務省貿易統計(令和3肥料年度)。

注2:「生産業者数」は、肥料法に基づく登録業者数(令和3年)。また、その他の事業者数は、業界団体会員数(令和4年)。

注3:「生産量」は、肥料法に基づく生産数量報告及び都道府県事務報告(輸出分を含む。)(令和2年)。

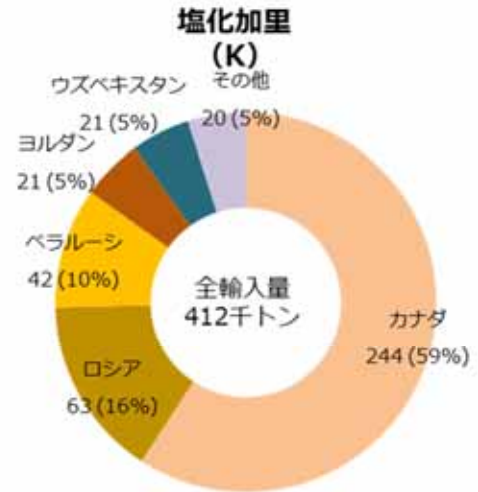
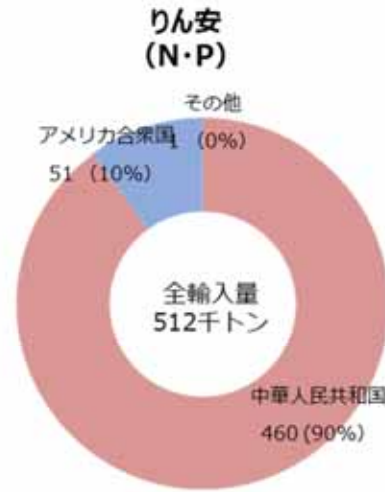
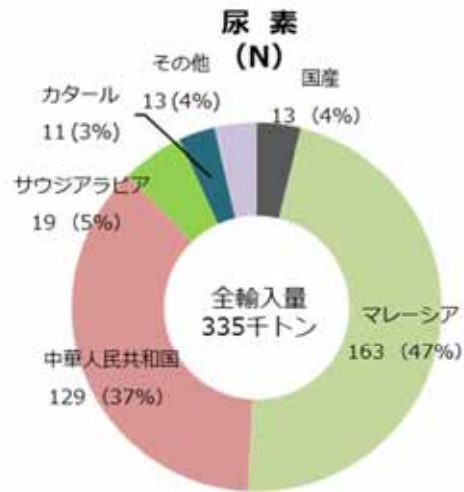
注4:「生産業者からの販売割合」は、数量の割合(資料:経済産業省「平成24年度中小企業支援調査 化学肥料製造における実態調査」)

注5:「農業者の購入割合」は購入した農業者数の割合(資料:農林水産省「農業資材コスト低減及び農作業の安全確保に関する意識・意向調査(平成25年)」)

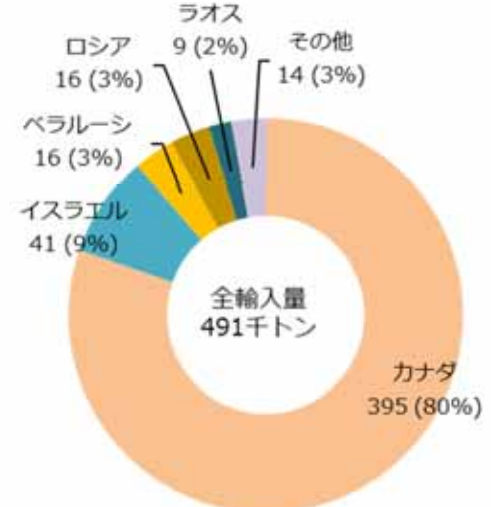
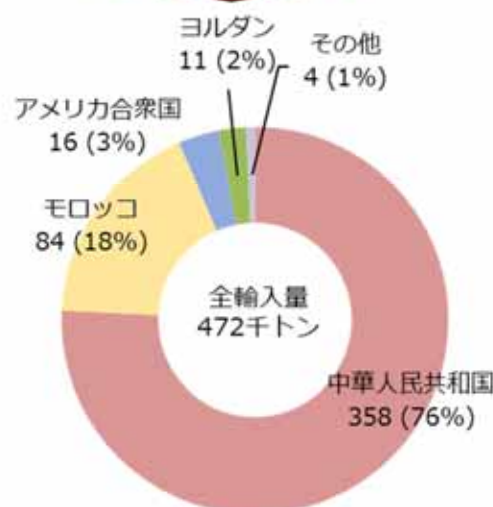
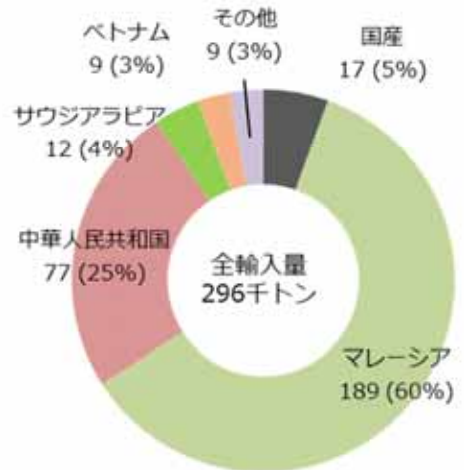
化学肥料原料の輸入相手国、輸入量

- 主な化学肥料の原料である尿素、りん安(りん酸アンモニウム)、塩化加里(塩化カリウム)は、ほぼ全量を輸入。世界的に資源が偏在しているため、輸入相手国も偏在。尿素はマレーシア及び中国、りん安は中国、塩化加里はカナダが主な輸入相手国。
- 令和3年秋以降、中国による肥料原料の輸出検査の厳格化のほか、ロシアによるウクライナ侵略の影響により、我が国の肥料原料の輸入が停滞したことを受け、代替国から調達する動きがみられる。

R 2 肥料年度（令和2年7月～令和3年6月）



R 3 肥料年度（令和3年7月～令和4年6月）



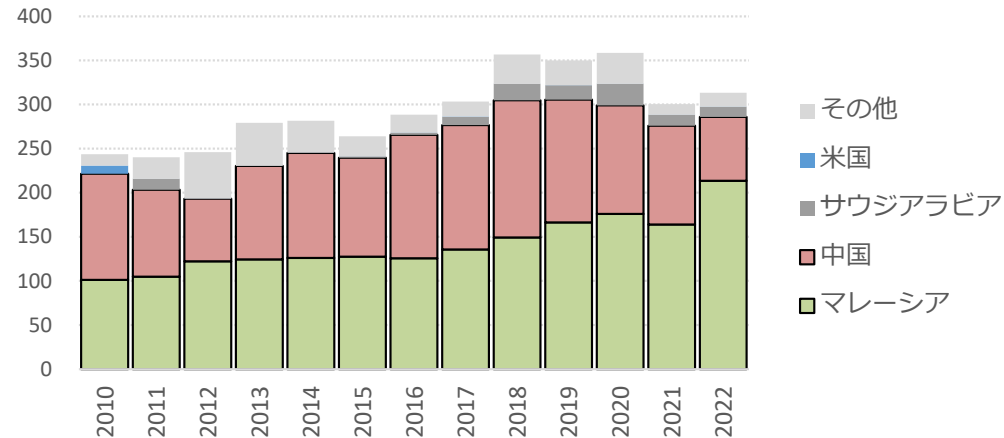
化学肥料原料の輸入量の長期推移

- 尿素はマレーシア、中国からの輸入が中心。
- リン安は米国からの輸入が減少し、中国からの輸入が増加していたが、足元ではモロッコからの輸入が増加。
- 塩化加里は、カナダからの調達が大宗。

単位：千トン

尿素

N

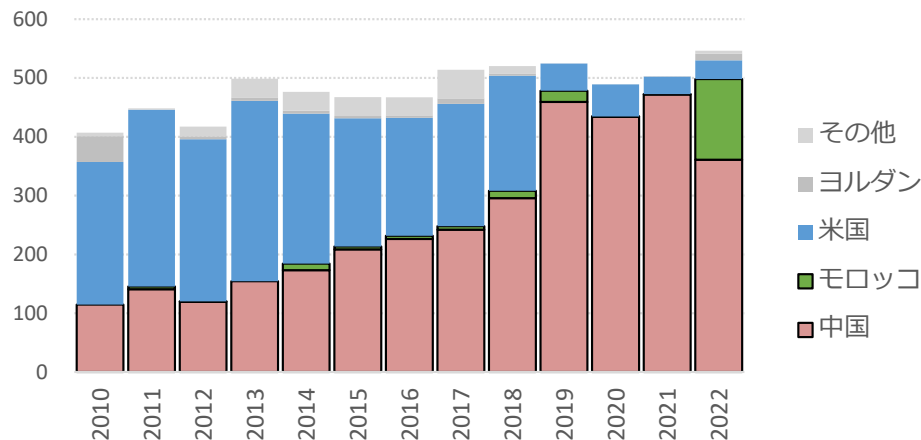


単位：千トン

りん安(りん酸アンモニウム)

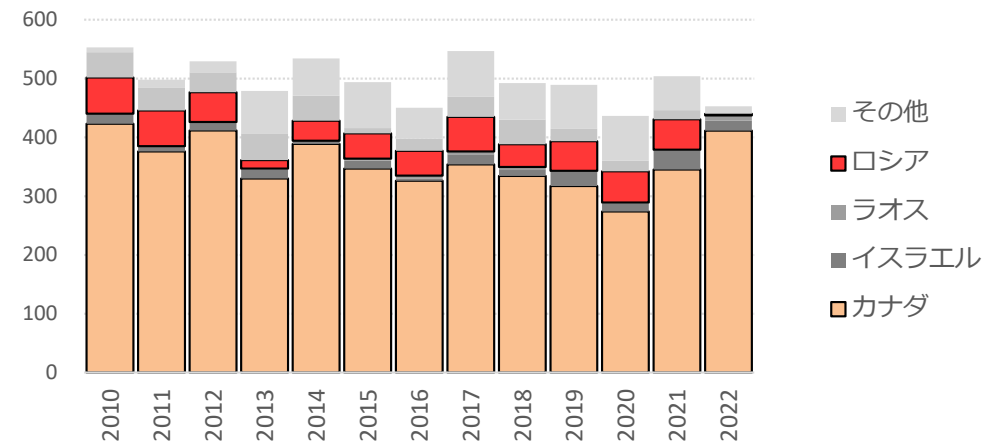
P

単位：千トン



塩化加里

K



資料: Global Trade Atlasを基に作成。暦年ベースの数量。

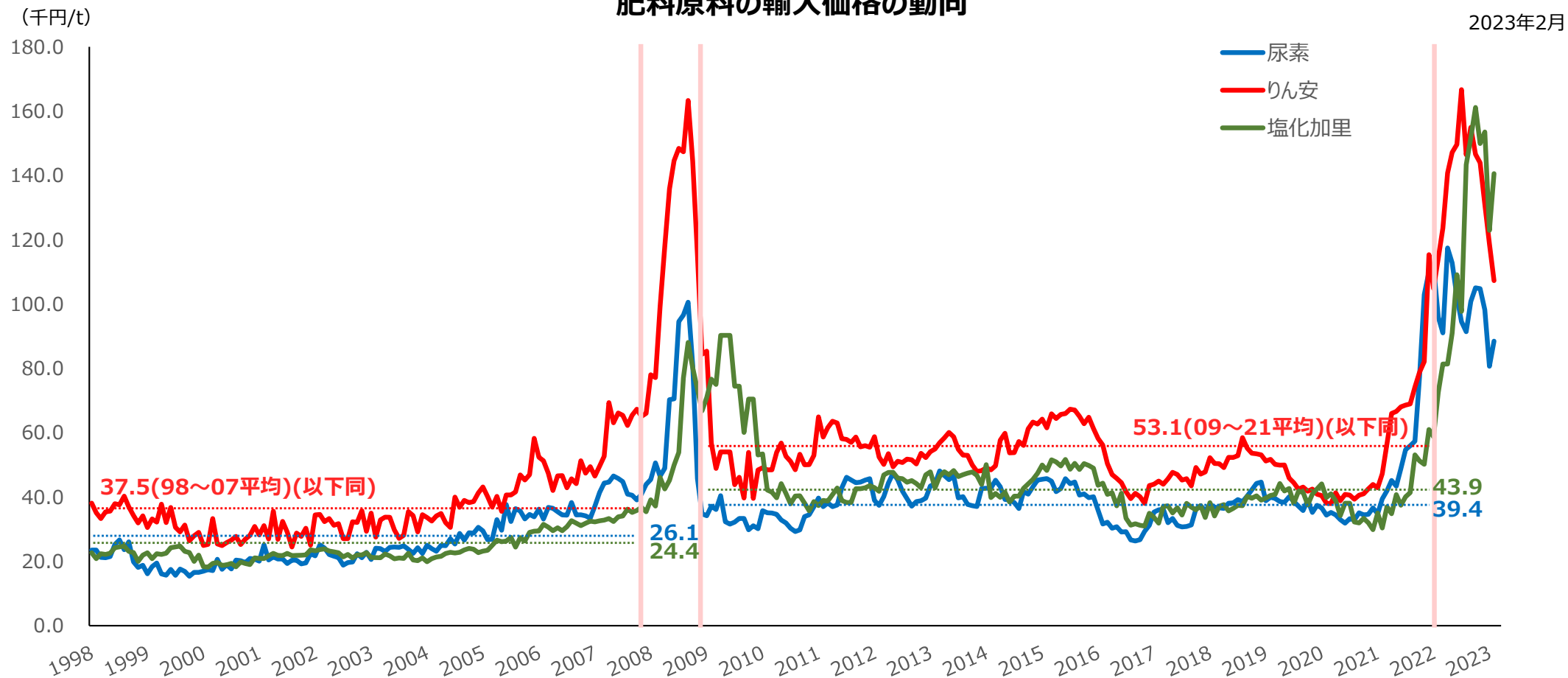
注: 尿素は310210(尿素)、塩化加里は310420(塩化カリウム)、りん安は310530(りん酸二アンモニウム)310540(りん酸一アンモニウム)の合算で算出。

(R5.5更新)

化学肥料原料の輸入価格の推移

- 化学肥料原料の国際価格は、昨年半ばより、穀物需要の増加や原油・天然ガスの価格の上昇等に伴い、高騰。
- 2008年、2022年の異常年を除外しても、肥料原料価格は2008年以前より以降の方が平均的に高くなっている。

肥料原料の輸入価格の動向



	1998~2007年平均価格		2009~2021年平均価格
尿素	26.1		39.4
りん安	37.5		53.1
塩化加里	24.4		43.9

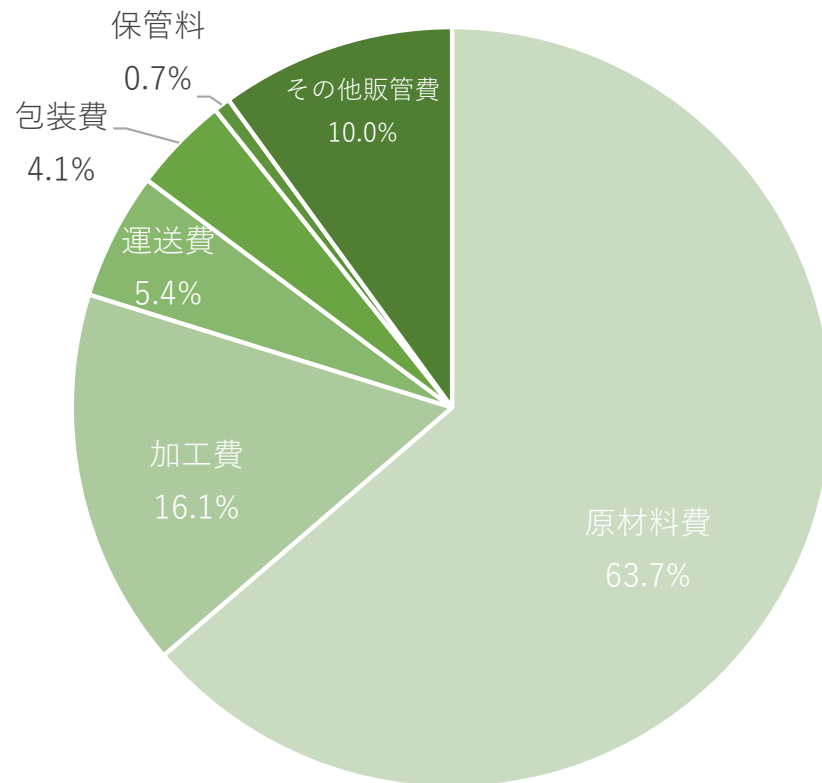
資料：農林水産省調べ

注：財務省貿易統計における各原料の輸入額を輸入量で除して算出。ただし、月当たりの輸入量が5,000t以下の月は前月の価格を表記。

肥料原料のコスト構造及び農業経営費に占める肥料費

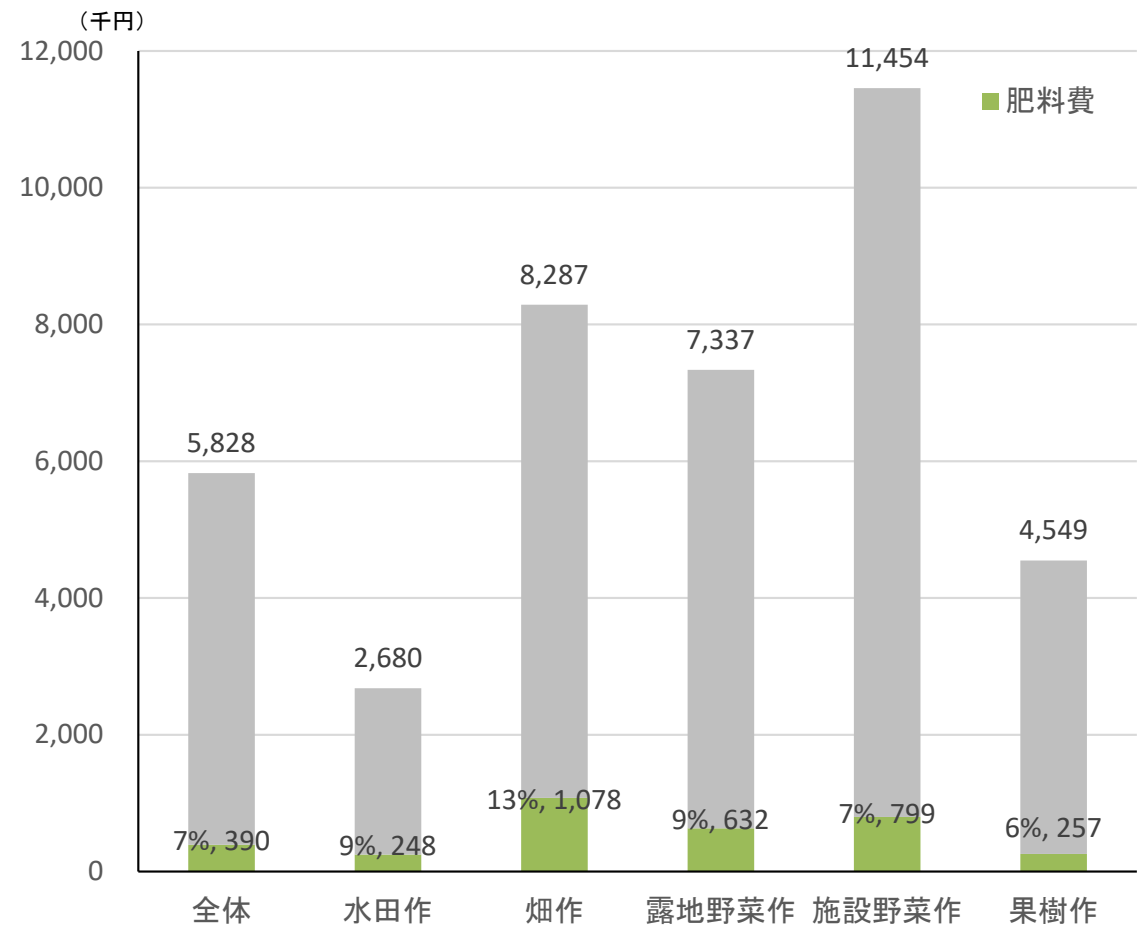
- 肥料は、製造コストの約6割を原材料が占めており、国内肥料価格は肥料原料価格の影響を大きく受ける。
- 営農類型別の経営費に占める肥料費の割合は、全体で7%、経営別で約6～13%となっている。

高度化成肥料のコスト構造



資料：経済産業省「平成24年度中小企業支援調査
化学肥料製造における実態調査」

経営体当たりの経営費に占める肥料費の割合



資料：農林水産省「令和2年営農類型別経営統計(個人経営体)」を基に作成

国際編

世界の肥料の生産量・消費量の推移と貿易率

- 肥料の主要生産国は中国、ロシア、インド等。消費国は中国、インド、ブラジル等。生産量・消費量ともに増加傾向。中国は生産量が消費量を上回るが、インド、ブラジル等は消費量が生産量を上回る。
- 窒素質肥料の消費割合が全体の半分以上を占める。
- リン酸質肥料や加里質肥料は、鉱物資源を原料とするため生産国が限られており、貿易率が高い。

(単位：百万トン)

250

肥料生産量

※括弧内の数値は2020年における割合

200

150

100

50

0

資料：FAOSTAT

注：数値は、窒素、リン、加里の成分ベース。使用量は農業用使用量(単位：成分百万トン)

(単位：百万トン)

250

肥料消費量

※括弧内の数値は2020年における割合

200

150

100

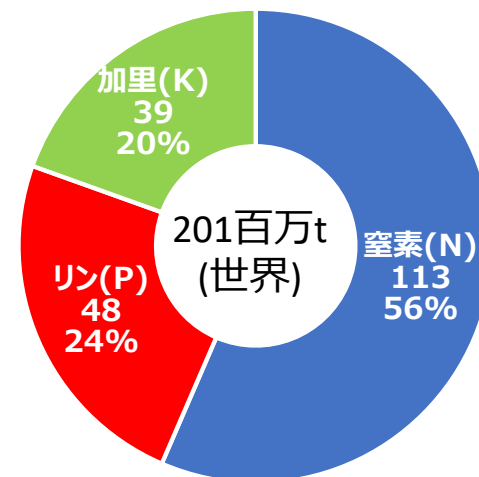
50

0

資料：FAOSTAT

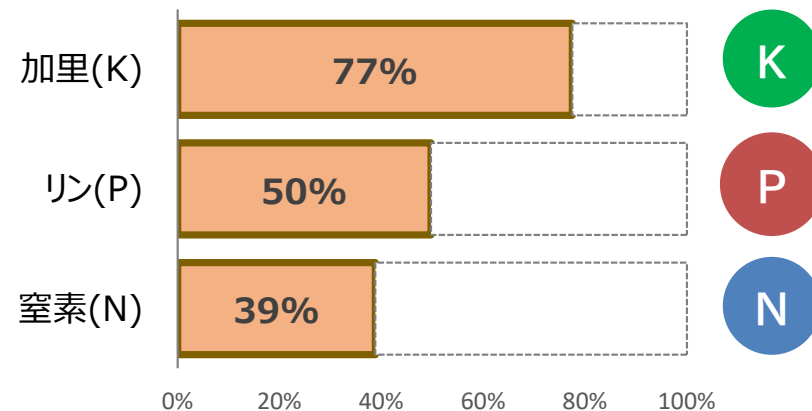
注：貿易率は輸出量/生産量で計算。それぞれ成分ベース。

成分別の使用割合(世界) (2020年)



資料：FAOSTAT

肥料の貿易率

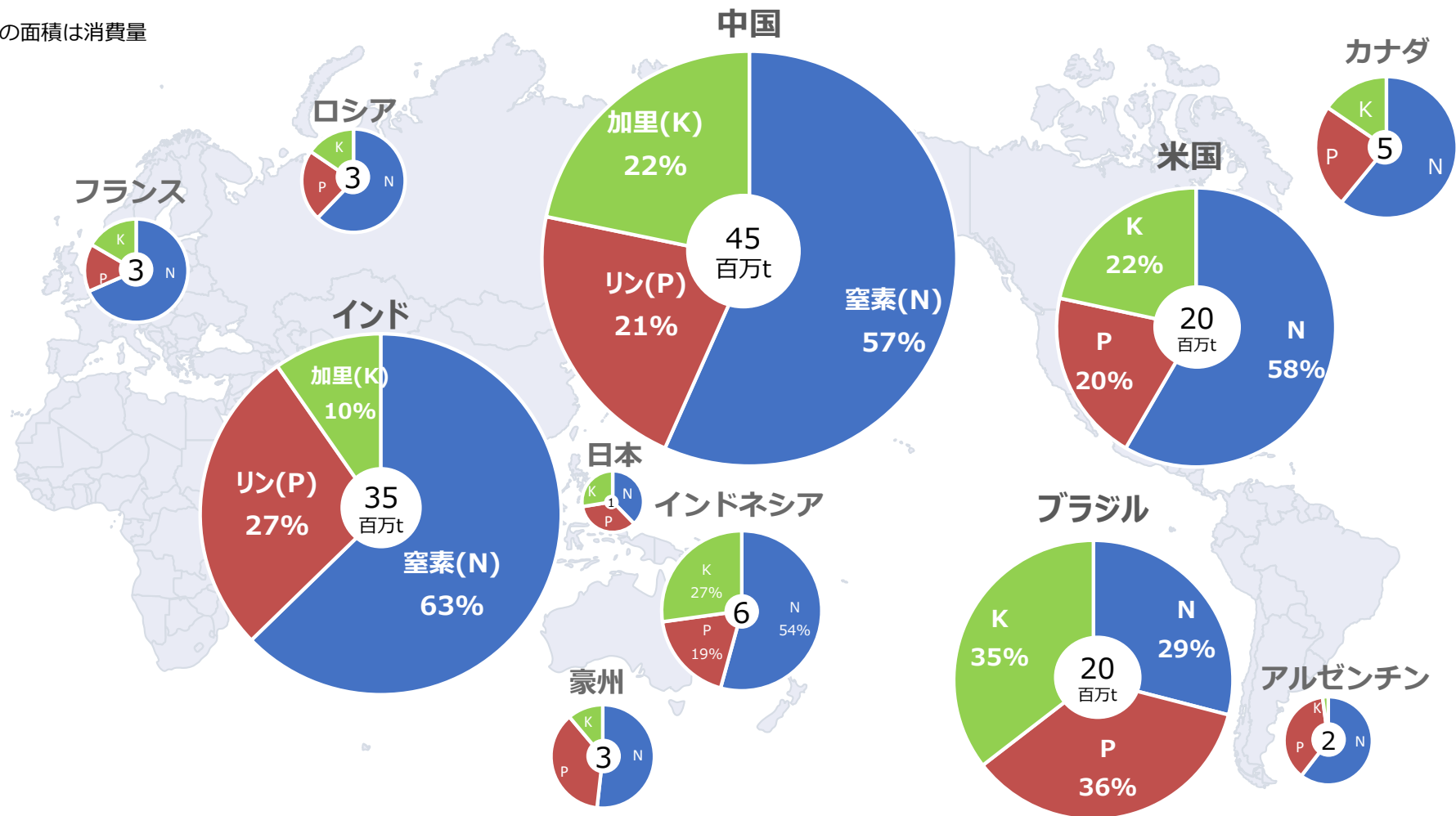


(R5.5更新)

主な消費国における成分別の消費量割合

○ 成分別の使用量割合について、国ごとに大きな違いはない。なお、ブラジルに関しては、大豆生産の割合が高いことや、土壌栄養分の状況等から、窒素に比べてりんや加里の消費量が比較的多い。

※円の面積は消費量



資料:FAO Statを基に作成、成分ベース、2020年数値

(参考) 日本の成分ベースの消費量は約1百万トン (N : 38%、P : 35%、K : 28%)

りん鉱石、塩化加里の産出量及び経済埋蔵量

- りん鉱石は、中国、モロッコ及びエジプトの3か国で世界の経済埋蔵量の約8割、加里鉱石は、カナダ、ベラルーシの2か国で約7割を占める。
- 経済埋蔵量と2022年産出量から可採年数を推定すると、りん鉱石で約330年、加里鉱石で約280年となる。

P りん鉱石の産出量及び経済埋蔵量

(単位: 鉱石千トン)

国名	産出量 (2022)		経済埋蔵量	
		割合		割合
中国	85,000	39%	1,900,000	3%
モロッコ	40,000	18%	50,000,000	69%
米国	21,000	10%	1,000,000	1%
ロシア	13,000	6%	600,000	1%
ヨルダン	10,000	5%	1,000,000	1%
サウジアラビア	9,000	4%	1,400,000	2%
ブラジル	5,500	3%	1,600,000	2%
エジプト	5,000	2%	2,800,000	4%
ベトナム	4,500	2%	30,000	0%
ペルー	4,200	2%	210,000	0%
チュニジア	4,000	2%	2,500,000	3%
イスラエル	3,000	1%	60,000	0%
セネガル	2,600	1%	50,000	0%
オーストラリア	2,500	1%	1,100,000	2%
アルジェリア	1,800	1%	2,200,000	3%
南アフリカ	1,600	1%	1,600,000	2%
カザフスタン	1,500	1%	260,000	0%
トーゴ	1,500	1%	30,000	0%
インド	1,400	1%	46,000	0%
フィンランド	1,000	0%	1,000,000	1%
ウズベキスタン	900	0%	100,000	0%
トルコ	800	0%	50,000	0%
メキシコ	450	0%	30,000	0%
その他	1,600	1%	2,600,000	4%
世界計	220,000	100%	72,000,000	100%

資料: USGS 「Mineral Commodity Summaries」2023報告書
注: 経済埋蔵量は、現在のコスト水準、技術レベルで採掘が可能な量

経済埋蔵量から推定した可採年数 72,000百万トン ÷ 220百万トン ≒ 330年

K りん鉱石の産出量及び経済埋蔵量

(単位: 鉱石千トン)

国名	産出量 (2022)		経済埋蔵量	
		割合		割合
カナダ	16,000	40%	4,500,000	41%
中国	6,000	15%	—	—
ロシア	5,000	13%	—	—
ベラルーシ	3,000	8%	3,300,000	30%
ドイツ	2,800	7%	—	—
イスラエル	2,500	6%	—	—
ヨルダン	1,700	4%	—	—
チリ	850	2%	—	—
ラオス	600	2%	500,000	5%
スペイン	450	1%	—	—
米国	440	1%	970,000	9%
ブラジル	270	1%	10,000	0%
その他	350	1%	1,500,000	14%
世界計	40,000	100%	11,000,000	—

資料: USGS 「Mineral Commodity Summaries」2023報告書
注: 経済埋蔵量は、現在のコスト水準、技術レベルで採掘が可能な量

経済埋蔵量から推定した可採年数
11,000百万トン ÷ 40百万トン ≒ 280年

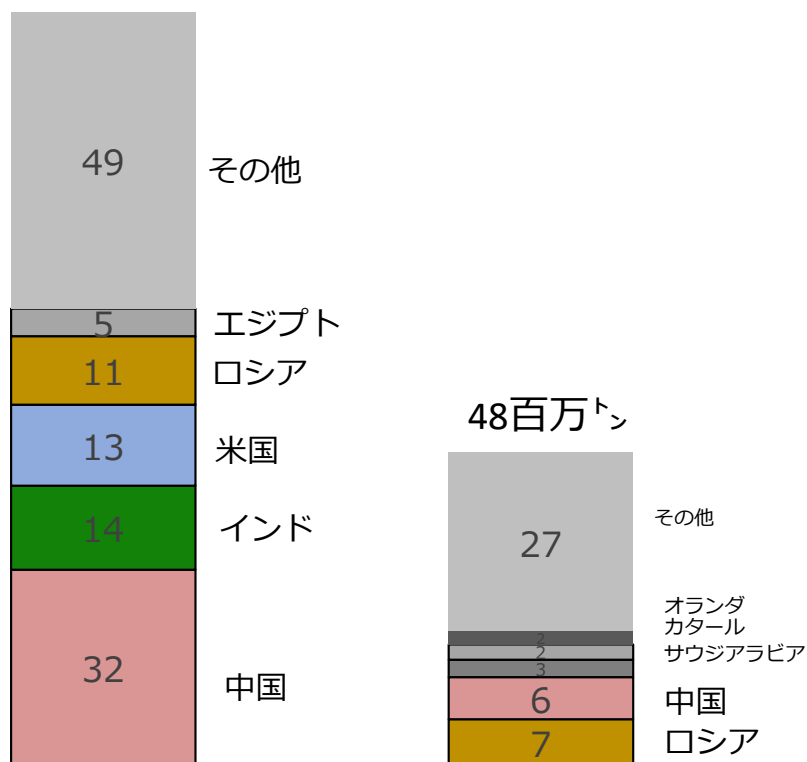
○ 窒素質肥料の主な消費国である中国やインドでの生産が多く、余剰分が輸出されている。ロシアに関しては自国消費がそれらの国と比較して小さく、生産量の大部分を輸出。その他、中東の産油国などから輸出されている。

窒素質肥料

生産量
(成分ベース)

輸出量
(成分ベース)

123百万ト



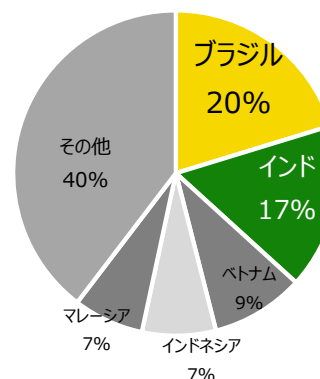
生産量

輸出量

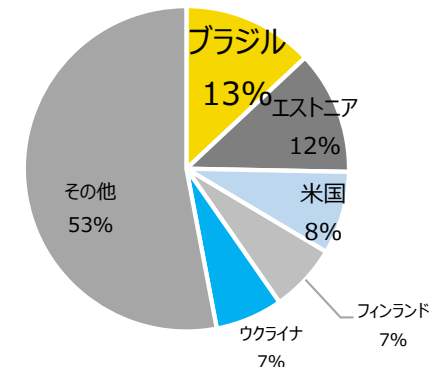
資料:FAO STATを基に作成(Nutrient nitrogen Nの2020年の数値)

主要輸出国の主な輸出先

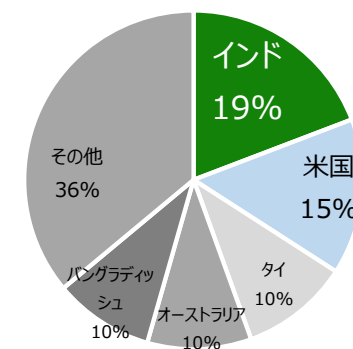
中国



ロシア



サウジアラビア



資料:Global Trade Atlas (2021年数値)

注:FAOにおけるStraight Nitrogenic Fertilizers の区分に従い、HSコード、310210、310221、310230、310240、310250、310280、281410、281420、310260、282710、283410、310229、310290、310270 (HS 92-02)の合算値とした

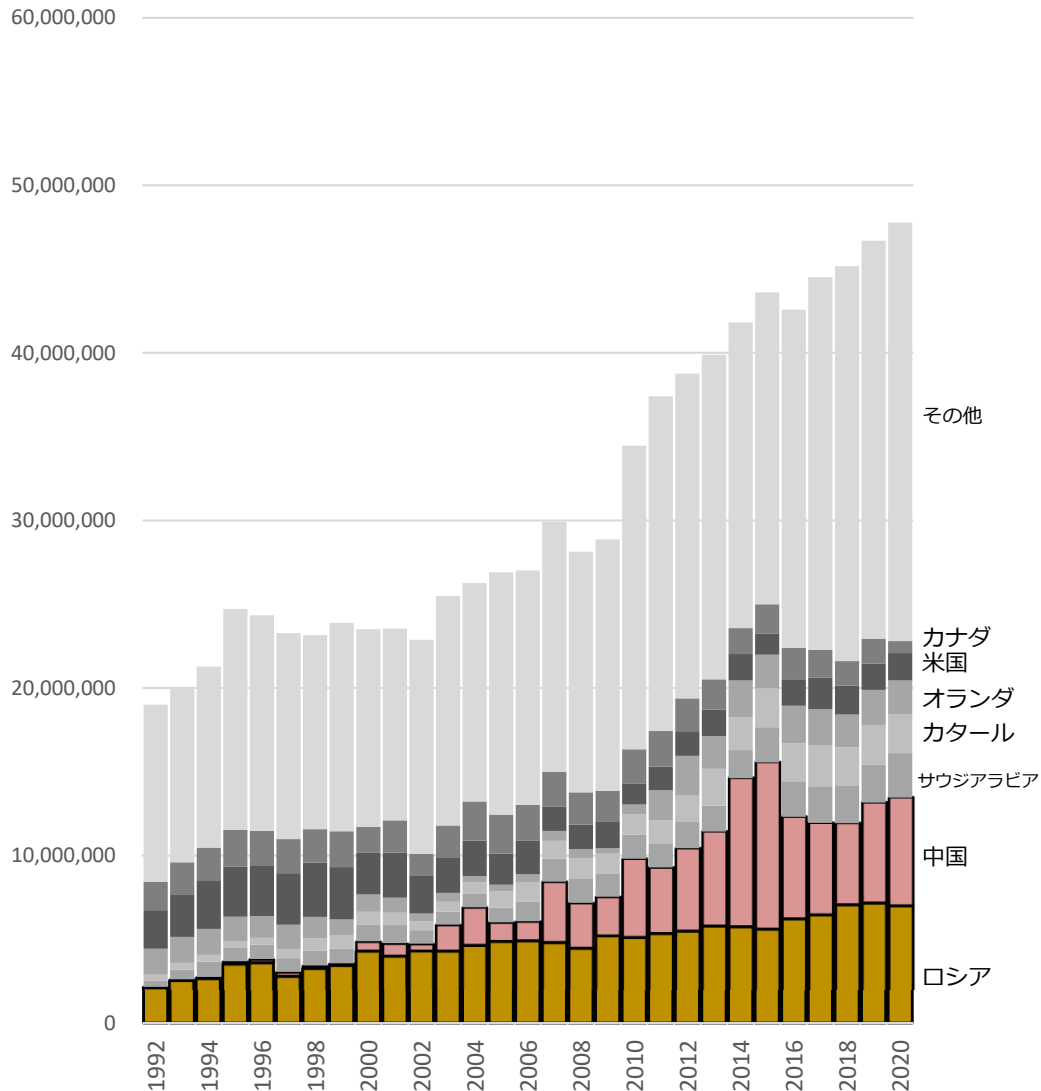
窒素質肥料の輸出入量の推移(国別)

N

- 窒素質肥料の輸出は近年、ロシアや中国等で増加。天然ガス・石油の産出国が輸出国の中心。
- 輸入は、近年、インドやブラジル等で増加。

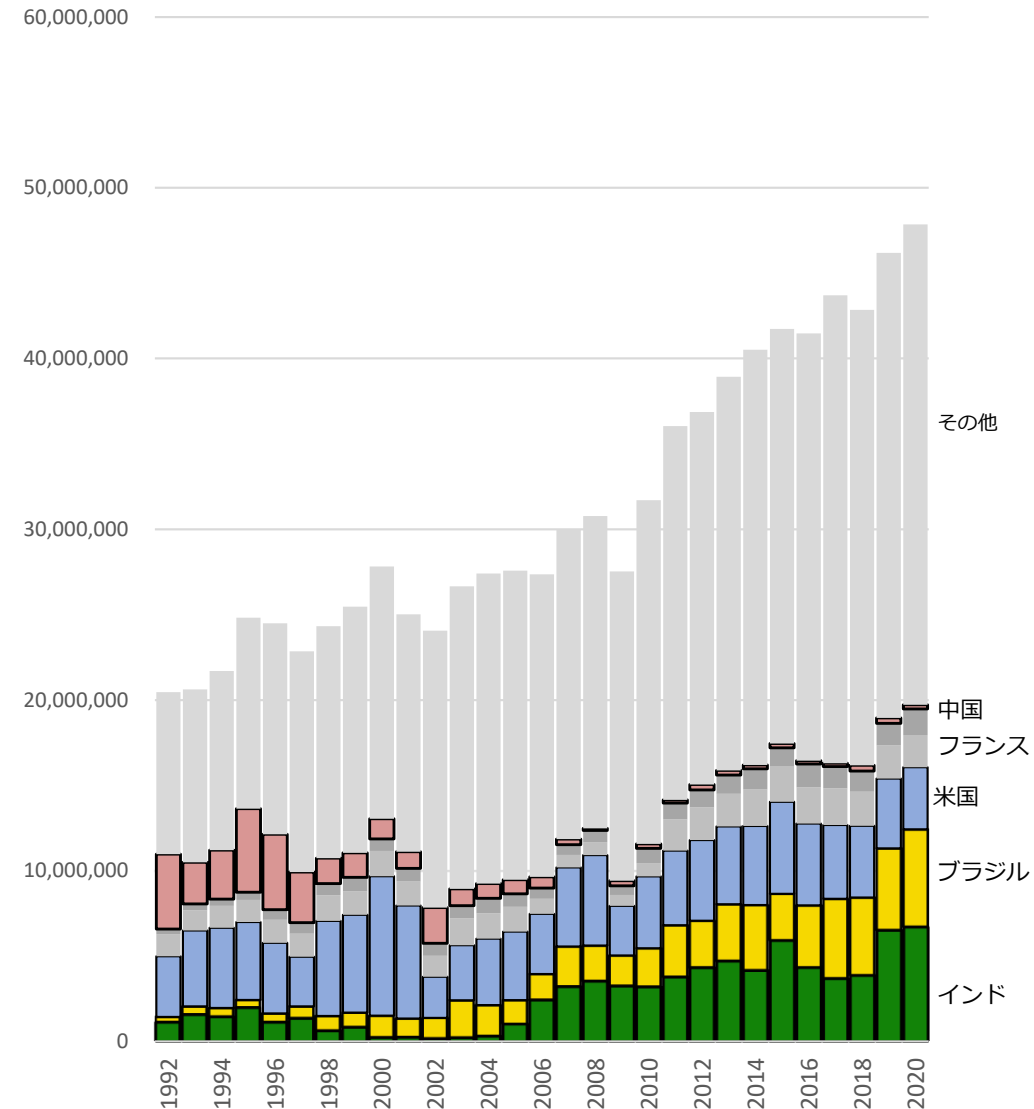
輸出国の推移

単位：トン



輸入国の推移

単位：トン



資料:FAO STATを基に作成(Nutrient nitrogen Nの数値)

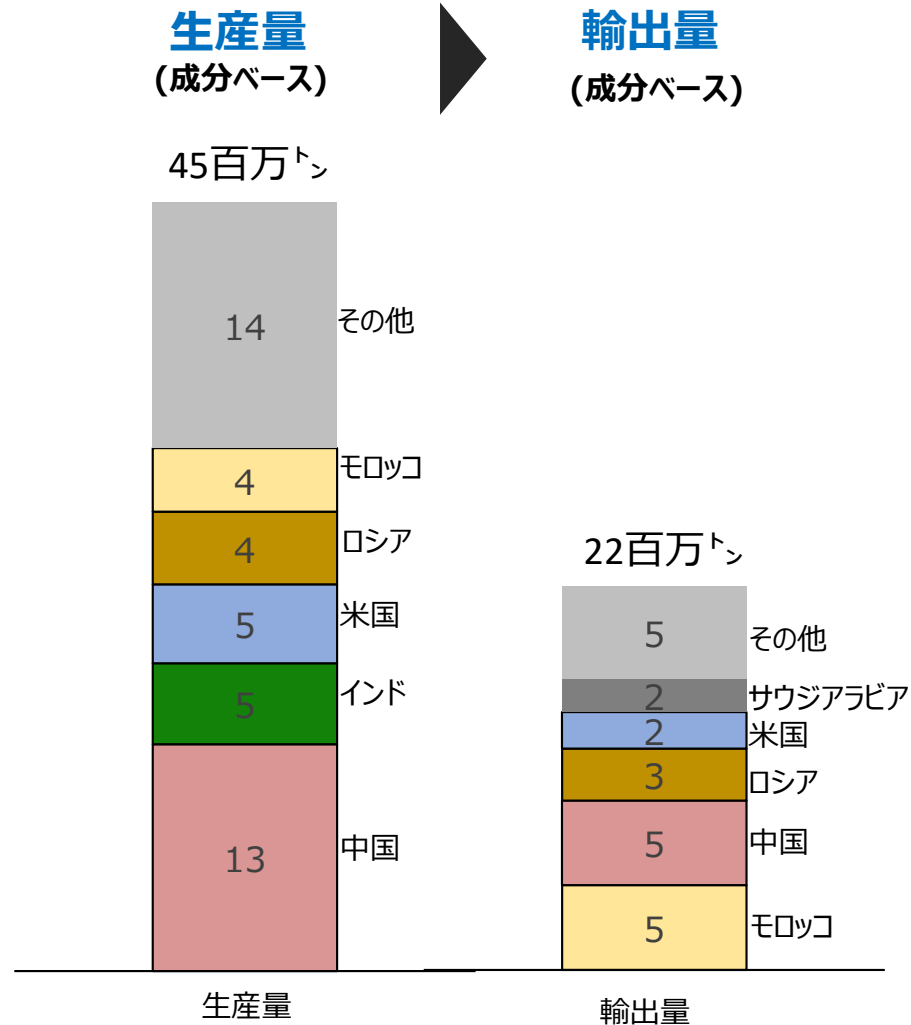
注:2020年時点における上位5か国と1992年時点における上位3か国を抽出

(参考) 日本の成分ベースの輸入量は約293千トン

(R5.5更新)

○ りん酸質肥料は中国が世界最大の生産国。モロッコやロシアは、自国消費量が比較的小さいため、生産量の大部分を輸出。

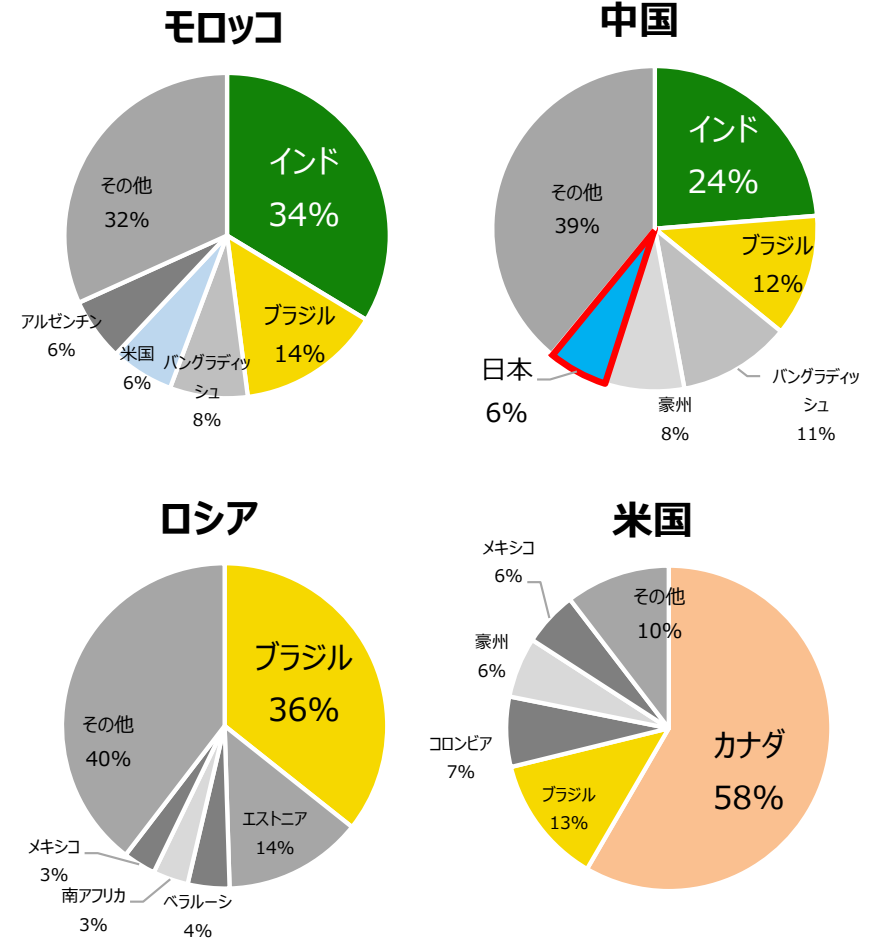
りん酸質肥料



資料:FAO STATを基に作成(Nutrient phosphate P2O5 の2020年の数値)

注:輸出量には期末在庫からの輸出分も含む。インドは鉱物資源もヨルダン、モロッコから輸入。

主要輸出国の主な輸出先



資料:ITC Trade、Global Trade Atlas

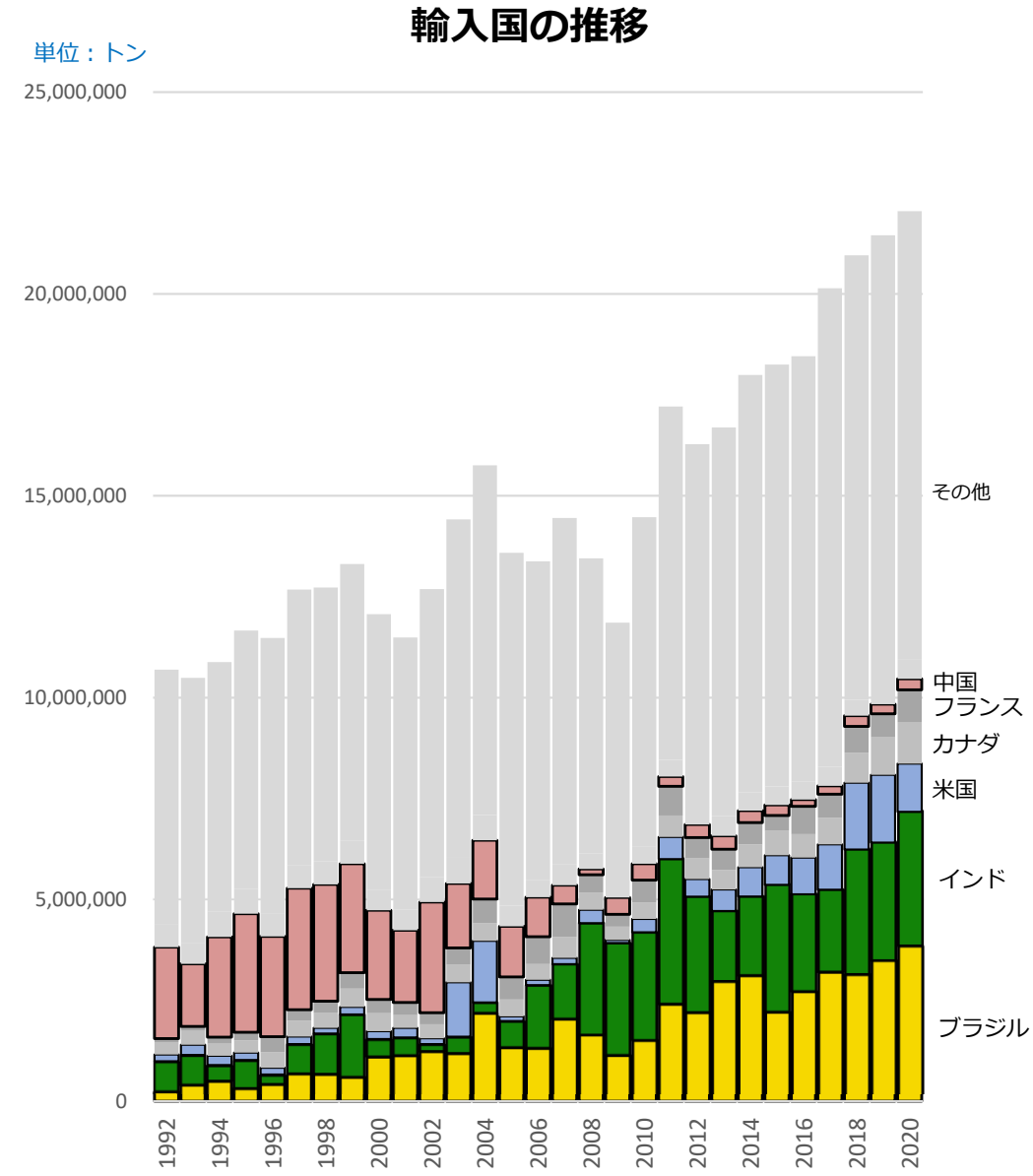
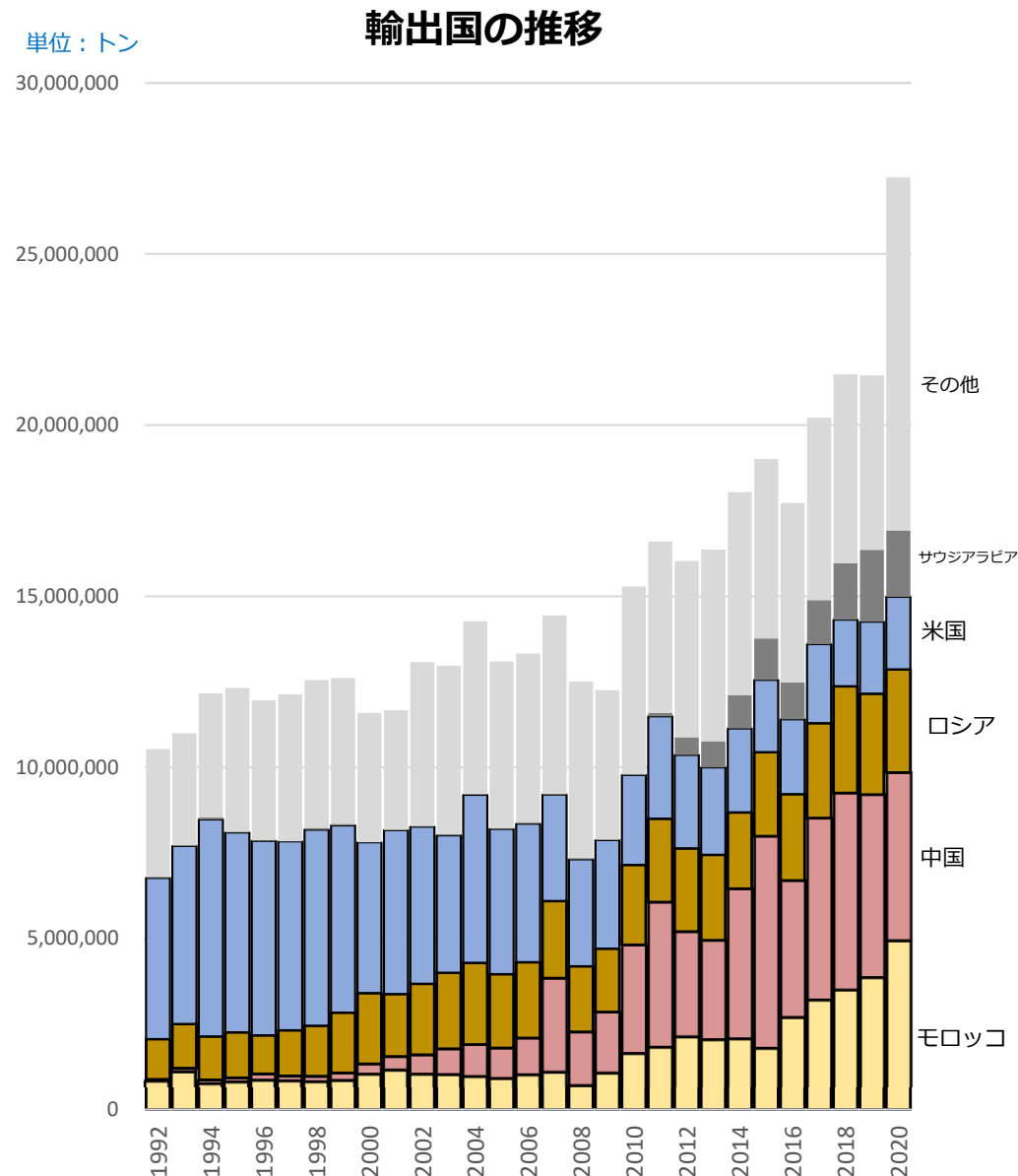
注:HSコード、310530(オルトりん酸水素二アンモニウム(りん酸二アンモニウム))、310540(オルトりん酸二水素アンモニウム(りん酸一アンモニウム))及びこれとオルトりん酸水素二アンモニウム(りん酸二アンモニウム)との混合物の合算値

注:それぞれの国の取得可能な最新値(モロッコ、中国は2022年、ロシア、米国は2021年の数値)。

りん酸質肥料の輸出入量の推移(国別)

P

- りん酸質肥料の輸出は米国の輸出が減少したが、近年、モロッコや中国、ロシア等で増加。
- 輸入は、近年、ブラジルやインド等で増加。



資料：FAO STATを基に作成(Nutrient phosphate P2O5 の数値)
注：2020年時点における上位5か国と1992年時点における上位3か国を抽出

(参考) 日本の成分ベースの輸入量は約277千トン

(R5.5更新) 18

りん安の貿易フロー(2021年)

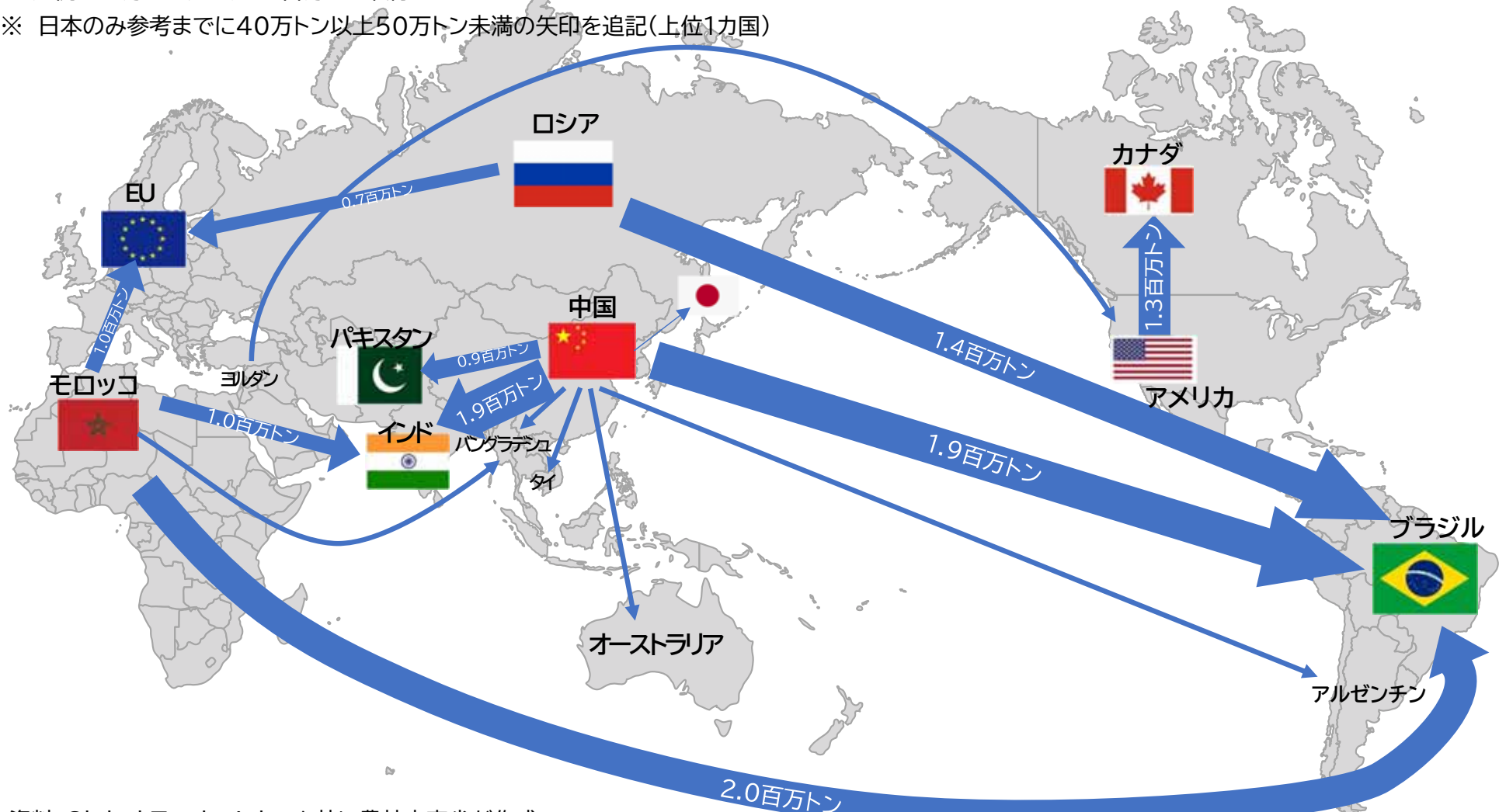
P

○ りん鉱石の産地が偏在しており、りん安(りん酸アンモニウム)の輸出は、中国からブラジルやインド等に、ロシアからブラジルやEU等に、モロッコからブラジルやEU等に輸出される量が比較的多い。

※ 50万トン以上輸出している貿易フローを作図

凡例: 50万トン以上、0.9百万トン未満: 

※ 日本のみ参考までに40万トン以上50万トン未満の矢印を追記(上位1カ国)



資料: Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成

注: HSコード、310530(オルトリン酸水素ニアンモニウム(りん酸ニアンモニウム)、310540(オルトリン酸二水素アンモニウム(りん酸一アンモニウム)及びこれとオルトリン酸水素ニアンモニウム(りん酸ニアンモニウム)との混合物)の合算値

注: レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある

注: EUとモロッコは輸入数量から逆算。

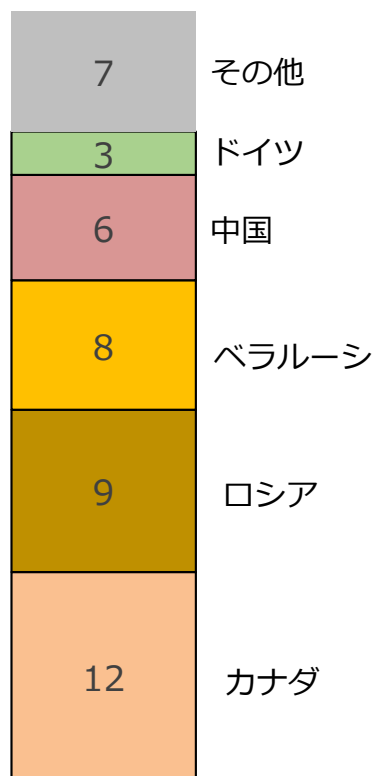
○ カナダ、ロシア、ベラルーシ、中国が主要な生産国。カナダは米国等に、ロシア・ベラルーシはブラジルや中国等に輸出。

加里質肥料

生産量

(成分ベース)

45百万トン

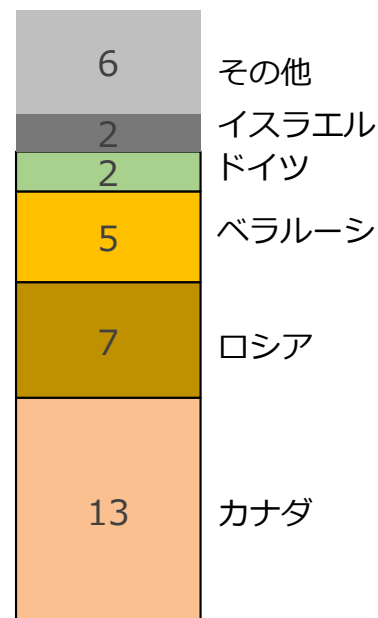


生産量

輸出量

(成分ベース)

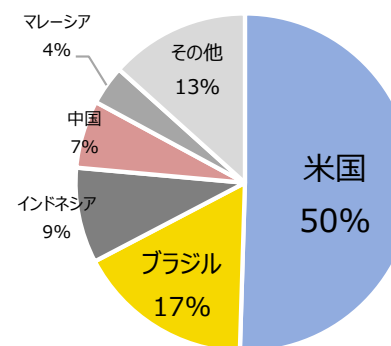
35百万トン



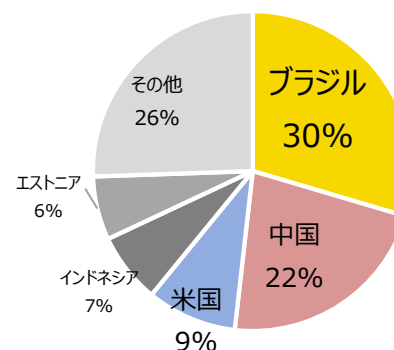
輸出量

主要輸出国の主な輸出先

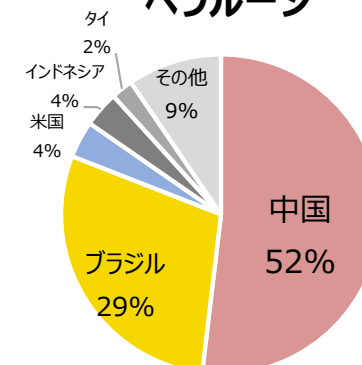
カナダ



ロシア



ベラルーシ



資料: ITC Trade、Global Trade Atlas

注: HSコード、310420(塩化カリウム)の数値

注: ベラルーシは2022年の数値のうち集計可能な国の合計値をベースにシェアを算出。
カナダ、ロシアは2021年の数値。

資料: FAO STATを基に作成(Nutrient potash K₂Oの2020年の数値)

注: 輸出量には期末在庫からの輸出分も含む。

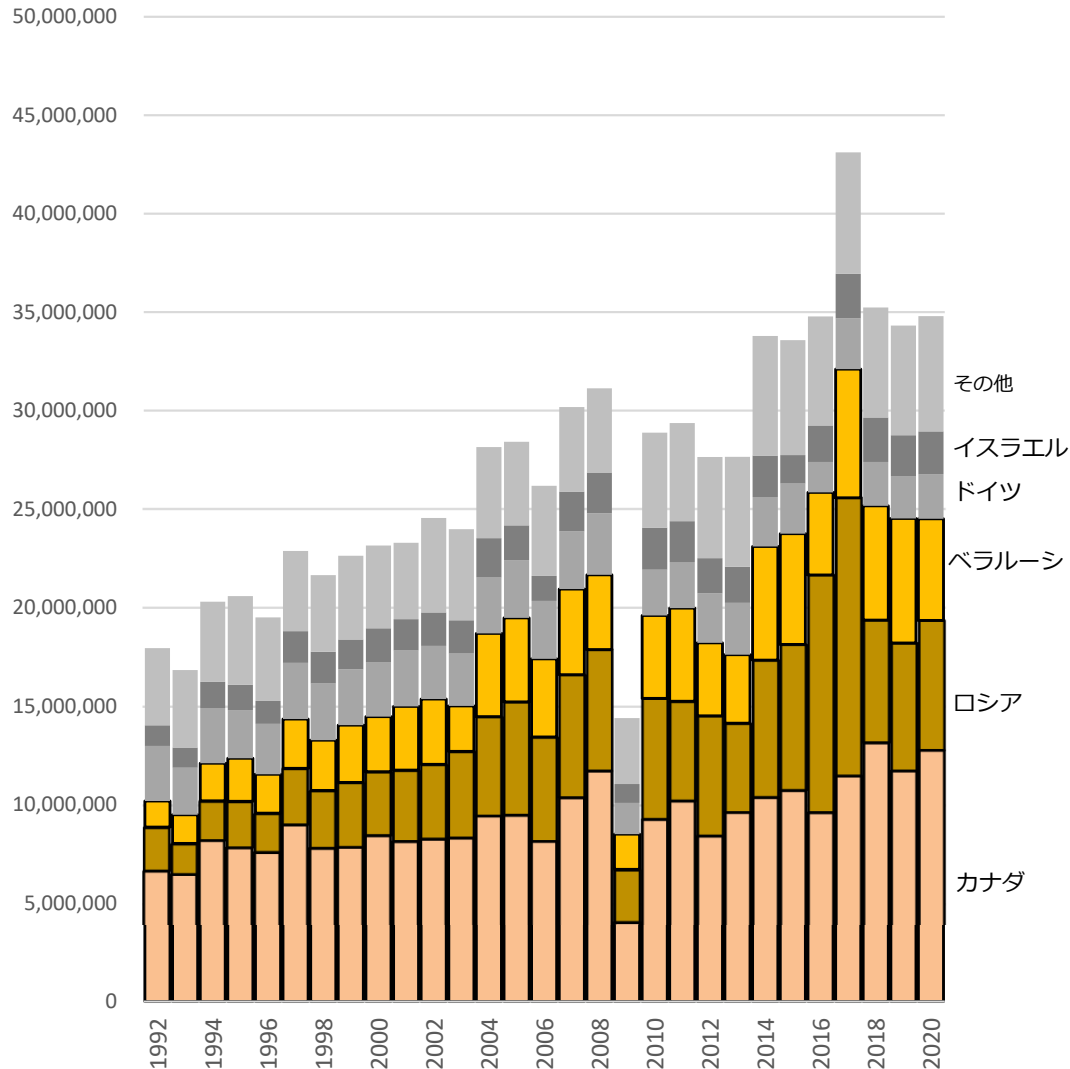
加里質肥料の輸出入量の推移(国別)

K

- 加里質肥料の輸出はカナダや、ロシアやベラルーシ等が多くを占める。
- 輸入は、米国に加え、近年、ブラジルや中国、インド等で増加。

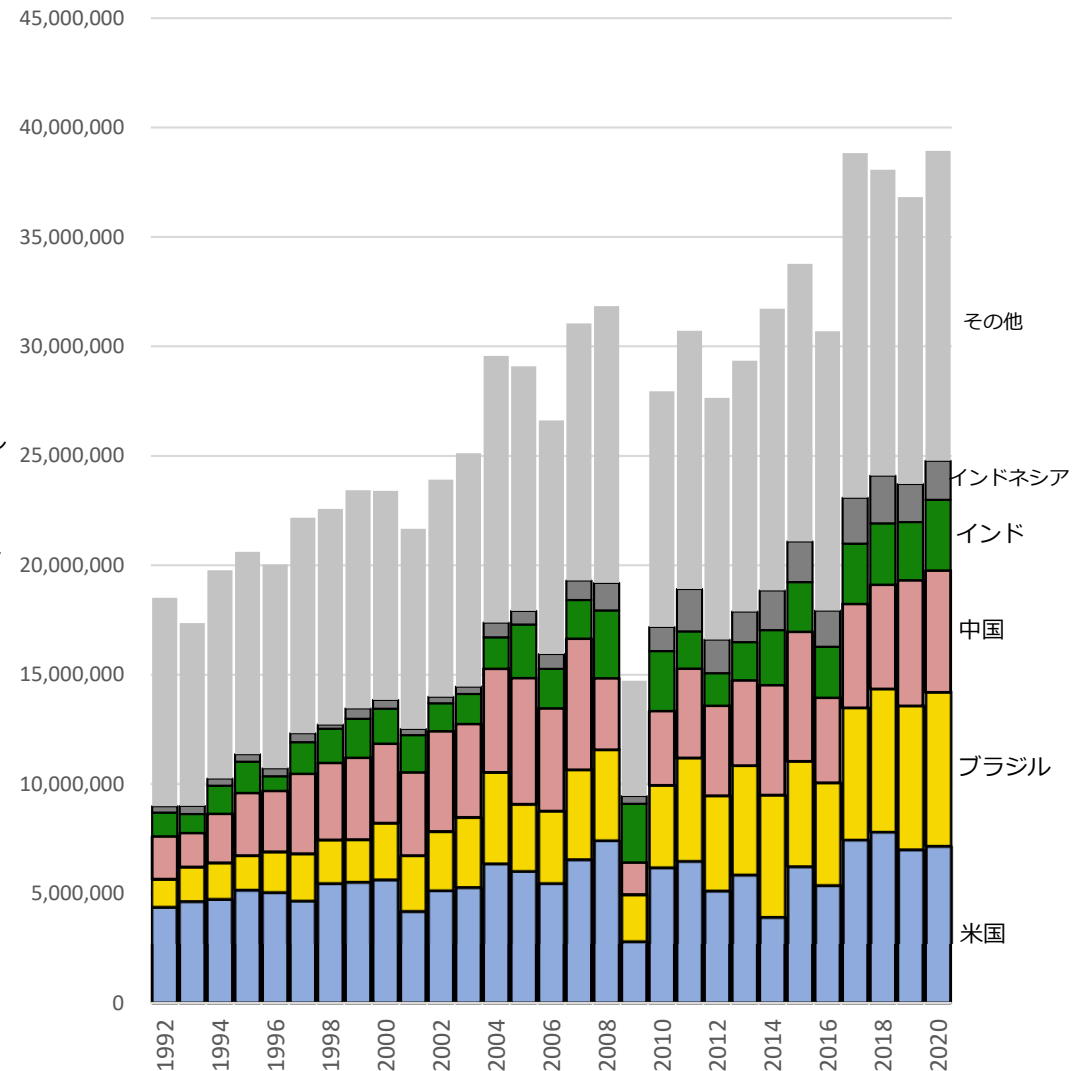
輸出国の推移

単位：トン



輸入国の推移

単位：トン



資料：FAO STATを基に農林水産省が作成(Nutrient potash K2Oの数値) (単位：成分百万トン)

注：2020年時点における上位5か国と1992年時点における上位3か国を抽出

(参考) 日本の成分ベースの輸入量は約325千トン

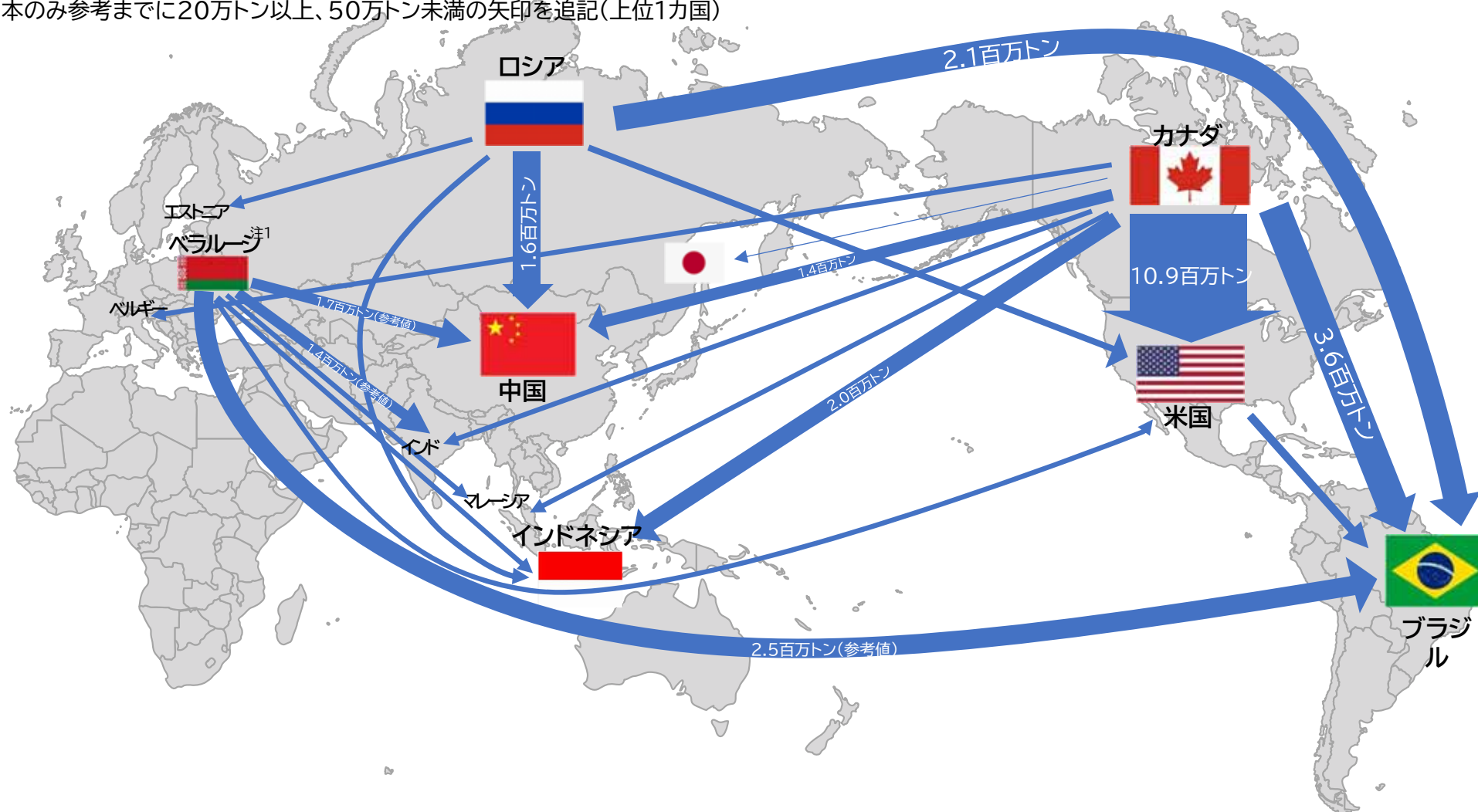
塩化加里の貿易フロー(2021年)

K

○ 加里鉱石の産地が偏在しており、塩化加里(塩化カリウム)の輸出は、カナダから米国やブラジル等に、ロシアから中国やブラジル等に、ベラルーシからアジア諸国に輸出される量が比較的多い。

※ 50万トン以上輸出している貿易フローを作図

※ 日本のみ参考までに20万トン以上、50万トン未満の矢印を追記(上位1カ国)



資料: Global Trade Atlas を基に農林水産省が作成・推計

注: HSコード、310420(塩化カリウム)の数値

注: レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある

主な海外の肥料メーカーの動向

注：各社公表資料、報道等をベースに作成

K N

Nutrien



世界最大手。2018年にカナダの肥料大手2社（Potash CoとAgrium）が合併して設立。主力領域はカリ製品であり、世界約2割のシェアを有する。カリウム、りん酸塩鉱山を運営するほか、米国最大の農業関連の小売業者でもあり、肥料、農薬、種子等を実店舗やオンラインで販売。

売上高	4兆9,628億円
従業員数	約2万5千人

N

Yara



ノルウェーに本社を置く。窒素肥料で世界最大手。主要事業領域は尿素、硝酸塩、アンモニア等の窒素化合物を主とした窒素肥料の製造、販売を手掛ける。ノルウェー政府が株式の36.21%を保有。

売上高	3兆1,311億円
従業員数	約1万8千人

P K

Mosaic



2004年に化学肥料メーカー大手のIMCとカーギルの肥料部門が経営統合して設立。りん酸塩の採掘において世界最大。米国、ペルーにりん鉱山、南米等にカリ鉱山を保有。事業ポートフォリオは売上ベースで、りん23%、加里27%、合成肥料43%、その他6%。

売上高	2兆5,053億円
従業員数	約1万4千人

P

OCP
(モロッコ国営)



1920年に設立。モロッコ国営のリンの鉱工業および肥料製造会社。世界のりん酸塩市場の約3割のシェアを有する。

売上高	1兆4,782億円
従業員数	約1万7千人

N

CF Industries



米国に本社を置く窒素質肥料製造メーカー。北米の製造拠点のほか、英国とトリニダードトバゴに合併会社を保有。

売上高	1兆4,653億円
従業員数	約2,700人

K

Uralkali



1934年設立のロシアの大手加里鉱工業・肥料製造会社。

売上高	5,443億円
従業員数	約2万人

K

Belaruskali
(ベラルーシ国営)



1958年設立のベラルーシ国営の加里鉱工業・肥料製造会社。

売上高	3,144億円
従業員数	約1万6千人

【参考】

- ・中国については、中国国有の化学大手の中国中化集団（シノケム）や中国化工集団（ケムチャイナ）の傘下企業などで肥料事業を展開しているが、肥料事業セグメントの詳細は非開示。
- ・なお、中国政府は2021年3月31日、中国中化集団（シノケム）と中国化工集団（ケムチャイナ）の経営統合を認可したと発表。今後の統合手続きを経て、売上高17兆円規模の企業が誕生する見込み。

（参考）日本の大手肥料メーカーの売上高は約500億円。

注：売上高は各社の直近決算報告年度の全社売上高。円建の売上高は便宜的に2022年（暦年）の平均為替レート131円/USD（※1円未満切捨）にて算出。Sinofertは元建のため、現時点のレートで円換算。Beraruskaliは現地報道ベースの情報。

参考(国内の肥料の安定供給に向けた対応)

肥料の安定供給に向けた関係対策の全体像

- 令和3年の肥料原料の輸入の停滞や輸入価格の上昇を受け、国内肥料資源の活用、原料の安定調達、価格高騰等の観点から肥料総合対策パッケージを構築。

	肥料総合対策パッケージ	具体的な対応
国内資源活用	堆肥や下水など肥料成分を含有する国内資源の利用拡大・広域流通 (化学肥料との混合を含む)	○ 土壌診断や局所施肥などによる適切な施肥体系の普及 ○ 堆肥センター、ペレット工場等の整備 ○ 広域流通・保管施設等の整備 ○ 国内資源の利用を含むコスト低減技術導入支援   下水汚泥からのりん回収により製造した肥料   堆肥と化学肥料を混合した肥料
安定調達	平時の対応 - 資源外交をはじめとする調達国の多角化対応 - 原料備蓄制度の創設 調達困難時の備蓄放出 (原料価格上昇の影響緩和)	○ 経済安全保障推進法における肥料原料備蓄制度の創設 ○ 原料供給国への訪問等を通じた安定供給への働きかけ  りん安の供給国であるモロッコへの武部副大臣の訪問 (令和4年5月)  塩化加里の供給国であるカナダの天然資源大臣と野村大臣の会談 (令和5年1月) R4.9/28(水)の岸田総理とモロッコのアハヌーシュ首相との会談において、先方からりん安を含む肥料の安定供給で協力する旨発言。
価格急騰対策	価格急騰時の対応 肥料価格高騰対策事業	○ 肥料価格高騰対策事業 (R4 予備費・788億円) 化学肥料の使用量低減に向けた取組を行う農業者に対し、肥料コスト上昇分の7割を支援 →肥料価格高騰による農業経営への影響緩和

肥料原料の備蓄

- 2022年5月に成立した経済安全保障推進法に基づく「特定重要物資」として肥料を指定し、その安定供給に取り組む肥料原料の輸入事業者・肥料製造事業者による肥料原料の備蓄の取組を支援。

経済安全保障推進法（2022年5月成立）の概要

安全保障の確保に関する経済施策を総合的かつ効果的に推進するため、経済施策として、(1)重要物資の安定的な供給の確保、(2)基幹インフラ役務の安定的な提供の確保、(3)先端的な重要技術の開発支援、(4)特許出願の非公開の4つの制度を創設。

【重要物資の安定的な供給の確保のための制度の概要】

政府は安定供給を確保すべき物資を「特定重要物資」として指定。民間事業者が策定した供給確保のための計画を所管大臣（肥料の場合は農林水産大臣）が認定し、支援措置を実施。

＜特定重要物資の指定＞ 抗菌性物質製剤、**肥料**、永久磁石、工作機械・産業用ロボット、航空機の部品、半導体、蓄電池、クラウドプログラム、天然ガス、重要鉱物並びに船舶の部品の11物資を政令で指定（2022年12月23日施行）

（肥料の指定理由） 肥料の原料は、資源が特定の地域に偏在しており、そのほとんどの供給を輸入に依存。世界的な穀物需要の増加や紛争の発生等の国際情勢の変化により、原料の供給途絶リスクが顕在化。

肥料の安定供給確保に向けた施策

【支援する取組】

肥料原料の輸入事業者・肥料製造事業者による肥料原料（りん安・塩化加里）の備蓄の取組

【目標】

2023年から、りん安・塩化加里について、保管施設の整備を進めるとともに原料備蓄水準を高め、2027年度までに、年間需要量の3か月分相当の備蓄を目指す。

【支援内容】（令和4年度補正予算額：16,000百万円）

- ① りん安・塩化加里を備蓄するために必要な保管費用（保管料・保険料等）
- ② りん安・塩化加里を保管するために必要な保管施設の整備費用

※ 経済安全保障推進法に基づく安定供給確保支援法人として一般財団法人肥料経済研究所を指定し、当該団体において基金を管理。

肥料原料の安定調達に向けた外交対応

- 肥料原料の世界的な供給国を訪問し、肥料原料の安定供給について、政府関係者等に直接働きかけ。

マレーシア（尿素）

令和4年7月、宮崎前農林水産大臣政務官は、尿素の世界的な供給国であるマレーシアを訪問。



令和4年7月
宮崎前政務官のマレーシア訪問

モロッコ（りん安）

令和4年5月、武部前農林水産副大臣は、りん安（りん酸アンモニウム）の原料であるりん鉱石の世界的な産出国であるモロッコを訪問。



令和4年5月
武部前副大臣のモロッコ訪問

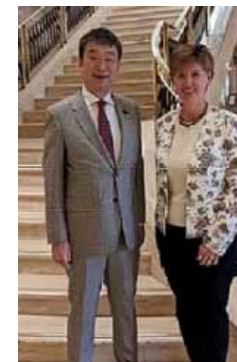
カナダ（塩化加里）

令和4年6月、中村前農林水産副大臣は、日本の肥料原料の主な輸入事業者と共に、塩化加里（塩化カリウム）の世界的な産出国であるカナダを訪問。

また、令和5年1月、野村農林水産大臣は、ウィルキンソン・カナダ天然資源大臣に塩化加里の安定供給を要請。



令和5年1月
野村大臣とウィルキンソン大臣の面会



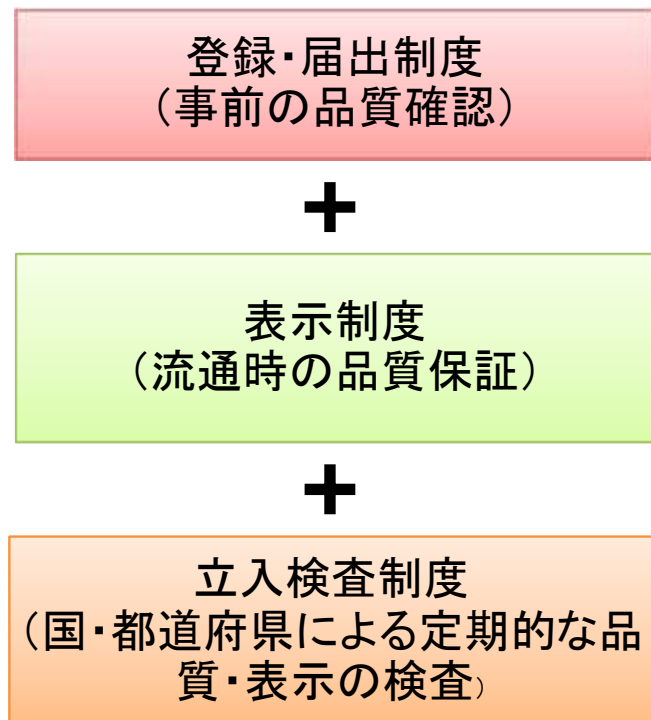
令和4年6月
中村前副大臣のカナダ訪問



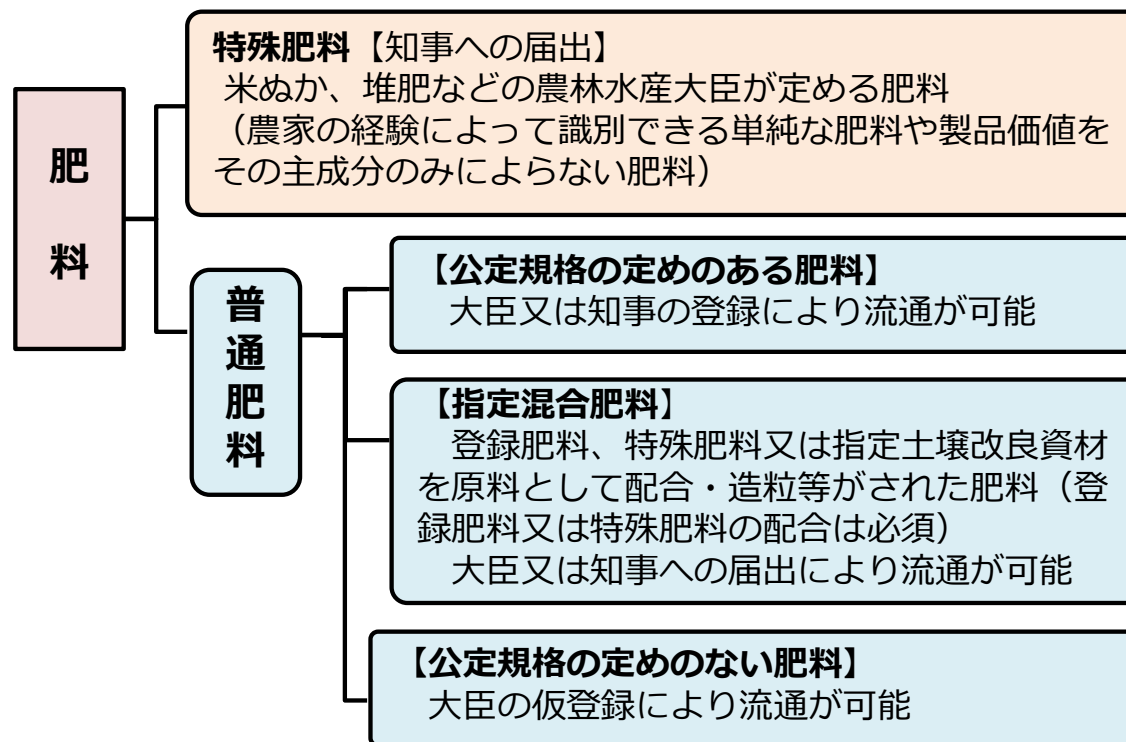
(参考) 肥料制度のしくみ

- 肥料の品質を確保するため、肥料業者には製品の登録又は届出をすることが義務づけられている。また、肥料の販売にあたっては、成分含量や原材料等の必要な情報を保証票に記載し、個別の製品に添付することが義務づけられている。
- 肥料は特殊肥料と普通肥料に大別される。米ぬか、堆肥などの特殊肥料以外のものはすべて普通肥料に分類される。普通肥料は、さらに登録肥料、指定混合肥料及び仮登録肥料に分かれている。

■ 肥料制度の仕組み(制度の構成)



■ 肥料制度の仕組み(肥料の区分)



(参考) 肥料の登録

- 公定規格の定めのある肥料を生産又は輸入する場合、その銘柄ごとに農林水産大臣又は都道府県知事の登録を受ける必要がある。

登録肥料の種類

【肥料の生産】

- ・化学的方法によって生産される普通肥料
- ・窒素、りん酸、加里、石灰及び苦土以外の成分を主成分とする普通肥料
- ・汚泥肥料等、銘柄ごとの主成分が著しく異なる普通肥料
- ・その他の普通肥料(有機質肥料、石灰質肥料など)

【肥料の輸入】

- ・すべての普通肥料

申請先

農林水産大臣
(書類の提出先はFAMIC※1)

都道府県知事

農林水産大臣
(書類の提出先はFAMIC)

※1 (独法)農林水産消費安全技術センター

肥料登録の流れ(農林水産大臣の登録肥料)

申請

公定規格※2の定めのある肥料を生産・輸入する場合、銘柄ごとに登録を申請

調査

FAMICにおいて

- ・公定規格の適合性
- ・肥料の名称の適正性
- ・保証成分、材料、生産工程等を確認

登録

FAMICからの報告に基づき農林水産省において、登録を判定し登録証を交付。

※2 肥料の種類毎に、含有すべき主成分の最小量、含有を許される有害成分の最大量等を定めたもの。

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2023 年 5 月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度 2023/24 年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大
学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 月報で一番関心／参考にしている項目のうち、特別分析トピックを選択された場合、特
に関心があったテーマがあれば教えてください。
- 7 最近で最も興味を引いた／役立った記事は何ですか。（自由記載）
- 8 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
中国の需要・輸入動向
- 9 特別分析トピックで取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
- 10 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html

